

各分野別委員会から提出の  
研究開発プログラム評価まとめ

## 目 次

1. 情報科学技術分野	1
2. ナノテクノロジー・材料科学技術分野	10
3. 量子科学技術分野	
4. 環境エネルギー科学技術分野	19
5. 核融合科学技術分野	43
6. ライフサイエンス分野	
脳科学	48
ライフサイエンス	57
7. 防災科学技術分野	
8. 航空科学技術分野	75
9. 原子力科学技術分野	80

## 研究開発プログラム評価

(令和2年度)

「研究開発計画」(平成29年8月最終改訂 研究計画・評価分科会決定)に掲げられている「中目標(情報科学技術分野)」に対応する現行の取組の全体を俯瞰した上での気づき(連携の強化、着手すべき研究分野等、今後取り組むべき事項)として考えられる内容は、以下のとおり。

中目標(情報科学技術分野) :

我が国が世界に先駆けて超スマート社会を形成し、ビッグデータ等から付加価値を生み出していくために、産学官で協働して基礎研究から社会実装に向けた開発を行うと同時に、技術進展がもたらす社会への影響や人間及び社会のあり方に対する洞察を深めながら、中長期的視野から超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要な基盤技術の強化を図る。

＜中目標に対応する現行の取組＞

「理化学研究所・革新知能統合研究センター」

「JST AIP ネットワークラボ」

「Society 5.0 実現化研究拠点支援事業」

「スーパーコンピュータ「富岳」(ポスト「京」)の開発」

「スーパーコンピュータ「京」及び革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ(HPCI)の運営」

「学術情報ネットワーク(SINET)の整備・運用」

研究開発プログラムの評価に当たっての気づき

### 1. 研究開発プログラムに対する気づき

- 第5期科学技術基本計画において示された超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要な基盤技術(サイバーセキュリティ技術、IoTシステム構築技術、ビッグデータ解析技術、AI技術、デバイス技術、ネットワーク技術、エッジコンピューティング)については、「個別の取組の概要」に記載の各施策を通じて、令和元年度中に一定の強化が図られたと言える。
- 各施策を進めていくに当たり、理化学研究所 革新知能統合研究センター(以下「理研AIPセンター」という。)とJST AIP ネットワークラボの連携や、学術情報ネットワーク(以下「SINET」という。)とスーパーコンピュータ「京」(以下「京」という。)をはじめとする革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ(以下「HPCI」という。)の接続による一体的な情報基盤の整備など、施策間の連携を推進するための枠組みができている。
- 各施策を通じた研究開発の強化や情報基盤の整備を通じて、データ

の積極的な利活用が促進され、効果的、効率的に研究開発が推進されてきた。

- また、人材育成については、JST AIP ネットワークラボに 35 歳未満の研究者を対象とするプログラムとして ACT-i や ACT-X が創設されたこと、理研 AIP センターにおいて多くの研究開発インターンシップ生を受け入れていること、ポスト「京」のアプリケーション開発において若手研究者の取組を多く支援してきたこと等により、情報科学技術分野の若手研究者の育成にも取り組んできた。
- こうした進展が見られる一方、情報科学技術の発達速度は極めて速く、国際競争も激しい中で、我が国が世界に先駆けて Society 5.0 が描く社会を実現していくためには、次世代の情報科学技術を支える基盤的分野の研究や人材育成を一層強化し、情報分野が先導する日本発のイノベーション創出を活性化させていく必要がある。AI 技術や様々な分野の情報化を支え、競争力の源泉ともなる情報科学技術の基盤を構築する分野への研究開発投資や人材育成の充実が一層求められている。
- このため、情報科学技術の基盤的分野をベースとし、Society 5.0 が目指す知識を基盤とする人間中心の社会の構築に向けて、自然科学や工学だけでなく人文・社会科学や教育等も含む多様な研究分野との連携や産学官での連携、あらゆる分野の知識・情報の共有が有機的に行われる「スマート研究プラットフォーム」の構築を進めることが重要である。
- スマート研究プラットフォームにおいては、応用分野の研究者等との密な連携により、ニーズが研究にフィードバックされ、新たな成果が生み出される情報研究エコシステムを構築（大学等を実証の場として活用）することが重要である。その際、大学発ベンチャー等を活用し、民間投資を取り込みながら社会実装を進めることで、世界に先駆けた超スマート社会の形成を加速度的に推進することが重要である。
- また、大学・大学共同利用機関法人・国立研究開発法人・民間企業等の情報研究拠点とスーパーコンピュータ「富岳」及び多種多様な大学等の先端的計算資源、多様なデータが、大容量、高速、セキュアな情報ネットワーク（SINET）で接続され、全国規模のスマート研究プラットフォームとして一体的かつ有効に機能するよう、一層の機能・体制の強化を図っていくことが重要である。このように、スマート研究プラットフォームの構築に、情報基盤の整備が必須であることは言うまでもなく、今般の新型コロナウイルス感染症の流行により、その重

要性は研究面、教育面からも一層高まったと言える。このような状況を踏まえ、次世代の情報基盤のあり方について迅速に検討を行うべきである。また、情報基盤のうち、計算基盤の整備に係る検討に関しては、「京」から「富岳」への移行の際、フラッグシップコンピュータが約1年半に渡って利用不可能な状況であったことの影響についても検証を行う必要がある。

- 人工知能に関する研究についても、AI 戦略等に基づき、Trusted Quality AI 等の研究開発を着実に進めていく必要がある。その際、ビジョンの明確化や各課題の目標設定、研究内容の整理等を柔軟に行うべきである。
- 社会や科学の発展におけるデータの価値の高まりを踏まえ、国の重要な資源として研究データ基盤の整備に取り組むべきである。その際、オープン・クローズド戦略を明確化するとともに、民間データとの連携や各種データの連結等を円滑に進めることができるよう相互通用性の確保にも留意することが重要である。
- 研究におけるデータの適正かつ円滑な活用の促進に向けて、情報法等の専門家その他の ELSI (Ethical, Legal and Social Issues) の専門家や様々なステークホルダーと連携しつつ、研究におけるパーソナルデータを含む各種データの取扱いに関し、ルールやガイドライン等の整備に取り組むことが重要である。
- 情報科学技術分野の評価は、論文数やサイテーション数等のみで測ることは適切ではなく、アルゴリズムやデータの利用頻度、ソフトウェアや標準規格の開発等への貢献実績、また、そこから生み出された学際的・分野横断的な活動実績、社会の構造や制度への影響といった社会的価値等、新たな評価基準のあり方を不断に検討しそれらを取り込んだ評価システムを構築する必要がある。これにより、多様な才能の糾合や若手の新たな挑戦を促進することが重要であるとともに、日本が本分野を世界的にリードしていくことにつながると考えられる。
- 前述のとおり、情報科学技術の発達速度は極めて速く、国際競争も激しい。また、今般の新型コロナウイルス感染症の流行のように、社会全体に大きな影響を与える事象も生じている。そのような中で、事業を効果的に進めていくには、例えば、理研 AIP センターの中間評価結果においても示されているように、ビジョンや戦略の明確化とその適時適切な見直し、関係者間での共有が極めて重要である。そのため、今後は、既存の評価に加えて、各事業のビジョンや戦略、次世代の事業の方向性等について、地方や海外の有識者、若手研究者も含め、

地理的制約無しに議論する場として、オンラインでの意見交換の機会等を設けることも一案ではないか。

- 一方、各プロジェクトに対する国の基本的な方針や枠組みは堅持すべきである。例えば、ボトムアップ的手法とトップダウン的手法がその時々での判断で変更されたり、プロジェクトの予算がその時々で大きく変更されたりするようなことは、現場に混乱を与えるものであり、プログラム評価の実施に当たっても留意すべきである。

## 2. 研究開発プログラム評価を実施するに当たっての気づき

- 研究開発プログラム評価に当たっては、研究開発プログラム全体の中での各事業の位置付を再確認するとともに、重点化等によって本来実施すべきであるにも関わらず実施されていない事業がないか等の観点等が重要である。加えて、研究の進展によって新しい研究領域や新しい研究の視点が創出されているか、また、国際動向等に照らして我が国の強みになる部分はどこかなどについても確認することが重要である。
- 評価の頻度を高めれば、研究成果の改善につながるとは限らないことから、評価のタイミング、評価にかかる時間、評価の方法等について工夫する必要があると考える。例えば、今回、情報委員会において第6期科学技術基本計画の策定に向けて分野別で議論を行い、提言を取りまとめたことと研究開発プログラム評価は内容的に重複する作業とも考えられる。今後、正式実施するとすれば、毎年行うというよりも、次期科学技術基本計画の策定に向けた議論のプロセスの1つとして、議論開始のタイミング等で実施することとするのが適当ではないか。
- 仮に、毎年行うべきものとする場合、研究開発関連施策については、各事業に関する研究計画・評価分科会での評価や文部科学省としての政策評価、行政事業レビューを別途実施しており、それらに重ねて研究開発プログラム評価を実施することは、行政事務負担が大きい。したがって、例えば、政策評価のプロセスに統合するか、少なくとも、可能な限り評価項目を共通化し政策評価や行政事業レビューの結果を活用して、効率的な実施を行うことが必要である。
- 加えて、研究開発プログラム評価は各事業の取組の評価に加えて実施するものであることから、結果的に、研究者の負担をさらに増加させる懸念がある。そのため、上述のような効率的な実施に加え、例えば、異なる事業の評価で同じ議論が繰り返されないようにする、ある

いは、日頃から、各事業のシンポジウム等の研究者コミュニティでの議論の場に評価者にも参加をしてもらうことによって、被評価者の負担を軽減する方法等も考えられる。

- 一方で、今般の新型コロナウイルス感染症の流行のように社会的価値観に劇的な変化をもたらされることで、Society 5.0に求められる未来社会に新たな視点を追加する必要も生じてくる。このような突発的な事態にも適切に対応できるよう、状況に即応して研究開発プログラム評価を行い、計画変更が行えるようにしておくことも重要である。
- 評価基準については、「1. 研究開発プログラムに対する気づき」に記載のとおり、研究開発プログラム評価の実施に当たっても、このような新たな評価基準のあり方について議論を深める必要がある。
- また、移り変わりの速い情報科学技術分野においては、被評価者の側から、施策の目標や評価基準を提案し、被評価者と評価者とが施策の進捗に応じてそれらを適切に見直しを行いつつ、相互に共有していくことが重要である。また、評価基準に関して、日本が世界に先駆けていることを示すことができるものとして、国際的にも通用するものを検討することが重要である。
- 情報科学技術分野において、次のビジョンや戦略を考えることのできる、次世代のリーダーとなる人材を養成するため、研究開発プログラム評価をはじめとする評価の機会には、若手研究者が多く参加できるようにすることが重要である。その際、オンライン会議を活用すれば、時間と空間の自由度は大きく向上するため、地方の若手人材も参画しやすくなると考えられる。
- また、データ科学や計算科学の普及を通じて、情報科学技術は、他の多くの専門分野や各種社会システムの基盤となってきた。そのため、研究開発プログラム評価には、情報科学技術の専門家だけでなく、他の専門分野で情報科学技術を活用している経験を有する専門家、社会実装や事業化等の知識・経験を有する専門家も含めることが重要である。このようなことを通じて、新しい科学哲学を国として共有していくことが可能となると考える。

## 【個別の取組の概要】

事業名 (事業期間)	予算実績	計評分科 会におけ る評価 実績		科学技術基本計画等への 貢献状況	備 考
理化学研究所・ 革新知能統合研 究センター（理 研 AIP センタ ー） (2016～2025)	2016 年度 14.5 億円 2017 年度 29.5 億円 2018 年度 30.5 億円 2019 年度 30.5 億円	H28	事前 評価	<p>「超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術」として第5期科学技術基本計画（以下「基本計画」という。）に掲げられている「AI 技術」等の研究開発拠点として、「AI 戦略 2019（令和元年6月）」等の政府戦略に基づき、理論研究を中心とした革新的な基盤技術の研究開発を実施している。</p> <p>その際、センターに「社会における人工知能研究」グループを設け、技術の進展がもたらす社会への影響等について、人文社会科学分野の研究者を交えた研究を行っている。</p> <p>国内の人材を糾合するとともに、海外機関との MoU の推進や国際ワークショップの開催等を通じて海外研究者を多数受け入れる等、国際的な拠点化が進められている。また、企業との共同研究を通じた技術指導や、大学院生のインターンシップの受入れを通じ、本分野の高度人材育成にも貢献している。（別添参考1）</p> <p>本センターでの研究に基づく論文が、トップカンファレンスにおいて継続して採択される等、世界の研究コミュニティの中でのプレゼンスも高まっており、我が国の AI 関連研究の拠点として、革新的な基盤技術の創出に向けた取組が進められている。</p> <p>【科学技術基本計画等との関係】</p> <p>「超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術」として第5期科学技術基本計画に掲げられている「AI 技術」「ビッグデータ解析技術」「IoT システム構築技術」「サイバーセキュリティ技術」の研究開発を強化するものである。</p>	※
【参考】 JST AIP ネット ワークラボ（戦 略的創造研究推 進事業の一部） (2016～2025)	2016 年度 40 億円 2017 年度 41.6 億円 2018 年度 55.1 億円	—	—	<p>科学技術振興機構（JST）の戦略的創造研究推進事業において情報科学技術分野に関する13の研究領域を設定し、それらを一体的に運営することで、若手研究者の独創的発想や、新たなイノベーションを切り開く挑戦的な研究課題を支援している。</p> <p>進展が見込める研究課題に対して当初の支援期間</p>	

	2019 年度 62.4 億円 (運営費 交付金中 の推計 額)			終了後にも追加支援を行う等、研究者のニーズに合わせた柔軟な取組が実施されている。(別添参考2)  【科学技術基本計画等との関係】 「超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術」として第5期科学技術基本計画に掲げられている各技術の研究開発と人材育成を強化するものである。	
Society 5.0 実現化研究拠点支援事業 (2018~2022 : ステージゲート 方式を経て最大 5年間延長可能)	2018 年度 7.0 億円 2019 年度 7.01 億円	H29	事前 評価	Society 5.0 の実現の先端中核拠点として大学等がイノベーションの先導役となるように、イノベーションを実現できる拠点の形成の支援を行っている。採択された大阪大学において、産業界や自治体等と連携し、データ収集システムの構築、データ取得の仕組の整備等を行い、個人の医療・健康情報に日常生活の様々な活動情報を加えたパーソナル・ライフ・レコードを収集・活用する基盤(プラットフォーム)を構築するための体制が整った。(別添参考3)  【科学技術基本計画等との関係】 本事業の目的については、未来投資戦略 2017 (平成 29 年 6 月 9 日) に記載されている「世界の Center of Excellence を目指し、組織の長のトップマネジメントの下、内外のトップ研究者を結集し、世界トップレベルの大学・研究開発法人の研究拠点がベンチャーを含む産業界と連携してイノベーションを生み出せるよう、来年度中に少数の拠点到絞りに絞ってリソースを集中投下する。」に対応する取組である。	
スーパーコンピュータ「富岳」 (ポスト「京」) の開発 (2014~)	2015 年度 40 億円 2016 年度 67 億円 2017 年度 67 億円 2018 年度 265 億円 2019 年度 243 億円	H30	中間 評価	Society 5.0 を支える基盤である「富岳」を開発することが目的である本事業の進捗は順調であり、ポスト「京」システム設計結果に基づきポスト「京」(「富岳」)の製造・設置を着実に推進することが適当であると総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)における中間評価において判断された。 プロジェクトの開発目標である、最大で「京」の100倍のアプリケーション実効性能及び30~40MW以下の消費電力について達成の見通しが得られた。 「富岳」のシステムの特色である、世界最高水準の消費電力性能、計算能力、ユーザの利便・使い勝手の良さ、画期的な成果の創出の4点を兼ね備えた、総合力のあるスーパーコンピュータを実現すべく、システムの詳細設計とアプリケーションの協調的な開発	※

				<p>(Co-design) が進められた。【出典：(平成 30 年 11 月 22 日) 総合科学技術・イノベーション会議が実施する国家的に重要な研究開発の評価「フラッグシップ 2020 プロジェクト (ポスト「京」の開発)」の中間評価結果】 (別添参考 4)</p> <p>【科学技術基本計画等との関係】 第 5 期科学技術基本計画に掲げられている、「産学官が利用する研究施設・設備及び知的基盤の整備・共用、ネットワーク化」に対応するものである。</p>
<p>スーパーコンピュータ「京」及び革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・インフラ (HPCI) の運営 (2010～)</p>	<p>2016 年度 142 億円 2017 年度 131 億円 2018 年度 126 億円 2019 年度 101 億円</p>	H29	中間 評価	<p>理化学研究所 計算科学研究センター (R-CCS) における「京」の運用及び登録機関である高度情報科学技術研究機構 (RIST) における利用者選定及び利用支援については、研究者等との意見交換や要望等を踏まえ、広く一般ユーザの利便性の向上に向けた取組が行われるなど、共用法及び基本方針に基づき適切に実施された。「京」を中核とする HPCI が構築され、利用者視点での計算科学技術推進の環境が整った。「京」以前には産業界では不可能であった大規模計算や大量実行が可能となり、10～15 年程度先の研究開発の方向性及びその手段の検証が実現できた。また、これらにより「予測の科学」というべきものが実現しつつあり、様々な分野の研究開発にシミュレーションを活用したイノベーション創出への期待がもたらされた。【出典：(平成 28 年 12 月 5 日) 特定高速電子計算機施設 (スーパーコンピュータ「京」) 中間検証報告書】 (別添参考 5)</p> <p>【科学技術基本計画等との関係】 第 5 期科学技術基本計画に掲げられている、「産学官が利用する研究施設・設備及び知的基盤の整備・共用、ネットワーク化」に対応するものである。</p>
<p>【参考】 学術情報ネットワーク (SINET) の整備・運用 (2004～)</p>	<p>国立大学 法人運営 費交付金 等の内数 (大学共 同利用機 関法人情 報・シス テム研究</p>	—	—	<p>2016 年度から全都道府県を 100Gbps 回線で結ぶ SINET5 の運用が開始され、2018 年度には全ての国際回線の 100Gbps 化や、モバイル機能である「広域データ収集基盤 (モバイル SINET)」の整備など、900 を超える加入機関 (大学・研究機関等) に対して、世界最高水準の超高速・低遅延・高信頼なネットワーク環境が提供された。さらに、2019 年度には通信容量が逼迫していた東京～大阪間に 400Gbps 回線を世界に先駆けて整備し、更なる研究教育環境の充実・強化が</p>

	<p>機構国立 情報学研 究所)</p>		<p>図られた。</p> <p>このほか、世界的なオープンサイエンスの潮流の中で、2017年度より「研究データ基盤（NII Research Data Cloud（NII-RDC）」の整備がSINET上に進められ、2020年度からの本格運用に向け、着実に取組が進捗している。（別添参考6）</p> <p>このSINETの機能強化により、サイバー空間上でデータの積極的な利活用が促進され、効率的な研究の推進だけでなく、分野を越えた新たな価値の創出も期待される。</p> <p>【科学技術基本計画等との関係】</p> <p>第5期科学技術基本計画に掲げられている、「（大学等の）情報基盤の強化と円滑な運用」や「研究成果・データを共有するプラットフォームの構築」に対応する取組である。</p>
--	------------------------------	--	---

※ 理研 AIP センターについては、H27 に CSTI による事前評価、H28 に CSTI による再評価を受けている。

スーパーコンピュータ「富岳」（ポスト「京」）の開発については、H25 に GSTP による事前評価、H27 に CSTI による再評価、H28 に CSTI による基本設計評価、H30 に CSTI による中間評価を受けている。

## 研究開発プログラム評価票

（令和2年度）

「研究開発計画」（平成29年8月最終改訂 研究計画・評価分科会決定）に掲げられている「中目標（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）」に関する取組（※）の全体を俯瞰した上での気づき（ナノテクノロジー・材料科学技術分野における各事業の必要性や有効性、今後取り組むべき事項等）として考えられる内容は以下の通り。

（※）「元素戦略プロジェクト（研究拠点形成型）」「ナノテクノロジープラットフォーム」「材料の社会実装に向けたプロセスサイエンス構築事業（Materialize）」

<p>研究開発プログラム評価にあたっての気づき</p>	<p>（俯瞰した評価全般にあたっての気づき）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ ナノテクノロジー・材料科学技術分野における中目標の下で行われている、「元素戦略プロジェクト&lt;研究拠点形成型&gt;（以下『元素戦略プロジェクト』という。）」、「ナノテクノロジープラットフォーム」、「材料の社会実装に向けたプロセスサイエンス構築事業（以下、『マテリアライズ』という。）」の3つの事業について、それぞれが相互補完的なポートフォリオを形成し、三位一体でその成果が最大限発揮される関係にある点、また、主に基礎研究分野で活躍している研究者が、産業応用に繋がる研究開発にも参加できる機会を提供している点は評価できる。集中的に研究開発を実施する事業と、全体を支援する基盤としての事業のバランスもとれている。</li> <li>○ 参事官（ナノテクノロジー・物質・材料担当）付が行っている3つの事業はナノテクノロジー・材料科学技術分野において行われている事業の中の一部であり、分野全体を俯瞰するというのであれば、戦略的創造研究推進事業等のJSTの取組、各種拠点事業、大型の科研費、研究開発法人の取組等の公的投資を広く見る必要がある。NISTEPやCRDS、他委員会等が行う俯瞰的な調査等も踏まえつつ、分野の中での3つの事業の位置づけを明確にした上で、どのような効果があったか、相乗効果が発揮出来ているか、相互補完関係ができていないか、人材が育っているか、予算が足りているか、重要な研究開発が止まってしまっていないか、守るべき研究開発は何か、将来的に世界に勝てる案件は何か、これらを踏まえて、さらに若手研究者や学生に魅力のある分野となるにはどうあるべきか等を議論すべきである。</li> <li>○ 今後は他事業や他委員会の動向も含め、ナノテクノロジー・材料科学技術委員会（以下、『ナノ材委員会』という。）においてヒアリング等を継続的に行うことで、今回のような俯瞰的な評価も有意義な取組になると考えられる。また、産業への出口という観点で考えると、経済産業省等の事業も把握しておく必要があり、委員会の場を活用して他の府省庁と意見交換等を行うことも</li> </ul>
-----------------------------	---

有効である。加えて、断片のみを見た、通り一遍の評価になってしまわないよう、過去から未来に向けた時間軸を頭に置いて評価を行うことが重要である。分野全体の事業の広がりやその歴史的推移、議論された論点や注意点の列挙など、俯瞰図（議論の地図）を常に見ながら戦略的に事業の設計・評価・推進を行えるようにする必要がある。

（中目標達成のための戦略策定に係る気づき）

- ナノ材委員会では、中目標達成のため、平成30年8月に「ナノテクノロジー・材料科学技術研究開発戦略」をとりまとめた。ナノ材委員会がまとめた戦略が効果的に発展し、文部科学省及び経済産業省が設置する有識者会議におけるとりまとめ「マテリアル革新力強化のための政府戦略策定に向けて」（令和2年6月）につながっている。今後、とりまとめを踏まえ、AI、量子、バイオ、環境エネルギー等の広範で多様な研究領域・応用分野を支える基盤技術として更なる政策の推進が必要である。世界的な研究動向やこれまでにストックされてきた日本の強みを踏まえつつ、日本として強化していくべきサイエンス領域は何であるかよく吟味した上で、施策を立案・実施する必要がある。
- 新型コロナウイルス対応においても、また経済安全保障上においても、マテリアル革新力強化に向けた取組は重要であり、今後の推進において考慮する必要がある。加えて、マテリアル革新力強化のため、データ蓄積・活用や、データ駆動型の研究開発の促進をはじめとしたマテリアル研究開発のデジタルトランスフォーメーションを推進することが、中目標達成に大きく貢献すると考える。3つの事業に共通する課題として、大量のデータがすでに蓄積されている、または今後蓄積されていく状況を踏まえ、効率的・効果的に蓄積されたデータを利活用するシステムを構築すること等が重要との指摘があった。ナノ材委員会においても、今後、データ駆動型の研究開発のため、すでに実施した情報統合型物質・材料開発イニシアティブ（MI2I）や戦略的創造研究推進事業等のプロジェクトの振り返りや、重点分野において成果を得るためにデータの必要性・重要性の更なる検討が必要ではないかとの指摘もあった。

（個々の事業の取組みから見える研究開発プログラムの推進に係る気づき）

- 元素戦略プロジェクトでは、物理、化学、材料科学、工学など学問分野の壁を超える拠点を設計し、また材料創製、解析評価、電子論の3グループを一体的に運営して連携をはかる体制としたことで、基礎（学理）から出口（材料開発）までをつなぐ重厚で息の長い研究拠点が構築された。これにより、基礎研究に従事していた理論・解析研究者が、材料科学の問題に分野横断的に取り組む機会が与えられるとともに、多くの研究者が注目していることをまさに感じ取れる幕開け感の醸成に成功したとの評価があった。また、マテリアライズにおいては、プロセスに対してサイエンスまで立ち返り、新しい学理を構築する、これまでできてこなかった領域に踏み込んだ取組であり、制度設計について高い評価があった。こうした既存の枠組みにとらわれない、研究者が広く注目できる制度設計が今後も中目標達成の上で重要ではないか。

- ナノテクノロジープラットフォームは、大学の学術研究で使われてきた多くの最先端解析装置を、自前で装置を持ってない産学官の研究者に開放する役割を果たした画期的なプログラムであり、若手や分野横断的な研究を行っている研究者への支援をはじめとしてオールジャパンの材料科学を支えている現状が見て取れることから、中目標達成のために実施している研究開発事業にとって大きな基盤となっていることが再認識された。先端機器の老朽化・陳腐化等への対策とともに、チャレンジ精神旺盛な若手研究者にチャンスを与える取組や、良質なデータを創出・蓄積できるような（データやノウハウを提供してもらうような）環境整備及びマネジメントが今後の制度設計において、重要となるとの指摘があった。
- 3つの事業内に取組みが閉じており、中目標を達成する上で、社会実装までを見据えて、各事業の成果をどのように産業競争力に生かすかという視点が見えないとの指摘があった。また、各事業で生まれた成果の社会実装に向けた課題を整理し、施策間連携や新たな施策の制度設計へ活かすこと、ユーザ側の意見を積極的に取り込むための緊密な産業界との連携が重要との指摘があった。
- 施策の評価においては、論文の被引用数トップ1%・10%等の指標を強調しすぎると、それだけがすべてのような誤解を招き、研究者がインパクトを求めて、論文が更に出なくなるという悪循環に陥る可能性があることが指摘された。特に、プロセスに焦点を当てているからこそ、論文が比較的に出にくいと考えられるマテリアライズにおいては施策の推進にあたって評価指標の設定に留意すべきとの指摘があった。また、ナノテクノロジー・材料科学技術分野における評価指標としては、例えば、製造設備など初期経費が高額であり、ベンチャー企業の参入障壁が比較的高いと言われているため、ベンチャー企業設立だけでなく企業との大型研究に結び付いた例を追跡することや、学術分野に与えたインパクトの把握等、論文だけに限らない評価指標も重要といった指摘もあった。

【個別の取組の概要】

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～30年度）	事業名（事業期間）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況	備考
<p>①元素プロジェクトにおける査読付き論文数 H28：486 H29：557 H30：620</p> <p>②元素プロジェクトにおける研究発表数 H28：1,866 H29：1,870 H30：1,780</p> <p>③元素プロジェクトにおける特許数 H28：14 H29：17 H30：19</p>	<p>元素戦略プロジェクト&lt;研究拠点形成型&gt; (H24～R3年)</p>	<p>H28：20億円 H29：20億円 H30：20億円 R1：19億円 R2（案）：19億円</p>	<p>H27年度及び H30年度</p>	<p>中間評価</p>	<p>本事業では、我が国の資源制約を克服し、産業競争力を強化するため、希少元素を用いない、全く新しい代替素材を創成。産業競争力に直結する4つの材料領域を特定し、トップレベルの研究者集団により、元素の機能の理論的解明から新材料の創製、特性評価までを一体的に推進する研究拠点を形成している。</p> <p>【科学技術基本計画等との関係】 第5期科学技術基本計画に位置付けられている、資源の安定的な確保と循環的な利用等に大きく貢献。</p> <p>また「成長戦略フォローアップ」では、電池材料等の製造に必要な鉱物資源やエネルギー資源の着実な安定供給確保のため、資源外交や権益確保等に向けた取組を強化することが掲げられており、我が国の成長に貢献することが期待されている。</p> <p>さらに、拡大版SDGsアクションプラン2020において「SDGs実施指針」</p>	<p>H30年度中間評価では、今後の研究開発の方向性として以下の留意点が示されている。</p> <p>○関連する産業分野の変化は非常にスピーディーになっている状況があり、成果の実用化に際して早急な対応ができる体制構築に留意する必要がある。</p>

					優先課題③成長市場の創出，地域活性化，科学技術イノベーションの取組として、持続可能な成長の実現に貢献することが期待されている。	
①ナノテクノロジープラットフォームにおける査読付き論文数 H28：1034 H29：976 H30：957	ナノテクノロジープラットフォーム（H24～R3）				本事業では、ナノテクノロジーに関する最先端の研究設備とその活用のノウハウを有する大学・研究機関が連携して全国的プラットフォームを構築し、産学官の利用者に対し高度な技術支援を提供。	H30年度中間評価では、今後の事業の方向性として以下の項目等を検討することが重要とされている。
②ナノテクノロジープラットフォームにおける研究発表数 H28：3195 H29：3100 H30：2569		H28：17億円 H29：16億円 H30：19億円 R1：16億円 R2（案）：15億円	H26年度及びH29年度	中間評価	【科学技術基本計画等との関係】 第5期科学技術基本計画に位置付けられている、産学官が利用する研究施設・設備及び知的基盤の整備・共用、ネットワーク化等に大きく貢献。 また「経済財政運営と改革の基本方針2019」や「統合イノベーション戦略2019」においても同様に共用可能な施設・設備等の拡大の促進が掲げられており、本事業の貢献が期待される。	○科学技術の新たな成長に合わせて研究開発機器プラットフォームを整備すること。 ○技術支援者の今後の能力向上及びキャリアパスの拡大に、積極的に取り組むこと。 ○利用料金については、支援内容及び利用者の属性に応じた適正かつきめ細かな料金設定を行いつつ、全体としては利用料収入を増やし、それを事業の運営費に充てることでより持続的な取組につながるよう引き続き努力すること。 ○企業からの利用を更に促すため、中小企業、ベンチャー企業などとの共同研究を含めた技術支援の提供を拡大する取組を実施すること。 ○近年のIoT、AIの進展を踏まえ、データを蓄積・活用することでシミュレーション及びモデリングに対して
③ナノテクノロジープラットフォームにおける特許数 H28：104 H29：83 H30：41						
④ナノテクノロジー						

<p>ープラットフォームにおける支援件数</p> <p>H28 : 2,961 H29 : 3,027 H30 : 2,920</p>						<p>本事業が貢献できるよう、物質・材料研究機構の情報統合型物質・材料研究拠点と引き続き積極的に連携すること。</p> <p style="text-align: right;">等</p>
	<p>材料の社会実装に向けたプロセスサイエンス構築事業(R1~R7)</p>	<p>R1 : 3 億円 R2(案) : 3 億円</p>	<p>R3 年度 および R5 年度 を予定</p>	<p>中間 評価</p>	<p>本事業では、大学・国立研究開発法人等において、産学官が連携した体制を構築し、革新的な機能を有するもののプロセス技術の確立していない材料を社会実装に繋げるため、プロセス上の課題を解決するための学理・サイエンス基盤としてプロセスサイエンスの構築 (Materealize) を目指す。</p> <p><b>【科学技術基本計画等との関係】</b></p> <p>「ナノテクノロジー・材料科学技術研究開発戦略」(平成 30 年 8 月)では、革新的なマテリアルを社会実装に繋げるため、プロセスをさらに深く追求し、学理・サイエンス基盤の構築とそれに立脚した新たな設計・開発指針を生み出していく必要性が掲げられているところであり、本事業の貢献が期待される。</p> <p>さらに、統合イノベーション 2019 においては「ナノテクノロジー・材料科学技術研究開発戦略」を踏まえた研</p>	

					究開発等に取り組むとされており、本事業の推進が求められている。
--	--	--	--	--	---------------------------------

<参考>

○中目標（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）

ナノテクノロジー・材料科学技術分野は我が国が高い競争力を有する分野であるとともに、広範で多用な研究領域・応用分野を支える基盤であり、その横串的な性格から、異分野融合・技術融合により不連続なイノベーションをもたらす鍵として広範な社会的課題の解決に資するとともに、未来の社会における新たな価値創出のコアとなる基盤技術である。また、革新的な技術の実現や新たな科学の創出に向けては、社会実装に向けた開発と基礎研究が相互に刺激し合いスパイラル的に研究開発を進めることが重要である。これらを踏まえ、望ましい未来社会の実現に向けた中長期的視点での研究開発の推進や社会ニーズを踏まえた技術シーズの展開、最先端の研究基盤の整備等に取り組むことにより、本分野の強化を図り、革新的な材料を創出する。

○「第5期科学技術基本計画」（平成28年1月22日閣議決定）

第3章 経済・社会的課題への対応

（1）① i）資源の安定的な確保と循環的な利用

我が国は、化石燃料やレアメタルの大半を輸入に頼っており、輸出入の制限や遅延、資源の需要増大による価格高騰等は、経済や産業の活動に直接的な影響がある。

このため、資源の安定的な確保を図りつつ、ライフサイクルを踏まえ、資源生産性と循環利用率を向上させ最終処分量を抑制した持続的な循環型社会の実現を目指す。具体的には、省資源化技術や代替素材技術等の研究開発等を推進する。

第4章 科学技術イノベーションの基盤的な力の強化

（2）知の基盤の強化

② 研究開発活動を支える共通基盤技術、施設・設備、情報基盤の戦略的強化

ii）産学官が利用する研究施設・設備及び知的基盤の整備・共用、ネットワーク化

世界最先端の大型研究施設や、産学官が共用可能な研究施設・設備等は、研究開発の進展に貢献するのみならず、その施設・設備等を通じて多種多様な人材が交流することにより、科学技術イノベーションの持続的な創出や加速が期待される。

○「成長戦略フォローアップ」（令和元年6月21日閣議決定）

I7. (2) i) イノベーションの推進

・自動車の軽量化、建材の断熱性能の向上等に資するセルロースナノファイバーなどの新素材の研究開発・実証を進める。

I7. (2) iv) エネルギー分野での取組

・大規模災害に対応した電力ネットワークの強靱化と再生可能エネルギーの更なる大量導入を両立させ、IoT、AIなどの新技術にも対応するため、地域間連系線の増強や制度面も含めた電力ネットワーク改革を進め、必要な供給力・調整力の整備と合わせて電力投資の確保に向けた仕組みを整える。加えて、蓄電池、水素など蓄エネ技術の高性能化・低コスト化、次世代型の電力制御技術の開発・実証を進める。

・電池材料等の製造に必要な鉱物資源やエネルギー資源の着実な安定供給確保のため、資源外交や権益確保等に向けた取組を強化する。

I8. (2) i) ②ウ) 戦略的な研究開発の推進

産学官連携による革新的材料開発の高度化や効率化に向け、研究環境のスマート化や最先端研究インフラの整備・共用を2020年度から本格的に推進する。

○「経済財政運営と改革の基本方針2019」（令和元年6月21日閣議決定）

第3章2. (2) ④文教・科学技術

研究設備・機器等の計画的な共用の推進や研究支援体制の整備により、研究の効率化や研究時間の確保を図り、研究の生産性向上を目指す。

○「統合イノベーション戦略2019」（令和元年6月21日閣議決定）

第2章②iii) 環境

特定先端大型研究施設（SPRING-8・SACLA、J-PARC中性子線施設等）、次世代超高速電子計算機システム（スーパーコンピュータ「富岳」（ポスト「京」）等）、世界の学術フロンティアを先導する大型プロジェクト、SINET等の学術情報基盤、ナノテクノロジープラットフォーム等世界水準の先端的な大型研究施設・設備や研究機器の戦略的整備・活用及び次世代放射光施設の推進

○「拡大版SDGsアクションプラン2019」（令和元年6月SDGs推進本部決定）

「SDGs実施指針」優先課題③【主な取組】：成長市場の創出、地域活性化、科学技術イノベーション 基盤となる技術・データ

### 元素戦略プロジェクトの推進

我が国の資源制約を克服し、産業競争力を強化するため、希少元素を用いない、全く新しい代替素材を創成。産業競争力に直結する4つの材料領域を特定し、トップレベルの研究者集団により、元素の機能の理論的解明から新材料の創製、特性評価までを一体的に推進する研究拠点を形成。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標①（環境エネルギー科学技術分野）：  
 エネルギーの安定的な確保と効率的な利用、温室効果ガスの抜本的な排出削減を実現するため、目指すべきエネルギーシステム等の社会像に関する検討・議論を見据えつつ、従来の延長線上ではない新発想に基づく低炭素化技術の研究開発を大学等の基礎研究に立脚して推進するとともに、温室効果ガスの抜本的な排出削減の実現に向けた革新的な技術の研究開発を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成 28 年度～平成 30 年度）	事業名（事業期間）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考
① 低炭素化技術の研究開発、温室効果ガスの抜本的な排出削減のための明確な課題解決のための研究開発による特許出願累積件数※ (2016: 42 件、2017: 51 件、2018: 82 件) ② 「低炭素化技術の研究開発、温室効果ガスの抜本的な排出削減に向けた明確な課題解決のための研究開発」から「企業との共同研究、他省事業との連携等の実用化に向けた研究開発」への橋渡しテーマ数※ (2016: 24 件、2017: 24 件、2018: 24 件) ③ 温室効果ガスの抜本的な削減に向けた研究開発成果の寄与状況（定性的指標）※	省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発 (2016～2020)	2016 : 10 億円 2017 : 12.5 億円 2018 : 14.4 億円 2019 : 15.5 億円 2020 (案) : 14.7 億円	2018	中間評価	本事業では、大きな省エネ効果が期待される GaN 等の次世代半導体材料に関する基礎基盤技術開発に取り組んでおり、大電力用デバイスの歩留まり向上への貢献が期待できる高品質結晶製造の技術確立やイオン注入による p 型 GaN の作製、高性能レーザーデバイス作製方法の構築等、半導体デバイスの実用化に必要となる数々の世界初の研究成果を創出。 上記取組により、第 5 期科学技術基本計画に位置付けられている、エネルギーの安定的な確保や、産業競争力による我が国の持続的な成長等に大きく貢献。 また、エネルギー高効率利用等を実現する取組として、「エネルギー基本計画」に寄与。	

【環境エネルギー科学技術委員会①】

④ 温室効果ガスの抜本的な削減に向けた研究開発成果の寄与状況(定性的指標)	平成 28 年度	低炭素社会の実現に貢献する革新的技術シーズ及び実用化技術に関する研究開発や、高効率太陽電池や再生可能エネルギー技術、次世代半導体に関する研究開発・拠点形成を推進した。
	平成 29 年度	ラン藻を用いたバイオコハク酸生産やリチウム空気電池開発等、低炭素社会の実現に貢献する革新的技術シーズ及び実用化技術に関する研究開発や、次世代半導体に関する研究開発・拠点形成を推進した。
	平成 30 年度	軽量金属材料の開発やバイオマスからプラスチック原料を合成する等、低炭素社会の実現に貢献する革新的技術シーズ創出や、次世代半導体に関する研究開発・拠点形成を推進した。

※ 測定指標①②は終了した「東北復興次世代エネルギー研究開発プロジェクト」の成果を含む。また、測定指標③は終了した「東北復興次世代エネルギー研究開発プロジェクト」、JST「戦略的創造研究推進事業 先端的低炭素化技術(ALCA)」、「未来社会創造事業『地球規模課題である低炭素社会の実現』領域」及び理化学研究所「創発物性科学研究事業」、「環境資源科学研究事業」の成果を含む。

研究開発プログラムの評価に当たっての気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本研究開発プログラムにおける革新的技術の開発や、成果の企業や他省への橋渡しを通じて、温室効果ガスの抜本的な削減に寄与する研究開発成果を創出し、中目標①の達成に貢献している。</li> <li>・中目標ごとにならべることによって、目標間の連携や他の目標への波及効果などを追加的に評価できると望ましい。</li> <li>・これらの事業の最終的な社会的寄与も重要な視点であり、現在内閣府において検討が進められている「研究開発における追跡調査・追跡評価」の既存の枠組み等を活用し、プログラムの研究開発成果の展開の状況と成果還元・波及効果の状況を把握することも考えられる。</li> </ul>
-----------------------	---

【環境エネルギー科学技術委員会①】

＜参考＞

○研究開発計画（平成 29 年 2 月 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会（最終改訂 平成 29 年 8 月））

大目標：

将来のエネルギー需給構造を見据えた最適なエネルギーミックスに向け、エネルギーの安定的な確保と効率的な利用を図る必要があり、現行技術の高度化と先進技術の導入の推進を図りつつ、革新的技術の創出にも取り組む。（第 5 期基本計画）

資源生産性と循環利用率を向上させ最終処分量を抑制した持続的な循環型社会の実現を目指し、バイオマスからの燃料や化学品等の製造・利用技術の研究開発等にも取り組む。（第 5 期基本計画）

COP21 で策定された「パリ協定」を踏まえ、長期的視野に立って、CO2 排出削減のイノベーションを実現するための中長期的なエネルギー・環境分野の研究開発を、産学官の英知を結集して強力に推進し、その成果を世界に展開していく。（エネルギー・環境イノベーション戦略）

革命的なエネルギー関係技術の開発とそのような技術を社会全体で導入していく。（エネルギー基本計画）

再生可能エネルギーや省エネルギー等の技術開発・実証を、早い段階から推進するとともに、そうした技術の社会実装を進める。（地球温暖化対策計画）

○エネルギー基本計画（平成 30 年 7 月閣議決定）

電力消費の一層の効率化が期待される次世代パワーエレクトロニクス機器を始めとした技術革新の進展により、より効率的なエネルギー利用や、各エネルギー源の利用用途の拡大が可能となる。

## 背景・課題

- 省エネルギー社会の実現に向けて、高電圧・低抵抗で使用でき、大きな省エネ効果が期待される窒化ガリウム（GaN）等の次世代半導体が世界で注目。
- 高品質結晶やデバイス作成の成功により、省エネルギー社会の実現とともに大きな世界市場\*の獲得が可能。  
 \*パワーデバイス市場見込み：2025年に約3.5兆円（2015年の1.3倍） 出典：2016年版次世代パワーデバイス&パワエレ関連機器市場の現状と将来展望（富士経済）



## 【政策文書における記載】

- ・ パワーエレクトロニクス技術やワイヤレス給電技術の技術革新、輸送システムの電動化、需給制御を地域レベルで可能とするデジタル技術等の開発を進める。  
 <パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略（令和元年6月閣議決定）>

## 事業概要

### 【事業の目的・目標】

- GaN等の次世代半導体を用いたパワーデバイス等の2030年の実用化に向けて、令和2年度までの事業期間中に結晶作製技術を創出するとともにデバイス作製方法の目途をたてる。

### 【事業概要・イメージ】

- GaN等の次世代半導体に関し、結晶創製、パワーデバイス・システム応用、レーザーデバイス・システム応用、高周波デバイス・システム応用、評価の研究開発を一体的に行う拠点を構築し基礎基盤研究開発を実施することにより、実用化に向けた研究開発を強化。
- 名古屋大学が中核となって立ち上げ、多くの企業が参画するGaNコンソーシアム等を活用して、企業との連携を強化し、実用化に向けた大規模な共同研究を実施。
- 事業最終年度として、これまでの研究開発を集大成し、結晶欠陥の制御技術の開発、デバイス要素技術の統合及びデバイス動作の実証を実施。



### 【事業スキーム】

- ✓ 支援対象機関：大学、国立研究開発法人等
- ✓ 事業期間：平成28～令和2年度



### 【世界初・世界最高水準の研究開発事例】

- イオン注入によるp型GaNの作製に世界で初めて成功。  
 ・ 選択的なpn接合形成が可能、デバイス高耐圧化が容易  
 ⇒ 高耐圧・低オン抵抗トランジスタの面積を30%以上削減  
 将来はGaNデバイス集積回路への応用も期待



- 世界最小しきい値電流密度「トンネル接合GaNレーザー」を開発。  
 ・ 低抵抗GaNトンネル接合を用いた高性能かつ低コストなGaNレーザーデバイス作製技術を構築  
 ⇒ 高光閉じ込めと高電流注入による高効率GaNレーザーの実現に期待



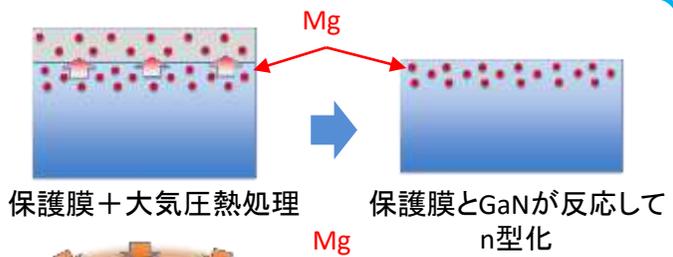
- このほか、大電力用デバイスの歩留まりの向上への貢献が期待できる高品質結晶製造の基盤技術の確立や、高品質結晶製造に寄与するシミュレーション技術の確立など、多数の研究成果を創出。

## イオン注入によるp型GaNの作製に世界で初めて成功 (パワーデバイス・システム領域)

今回、超高压高温処理によりイオン注入後の活性化を行う方法を開発し、世界初のイオン注入による高品質p型GaNの実現に成功。

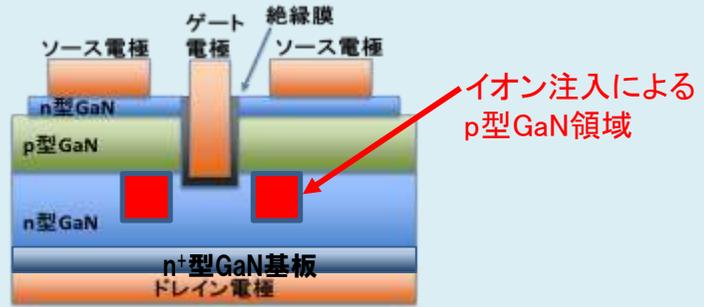
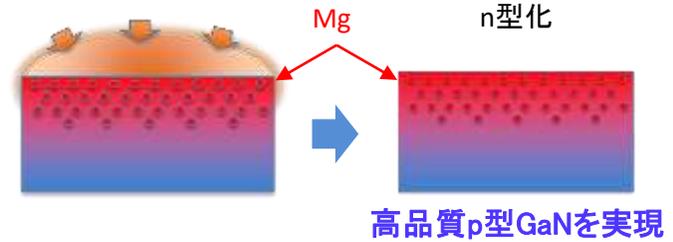
### 従来法

課題：  
保護膜との反応と熱分解による表面の荒れ



### 新手法

解決策：  
超高压(一万気圧)・高温熱処理



適用例：縦型パワートランジスタ

選択的なpn接合形成により、デバイス高耐圧化が容易に。  
高耐圧・低オン抵抗トランジスタの面積削減(30%以上)  
将来はGaNデバイス集積回路への応用も期待

## 縦型および横型GaN on GaNデバイス試作ライン稼働スタート(各デバイス・システム領域に貢献)



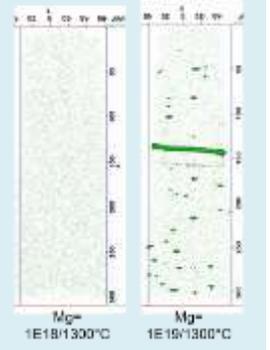
### GaN専用 1000平米クリーンルーム

- ・オリジナル結晶成長装置、評価分析装置、デバイス作製装置を集積
- ・専任のクリーンルーム作業経験者による企業研究所水準の設備運用
- ・名大開発の技術・ノウハウを活用可能なプロセスメニュー

GaNデバイスの社会実装の加速。  
死の谷を克服するための産学共創研究。  
企業の本格的GaNデバイス開発の第一ステップ

## イオン注入p型元素の結晶学・電気的状態を可視化する複合計測技術を確立(評価基盤領域)

縦型GaNパワーデバイスの作製で大きな課題となっていたイオン注入したp型Mg元素の結晶学的・電気的状態をNIMSの複合計測技術を用いることで、世界で初めて明らかにした。

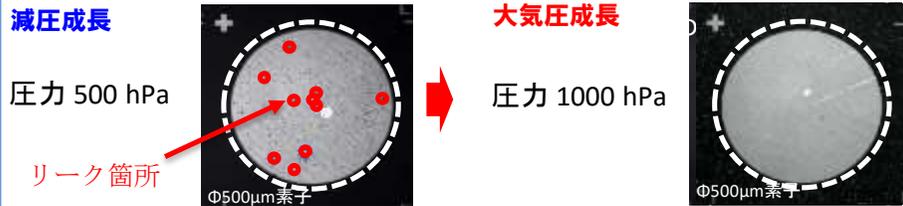


イオン注入技術(パワーデバイス・システム領域)の最適化へフィードバック。  
縦型GaNトランジスタの高性能化へ

図)イオン注入p型Mg元素が、浅部でダメージ生成、深部で電気的に活性化できること、高濃度で円盤状・ロッド形状に偏析することを明らかにした。

## 中核拠点

pn ダイオードの逆方向リークの起源となる欠陥を正確に同定(世界初)  
高電圧でも高い信頼性ダイオード製造法を構築



## 大口径、厚いGaN結晶の作製技術確立



新たな結晶成長方法確立により、基板を低コストで提供可能に⇒従来比1/5、最終目標1/25



## パワーデバイスシステム領域

### ①高速・低欠陥溝加工技術確立(世界初)

「高速+低速加工・熱処理」の組合せによる溝加工方法を確立

⇒低欠陥・高品質であり、かつ実用的な加工速度も両立(品質重視の低速加工のみとの比較で33倍の高速化)

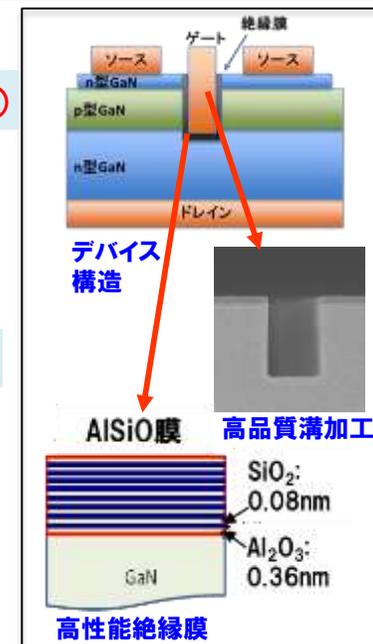
### ②高性能ゲート絶縁膜形成技術確立

上記で加工した溝において、絶縁膜 SiO<sub>2</sub>, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>膜を原子層厚さで積層し、高性能絶縁膜(AISiO膜)作製

⇒従来膜では寿命ばらつきが大きく、最短では1日程度(150℃にて)であったが、本絶縁膜は、実用上十分な20年の寿命を確実にクリア

①+②により

デバイス実現に必須の電極(ゲート)構造作製において、加工速度と品質、そしてデバイス寿命、それぞれをクリア。

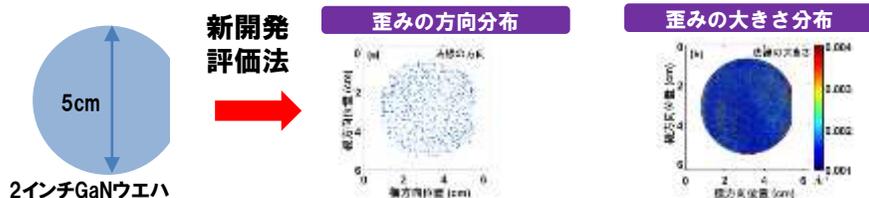


## 評価基盤領域

ウエハ全面の「ゆがみ」をすばやく可視化する新手法を開発(世界初)

GaN基板のウエハサイズで、結晶の「ゆがみ」をまるごと可視化する世界初の結晶品質評価技術を確立。

⇒トランジスタの良品の歩留を高め、高信頼性、低コスト化へ。



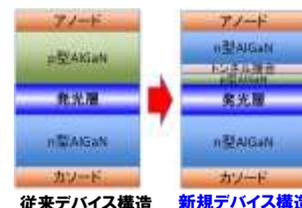
## レーザーデバイスシステム領域

低抵抗・低コストを両立するGaNトンネル接合形成技術確立(世界初)

1種類の装置で低コストを図り、世界最高水準の低抵抗GaNトンネル接合を実現

⇒デバイス抵抗低減による、高効率化に大きく貢献する構造の作製技術を確立

他研究機関との比較



トンネル接合により低抵抗化された新規デバイス構造

所属	比抵抗 [Ωcm <sup>2</sup> ]	必要結晶成長装置
本成果	~10 <sup>-6</sup> (低抵抗)	1種類 (低コスト)
UCSB	~10 <sup>-5</sup>	2種類
Ohio州立大	~10 <sup>-6</sup>	2種類
Magdeburg大	~10 <sup>-1</sup>	1種類

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標②（環境エネルギー科学技術分野）：  
 国内外における気候変動対策に活用されるよう、地球観測データやスーパーコンピュータ等を活用し、気候変動メカニズムの解明、気候変動予測モデルの高度化を進め、より精確な将来予測に基づく温暖化対策目標・アプローチの策定に貢献する。  
 また、より効率的・効果的な気候変動適応策の立案・推進のため、不確実性の低減、高分解能での気候変動予測や気候モデルのダウンスケーリング、気候変動影響評価、適応策の評価に関する技術の研究開発を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成 28 年度～平成 30 年度）	事業名（事業期間）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考
① 「統合的気候モデル高度化研究プログラム」の成果を活用した国際共同研究等の海外連携実績 (2016: -、 2017: 93 件、 2018: 87 件)	統合的気候モデル高度化研究プログラム (2017～2021)	2017: 5.8 億円 2018: 5.8 億円 2019: 5.5 億円 2020 (案): 7.4 億円	2019	中間評価	<p>本事業では、気候変動に係る政策立案の基盤となる気候変動予測情報の創出、気候変動メカニズムの解明等を推進。</p> <p>気候変動予測情報等、成果として得られた科学的知見を関係省庁等に提供することにより、気候変動対策に寄与するとともに、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）等を通じた国際貢献も実施。特に IPCC においては、開発した気候モデルが世界で最も多く活用され、国際的な気候変動に関する議論をリードしている。</p> <p>上記取組により、第5期科学技術基本計画に示されている、予測技術の高度化、気候変動メカニズムの解明等に貢献するとともに「気候変動適応計画」に示されている“科学的知見の充実”にも寄与。</p>	

【環境エネルギー科学技術委員会②】

<p>②気候変動適応技術社会実装プログラムによる成果を活用し、適応策の立案若しくは検討を開始した自治体等の数 (2016: 13 団体、 2017: 17 団体、 2018: 21 団体)</p>	<p>気候変動適応技術社会実装プログラム (2015~2019)</p>	<p>2015: 5.8 億円 2016: 5.2 億円 2017: 4.3 億円 2018: 3.7 億円 2019: 3.5 億円</p>	<p>2017</p>	<p>中間 評価</p>	<p>本事業では、地方公共団体の参画を得て、防災・農業等に関する適応策立案・推進に活用可能な近未来の高解像度気候変動予測情報等を開発。</p> <p>研究開発成果を地方公共団体等に提供し、適応策立案・推進を積極的に支援。また、本プログラムで作成している気候変動予測情報のデータセットを提供可能になったものから順次ユーザーである自治体や関係省庁へ提供を開始。</p> <p>上記取組により、第5期科学技術基本計画に示されている、我が国における気候変動の影響への適応に貢献するとともに、「気候変動適応計画」に示されている“科学的知見の充実”にも寄与。</p>
--	--	---	-------------	------------------	---

研究開発プログラムの評価に当たったの気づき

- ・本研究開発プログラムにおいて創出された、気候変動に関する予測情報やメカニズム解明等の科学的知見が関係省庁や地方公共団体等の適応策検討・立案に活用され、また IPCC や共同研究等を通じた国際貢献にもつながっており、中目標②の達成に貢献している。
- また、中目標③の取組の一環であるデータ統合・解析システム (DIAS) の活用により、本研究開発プログラムにおける我が国の気候モデル実験の成果を海外諸国の研究者や政府間パネル等に提供しており、国内外の気候変動対策検討・立案に貢献するなど、大目標の達成に貢献している。
- ・中目標ごとにならべることによって、目標間の連携や他の目標への波及効果などを追加的に評価できると望ましい。
- ・これらの事業の最終的な社会的寄与も重要な視点であり、現在内閣府において検討が進められている「研究開発における追跡調査・追跡評価」の既存の枠組み等を活用し、プログラムの研究開発成果の展開状況と成果還元・波及効果の状況を把握することも考えられる。

## 【環境エネルギー科学技術委員会②】

### <参考>

○研究開発計画（平成 29 年 2 月 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会（最終改訂 平成 29 年 8 月））

#### 大目標：

地球規模での温室効果ガスの大幅な削減を目指すとともに、我が国のみならず世界における気候変動の影響への適応に貢献する。（第 5 期基本計画）

地球温暖化に係る研究については、従前からの取組を踏まえ、気候変動メカニズムの解明や地球温暖化の現状把握と予測及びそのために必要な技術開発の推進、地球温暖化が環境、社会・経済に与える影響の評価、温室効果ガスの削減及び地球温暖化への適応策などの研究を、国際協力を図りつつ、戦略的・集中的に推進する。（地球温暖化対策計画）

スーパーコンピュータ等を用いたモデル技術やシミュレーション技術の高度化を行い、時間・空間分解能を高めるとともに発生確率を含む気候変動予測情報を創出する。また、気候予測の高解像度化を検討する。（気候変動の影響への適応計画）

最新の気候変動予測データや、全球気候モデルのダウンスケーリングを活用することで、洪水や高潮による将来の外力の変化を分析する。（気候変動の影響への適応計画）

気候変動適応情報にかかるプラットフォーム等において、ダウンスケーリング等による高解像度のデータなど地域が必要とする様々なデータ・情報にもアクセス可能とするとともに、地方公共団体が活用しやすい形で情報を提供する。また、地方公共団体が影響評価や適応計画の立案を容易化する支援ツールの開発・運用や優良事例の収集・整理・提供を行う。（気候変動の影響への適応計画）

○気候変動適応計画（平成 30 年 11 月 閣議決定）

国は、気候変動及び多様な分野における気候変動影響の観測、監視、予測及び評価並びにこれらの調査研究並びに気候変動適応に関する技術開発を推進し、科学的知見の充実を図り、気候変動等に関する情報基盤を強化するとともに、科学的知見を気候変動適応に関する施策に活用する。

スーパーコンピュータ等を用いたモデル技術やシミュレーション技術の高度化を行い、時間・空間分解能を高めるとともに、発生確率や不確実性を含む気候変動予測情報を創出する。また、各分野の適応策を推進するに当たりニーズを踏まえた我が国の気候変動予測データの整備を推進する

**全ての気候変動対策の基盤となる気候モデルの高度化（不確実性の低減）を通じ、気候変動メカニズムを解明するとともに、気候変動予測情報を創出。**



\* 気候感度：大気中のCO<sub>2</sub>濃度が2倍になった時の気温上昇量。

\*\* ティッピング・エレメント：気候変動があるレベルを超えたとき、気候システムにしばしば不可逆性を伴うような激変が生じる現象。

○文部科学省の気候モデル研究事業で開発した、わが国独自の気候モデルは、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）において世界トップクラスの利用数であり、報告書作成に貢献。

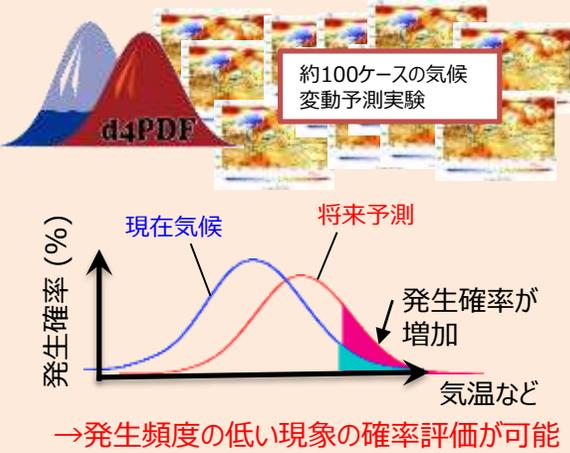
○創出された気候変動予測情報は、気候変動の影響評価の基盤として活用。

# (参考) 事業全体としての施策効果 主な事例 1

## 気候変動予測データセットの作成による適応策への貢献

- これまで不可能とされてきた異常気象の将来変化の確率的評価が可能になった。(約100ケースの気候変動シミュレーションd4PDF)
- 国土交通省の「気候変動を踏まえた治水計画のあり方 提言」(令和元年10月)では、今後の治水計画の見直しにおいて、d4PDFと基にした将来予測を活用することが示された。

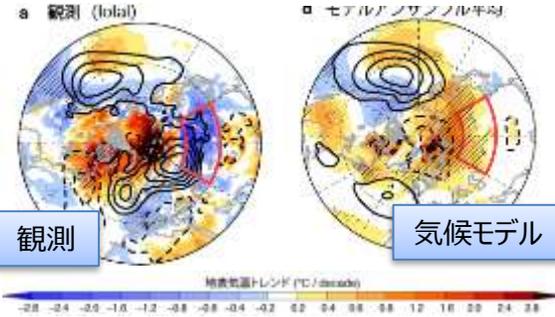
世界に類のない大規模(約2PB)アンサンブルデータベース d4PDF



令和元年10月  
国土交通省 気候変動を踏まえた治水計画のあり方提言【概要】より

## 地球温暖化による海氷減少の影響評価

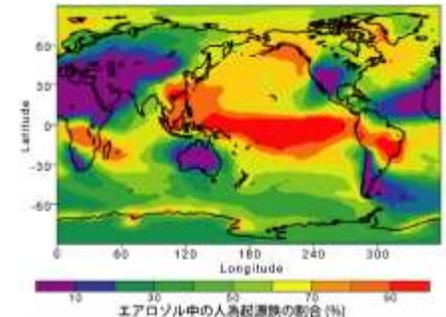
地球温暖化が、北極海の手氷減少を介して、冬季ユーラシア大陸中緯度の寒冷化をもたらすことを示した。(Nature Climate Changeに掲載)



## エアロゾル(鉄分)による海洋生態系への影響把握

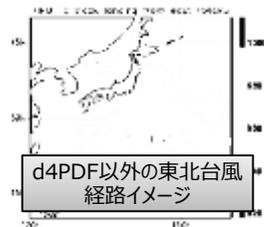
全球大気モデルを使用したシミュレーションにより、燃料消費の際に放出される鉄分は、海水に溶けやすく海洋生態系にとって重要であることを示した。(Science Advances【2019】に掲載)

燃料消費の際に放出された鉄

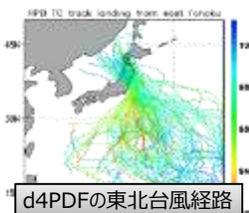


### d4PDFの特徴の例

例えば、観測史上初めて東北太平洋側に上陸した平成28年台風第10号について



一般的な気候変動予測データセットではそのような台風はゼロ又は1つ程度  
⇒全く検証できない



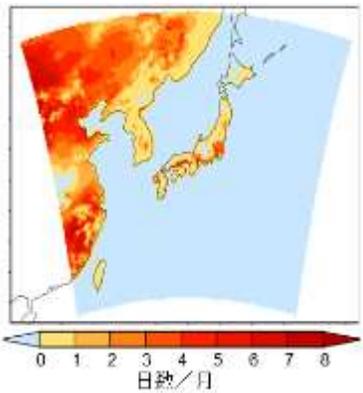
d4PDFなら東北台風は102も存在する  
⇒防災の検討における確率評価に十分活用できる

# (参考) 事業全体としての施策効果 主な事例 2

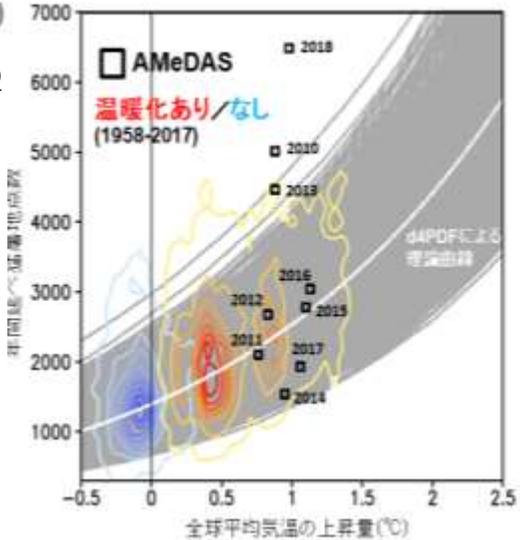
## 熱波増加に対する地球温暖化の寄与度合いの解析



温暖化による平成30年7月の  
猛暑日数増加



温暖化に伴う日本の年間のべ猛暑地点  
数増加



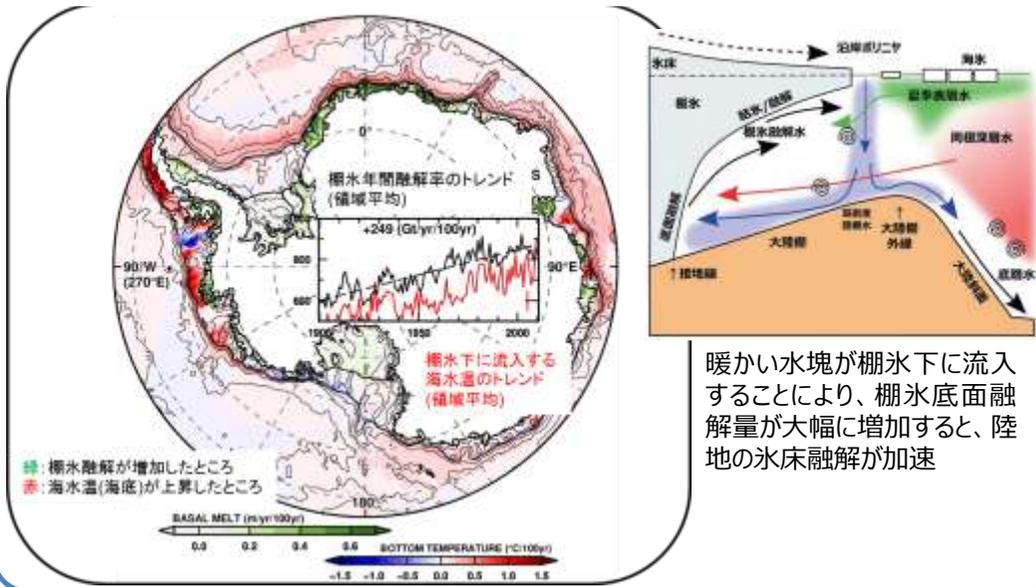
全球気候モデルと地域気候モデルの大規模アンサンブルシミュレーション (d4PDF) を組み合わせた新しい解析手法により、工業化以降の全球平均気温昇温が 2℃ に抑えられたとしても、日本の猛暑日発生回数は現在の 1.8 倍になることを推定。

## ティッピングエレメント※の理解につながる 南極氷床モデリングの開発 (世界初)

全球気候と海面上昇に強い影響を与える、海洋上の南極氷床融解に着目した南極氷床末端の棚氷要素のモデリングを、世界に先駆けて開発。

※ティッピング・エレメント: 気候変動があるレベルを超えたとき、気候システムにしばしば不可逆性を伴うような激変が生じる現象。

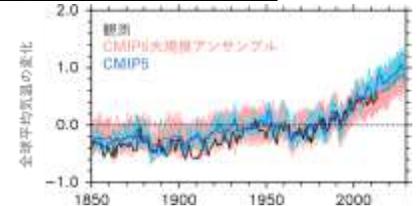
棚氷要素を含む海水海洋モデルによる 20 世紀実験 (南極海全域を対象)



暖かい水塊が棚氷下に流入することにより、棚氷底面融解量が大幅に増加すると、陸地の氷床融解が加速

## その他 (科学技術外交等)

- 本プログラムで開発した我が国独自の気候モデルの利用数は世界のモデルの中で世界トップクラス。
- 「気候変動に関する政府間パネル (IPCC)」ではこれまでに日本人論文の割合が右肩上がりです。
- 次期の IPCC 報告書では、日本枠として過去最大の執筆陣 45 名が選出 (前回は 30 名) された。本事業関係者が多数含まれ、現在進行中の執筆作業で日本発の成果の打ち込みが見込まれる。さらに、次期 IPCC 報告書に向けた将来予測実験を実施し、データを世界に先駆けて公開。我が国の気候モデル実験の成果を海外諸国が利用できる環境を構築した。
- 外務省に全面協力し、2017年10月のG7作業部会に提出した「気候変動と脆弱性」報告書に成果を打ち込み。



(SI-CAT: Social Implementation Program on Climate Change Adaptation Technology)  
FY2015-FY2019

統合プログラム等これまでの気候変動研究の成果を活用し、精緻な気候変動予測や対策の効果を総合的に評価できる技術を**地方公共団体等と共同**で開発。防災、農業、健康分野等の**地域特性に応じた適応策立案・推進を支援**。

## 《例：ヒートアイランド対策》



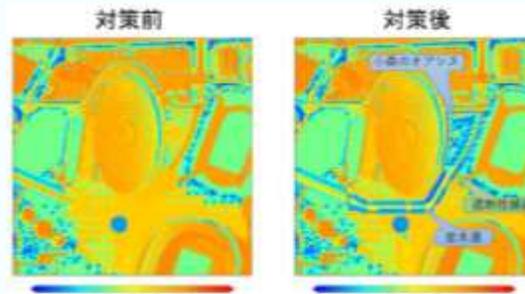
地方公共団体の  
担当者

ニーズ

ヒートアイランド対策立案には、対象都市における近未来予測情報が必要  
・平均気温分布 等

### 暑熱に関する適応策検討のためのシミュレーション

シミュレーションを基に対策（並木道の整備、舗装の変更等）を講じると、地表面温度が日向で約9度低下。



ex.熊谷スポーツ文化公園のヒートアイランド対策

地方公共団体等による  
適応策の立案・推進  
に貢献

暑熱環境の詳細把握や街路樹等の配置によるヒートアイランド対策の策定

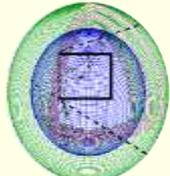
# 具体的な成果例（近未来予測のデータセットを創出）

## <近未来予測・超高解像度ダウンスケーリング情報>

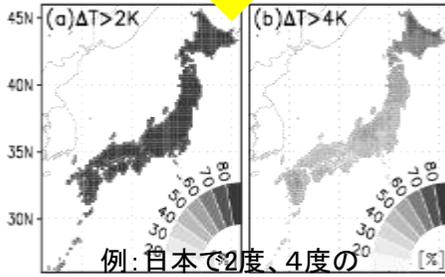
統計的ダウンスケーリングによる  
1kmメッシュ将来予測データ

全球気候  
モデル

観測データ



統計的ダウンスケーリング



例：日本で2度、4度の  
温度上昇の確率予測

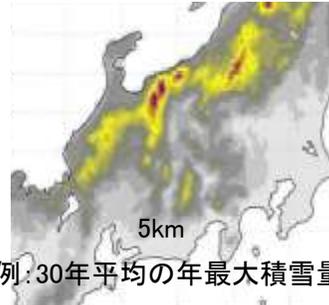
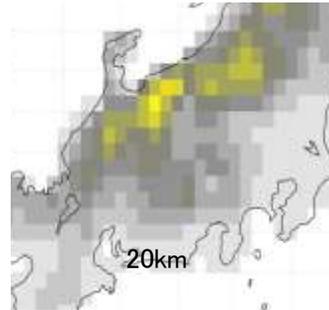
【データの要素】

- 降水量
- 日平均、最高、最低気温 等

⇒ 活用先

各地域での将来気候  
傾向把握（降水量の  
増減、気温上昇など）

力学的ダウンスケーリングによる  
5kmメッシュ将来予測データ



例：30年平均の年最大積雪量

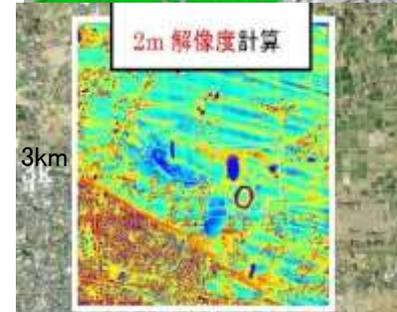
【データの要素】

- 気温、湿度、風速
- 降水量、積雪量 等

⇒ 活用先

各自治体での目的  
（降雪量、降水量等）に  
あわせた気候変動の分  
析や観測データの不十  
分な地域の将来予測

力学的ダウンスケーリングによる  
街区スケール(2~5mメッシュ)将  
来予測



例：埼玉県熊谷スポーツ文化公園周辺  
（3km四方）における暑熱環境

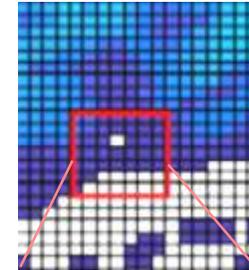
【データの要素】

- 気温、湿度、風速
- 地表面温度、放射等
- 10分平均値

⇒ 活用先

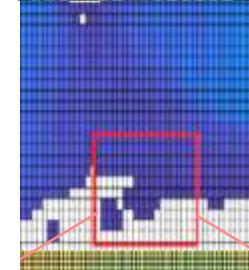
暑熱環境の詳細把握や  
街路樹・公園等の配置  
によるヒートアイランド  
対策

力学的ダウンスケーリングによる  
湾スケール将来予測

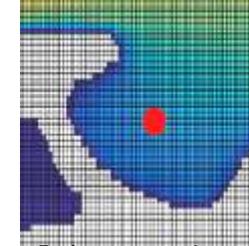


例：鳥取県美保湾周辺にお  
ける沿岸環境

約18kmメッシュ



約2.8kmメッシュ



約360mメッシュ

【データの要素(現時点)】

- 沿岸海水位、沿岸流速、水温等
- 20分平均値

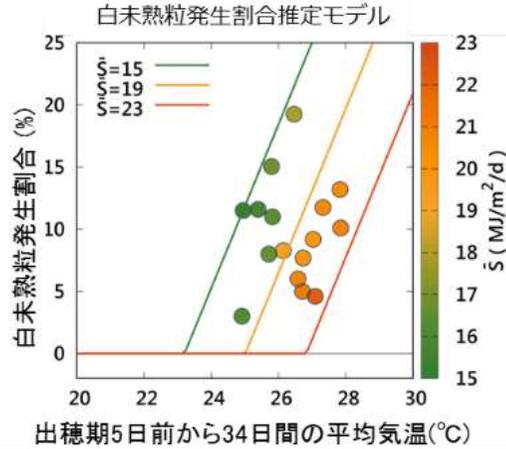
⇒ 活用先

沿岸環境の把握、  
沿岸防災

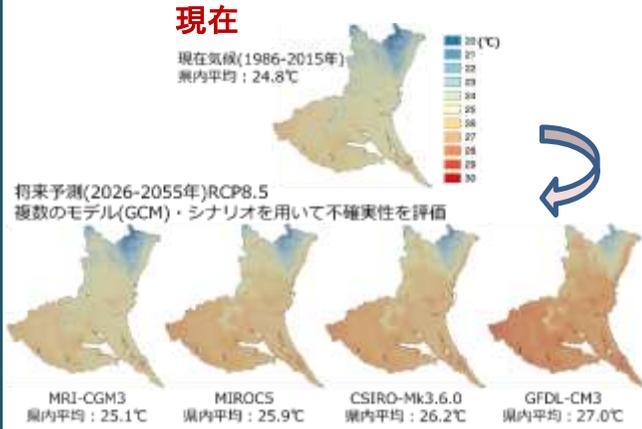
# 具体的な成果例（茨城県におけるコメ栽培を支援）

## 懸念される温暖化

コメは高温により白未熟粒が発生することが分かっています



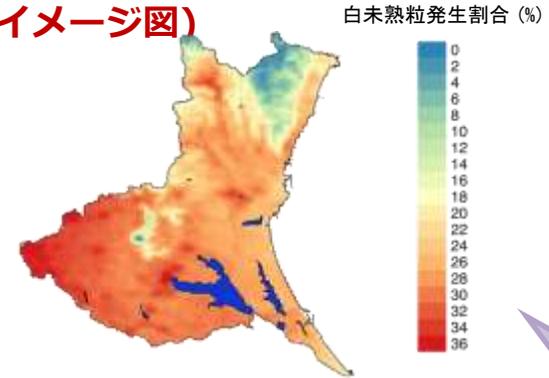
将来の気候は確実に温暖化します



複数の将来予測モデル

## コメへの影響は？

栽培適地やリスクのマップを解析 (イメージ図)



コシヒカリの白未熟粒リスク

どのように  
適応していく  
か？

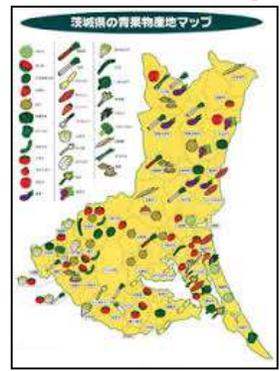
地元と協力して白未熟粒の発生を抑制する栽培技術を調査中

- 環境条件**  
気温、水温、土壌等
- 管理条件**  
栽培アンケート、ヒアリング、土地利用等



JAつくば市谷田部での適応策調査

茨城県農業における気候変動適応計画(仮)へのインプット



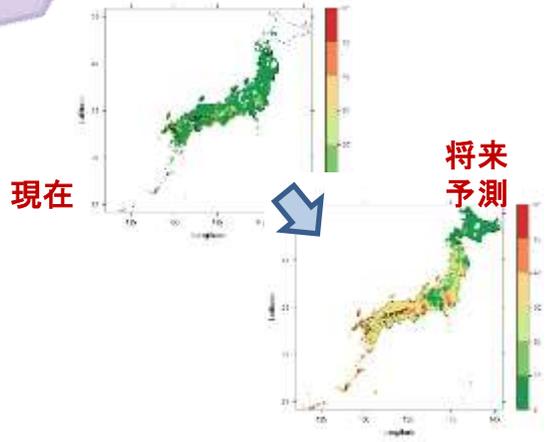
適応策の提言

- ✓ 高温に強い既存品種への転換
- ✓ 新品種の開発
- ✓ 栽培管理の工夫

県への  
貢献

全国展開

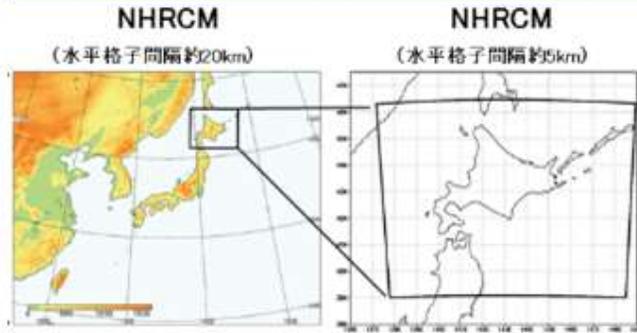
茨城県発の適応策を全国へ水平展開！



# 具体的な成果例（北海道における洪水リスクの将来変化）

気候変動による将来の影響を科学的に予測し、具体的なリスク評価をもとに治水対策を講じる

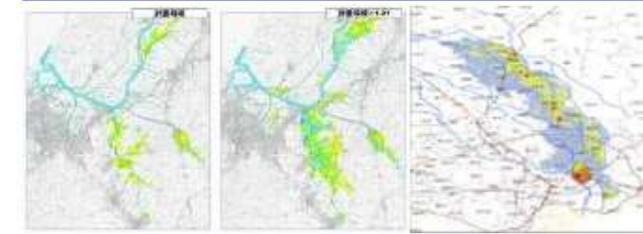
## 将来気候における降雨の分析



## モデル流域における洪水量の変化



## 洪水リスクの共有



「北海道地方における気候変動予測(水分野)技術検討委員会」資料

甚大な被害が発生した十勝川、常呂川をモデルケースに、将来気候における洪水流出量の変化を予測（**洪水ピーク流量の変化、治水安全度の低下**）

気候変動の影響によるリスクの評価を実施し、社会と共有（**浸水域の増加、人的・社会的なリスクの増加、交通事故等リスクとの比較**）

## 国の政策へ貢献

- ・「気候変動を踏まえた治水計画に係る技術検討会」(国交省)への知見の反映
- ・国土強靱化基本計画の見直し(平成30年12月)  
⇒「気候変動の影響を踏まえた治水対策」を明記



研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標③（環境エネルギー科学技術分野）：  
 我が国の政府等が収集した地球観測データ等をビッグデータとして捉え、人工知能も活用しながら各種の大容量データを組み合わせ、環境エネルギーをはじめとする様々な社会・経済的な課題の解決等を図るプラットフォームの構築を図る。

中目標の達成状況の測定指標 (平成28年度～平成30年度)	事業名 (事業期間)	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考
地球環境プラットフォーム構築推進プログラムによって構築している地球環境プラットフォーム(DIAS)の利用者数 (2016: 2,947人、 2017: 3,662人、 2018: 4,792人)	地球環境情報プラットフォーム構築推進プログラム	2016: 4億円 2017: 4億円 2017(補正): 1.7億円 2018: 3.8億円 2018(補正): 2.8億円 2019: 3.8億円 2019(補正): 4.6億円 2020(案): 3.8億円	2018	中間評価	<p>本事業では、地球環境ビッグデータ(観測情報、予測情報等)を蓄積・統合解析し、気候変動等の地球規模課題の解決に資する情報システムとして、「データ統合・解析システム(DIAS)」を開発するとともに、学術研究、国際貢献、産業利用等にデータを活用するための長期的・安定的な運用体制の構築を推進。学術研究への利活用を推進するとともに、水力発電の高効率化に向けた電力会社との共同研究等を通じ、データの産業利用を促進。また、洪水・渇水予測システムによる海外の防災・減災等への貢献や、GEO(地球観測に関する政府間会合)やIPCC(気候変動に関する政府間パネル)を通じた国際貢献を推進。</p> <p>上記取組により、第5期科学技術基本計画に示されている、気候変動に起因する経済・社会的課題の解決のための地球環境情報プラットフォーム構築に貢献するとともに、「気候変動適応計画」に示されている“科学的知見の充実”にも寄与。</p>	

【環境エネルギー科学技術委員会③】

研究開発プログラムの評価に当たっての気づき	<ul style="list-style-type: none"><li>・本研究開発プログラムにおける、データ統合・解析システム（DIAS）の構築やシステム上のデータの利用推進により、中目標③の達成に貢献している。</li><li>また、中目標②とも一体的に推進することにより、研究開発プログラムにおける我が国の気候モデル実験の成果を海外諸国の研究者や政府間パネル等に提供しており、Society 5.0の実現に向けたデータ連携基盤の整備に貢献するなど、大目標の実現に着実に取り組んでいる。</li><li>・中目標ごとにならべることによって、目標間の連携や他の目標への波及効果などを追加的に評価できると望ましい。</li><li>・これらの事業の最終的な社会的寄与も重要な視点であり、現在内閣府において検討が進められている「研究開発における追跡調査・追跡評価」等の既存の枠組み等を活用し、プログラムの研究開発成果の展開状況と成果還元・波及効果の状況を把握することも考えられる。</li></ul>
-----------------------	---

<参考>

大目標：

ICTを最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来社会の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ「Society 5.0」として強力に推進し、世界に先駆けて超スマート社会を実現していく。（第5期基本計画）

地球環境の情報をビッグデータとして捉え、気候変動に起因する経済・社会的課題の解決のために地球環境情報プラットフォームを構築する。（第5期基本計画）

気候リスク情報等は、各主体が適応に取り組む上での基礎となるものであることを踏まえ、多種多様な気候リスク情報等の収集と体系的な整理を行うための気候変動適応情報にかかるプラットフォームについて関係府省庁において検討を行う。その際「科学技術イノベーション総合戦略2015」（平成27年6月19日閣議決定）において経済・社会的課題の解決に向けた重要な取組として位置づけられた地球環境情報プラットフォームの活用も含めて検討する。（気候変動の影響への適応計画）

研究開発計画（平成29年2月 科学技術・学術審議会 研究計画・評価分科会（最終改訂 平成29年8月））

○気候変動適応計画（平成30年11月 閣議決定）

国は、気候変動及び多様な分野における気候変動影響の観測、監視、予測及び評価並びにこれらの調査研究並びに気候変動適応に関する技術開発を推進し、科学的知見の充実を図り、気候変動等に関する情報基盤を強化するとともに、科学的知見を気候変動適応に関する施策に活用する。

【環境エネルギー科学技術委員会③】

「統合イノベーション戦略」（平成30年6月15日閣議決定）において地球環境ビッグデータの学術及び産業利用を促進するために整備することとされている DIAS（データ統合・解析システム）の活用も含めて検討する。

気候変動等の地球規模課題の解決に資する情報システムとして、「**データ統合・解析システム (DIAS)**」を開発。気候予測データをはじめとする地球環境ビッグデータを蓄積・統合解析し、国内外へ発信。



## 地球規模課題の解決への貢献

- 地球環境ビッグデータ収集・蓄積
- ビッグデータ解析・可視化・データ統合
- ビッグデータを用いたモデリング・シミュレーション

予兆検知  
見える化  
監視  
制御

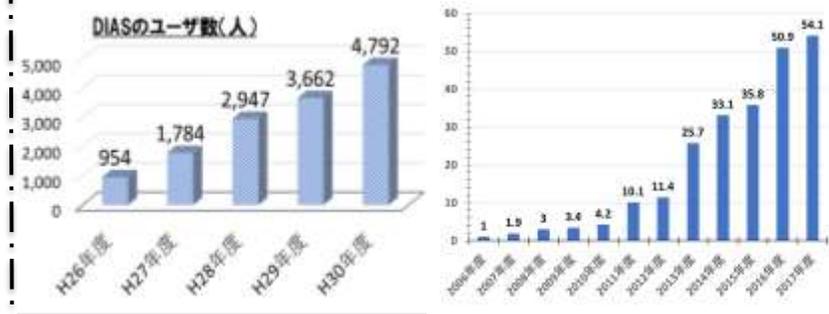
**ビッグデータの蓄積・統合解析により、気候変動等の地球規模課題の解決に資する地球環境情報プラットフォームを構築**

学術コミュニティ

民間企業、自治体等ユーザー

## 【これまでの成果】

- DIASユーザー数が4年で5倍になるなど、利用者・利用範囲が国内外で拡大。
- スリランカ洪水（平成29年5月）の復旧計画の策定等にDIASを活用するなど国際貢献に寄与。
- 道路や街区などの浸水状況を精緻に予測する手法（S-uiPS）を用いたリアルタイム浸水予測システムをDIASにおいて開発。



DIASのユーザー数の増加

DIASの保管データ容量の急激な増加 (2006年のデータ容量を1とした比率)

# 地球環境情報プラットフォーム構築推進プログラムのイメージ



監視 制御 予兆検知 見える化

ソリューション提供

## DIASシステム



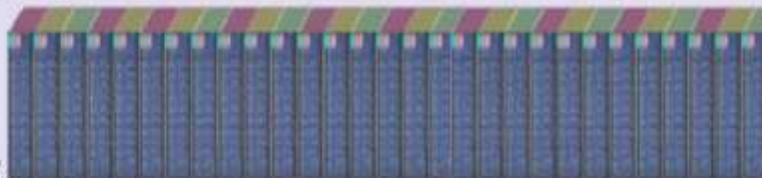
### 共通基盤ソフトウェア層

- ・データ可視化
- ・データ変換
- ・データマイニング
- ・知見創出支援
- ・データ取得
- ・データ探索支援
- ・データ品質管理
- ・データ抽出・加工・ロード
- ・メタデータ管理

### データマネージメント層

- ・データベース管理システム
- ・ストレージ管理システム
- ・電源管理システム

### ストレージ層



国内外の観測・予測データ、社会・経済データ等(約700種類)



研究観測データ  
(トンデによるCO2観測等)



市民観測データ  
(蜂、蝶等の生物分布観測)

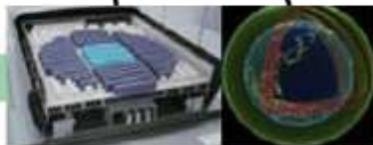


海洋観測データ  
(トライトン号による水温、塩分、熱収支観測等)



衛星データ  
(ひまわり8号、ひいち、LANDSAT等)

39



数値気象・気候予測モデル  
(全球規模の気候変動予測情報、過去の気象、海洋観測データ、ダウンスケーリングデータ)



現業観測データ  
(水害統計データ、地盤変動データ、都市暑熱環境データ等)



現業管理情報  
(土地利用、社会経済政策データ、ダム管理情報等)

# 各分野におけるDIASの活用事例①

## <エネルギー・防災>

### 水力発電管理高効率化に加え、水災害の被害軽減を目指すリアルタイム河川・ダム管理システムの研究開発

- 日本のエネルギー供給の約 1 割を支える**水力発電の管理の効率化**に貢献するとともに、**洪水・濁水被害の軽減**を同時に実現。
- 将来的な気候変動による降水量や河川流量の変化に対応したダム管理の方策や都市水害への対応策の立案等への貢献を目指す。

気象観測データ、気象予報データ、地理情報、土地利用、ダム管理データ、河床流量 等



DIASにおいて、「リアルタイム河川・ダム管理システム」(流域水循環モデル、降雨予測モデル、洪水予測モデルを統合)を用いてリアルタイムシミュレーションを実施



### ダム水位・河川流量予測情報

・ダム水位・河川流量予測情報を基に、ダム水量を管理するシステムを構築。適切なタイミングでのダムの放水が可能となることにより、水力発電管理の効率化と洪水・濁水による被害の軽減とを同時に実現。

## <交通インフラ>

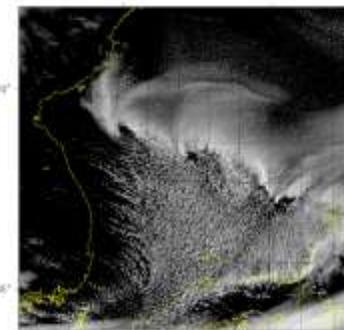
### 高速道路における気象のリアルタイムモニタリング環境の構築に向けた研究開発

- 降雨・降雪などの気象情報から、**高速道路上の交通規制**を予測する技術に係る研究開発。
- より効率的な**高速道路管理**や柔軟な**物流ネットワーク**の形成へとつながる、高速道路の交通規制予報サービスを提案。

気象予報データ、高速道路閉鎖事象データ、道路ネットワークデータ



DIASにおいて、雲解像モデル出力や時系列回帰分析を用いて、データを統合・解析



雲解像モデルによる雪雲の再現

### 高速道路閉鎖予測情報

・高速道路閉鎖予測情報を基に、事前の迂回ルートの設定や高速道路利用の再設定など、効率的な物流ネットワークの構築が可能。

# 各分野におけるDIASの活用事例②

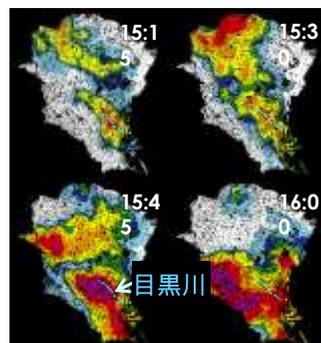
## <都市防災>

### リアルタイムデータを活用した 東京都23区リアルタイム浸水予測システムの構築

- 東京都下水道局のデータ等を用い、都市浸水予測モデルをDIASに実装。
- 「今から何十分後にどの地点でどれほどの浸水あるいは冠水が生じるか」を予測し、被害を軽減するための対策をとることが可能になる技術を開発。

都市インフラ情報(道路・下水道・都市河川ならびに街区の土地利用状況など)、河川水位データ、  
気象予報データ

DIASにおいて、都市インフラ情報と気象予報データ等を物理法則に基づいて統合・解析



### 東京23区の浸水予測情報

- 物理法則に基づいた精緻な予測情報により、自治体によるハザードマップ作成、リアルタイムでの避難情報の提供等による住民の安全確保を推進。
- 本予測情報を元に浸水しやすい地域を特定し、地下鉄の駅の出入口を検討するなど、浸水による被害が少ない都市計画の策定に貢献が可能。

## <健康>

### マラリア感染予警報システムの研究開発

- 南部アフリカ地域において開発したマラリア流行予測技術をDIASに実装。
- 気候変動予測データ等からマラリア流行を予測する世界初の画期的アプローチを実現。

気象観測データ、気候変動予測データ、  
マラリア患者データ

DIASにおいて、リアルタイムシミュレーション(統計モデル、人工知能を組み入れたモデル、数理モデル等を統合)を実施



### マラリア感染予警報情報

- マラリア患者数のリアルタイム予測を現地機関に配信し、事前の薬の備蓄や殺虫剤散布等による予防活動に活用。
- 一般向け情報も配信し、現地コミュニティのマラリア感染の危機管理に一役。

# 各分野におけるDIASの活用事例③

## <都市インフラ>

### アジアモンスーン地域における気象データ等から 都市・インフラ開発事業形成支援

- ・ アジア開発銀行（ADB）との共同研究。
- ・ ベトナムの気象観測データ、人口・土地利用データ等を基に、洪水・渇水予測、高潮予測等を元に、**都市災害の被害推定**をDIAS上で解析。

気象観測データ、人口・土地利用データ

DIASにおいて、流域水・物質循環モデル等を用いて、データを統合・解析



### 洪水・渇水予測情報、高潮予測情報

- ・ 流域の洪水・渇水予測情報、高潮予測情報を元に、流域の都市の将来的な気候変動による災害の被害推定が可能。

## <生物多様性>

### 市民参加による生き物モニタリング調査（いきモニ）

- ・ **大学と市民の協働**による東京のチョウを対象にした東京大学・パルシステム東京協働プロジェクト。
- ・ 調査員（パルシステム東京の組合員からの参加者）から送られたチョウの調査データを分かりやすく公開。

調査員から送られたチョウの調査データ

DIASを通じて東京大学がデータベース化  
チョウの専門家(中央大学)が個々のデータについて  
チェックを行い、精度の高いデータに修正



### チョウの全国分布マップ

- ・ 自身が採集したデータを通じて、都市の生物多様性の現状や地球温暖化の影響について、市民に啓発。
- ・ 温暖化の影響によるチョウの生息域の北上など、学術的な知見も蓄積。

研究開発プログラム評価票

(令和2年度)

中目標（環境エネルギー科学技術分野）：

核融合エネルギーは、燃料資源が地域的に偏在なく豊富であること、発電過程で温室効果ガスを発生しないこと、少量の燃料から大規模な発電が可能であること等の特性を持つ。また、安全性の面でも優れた特性を有することから、エネルギー問題と環境問題を根本的に解決する、将来の基幹的エネルギー源として期待されている。

大目標の達成に向け、文部科学省は、国際約束に基づく ITER（国際熱核融合実験炉）計画・BA（幅広いアプローチ）活動を推進しつつ、これらの進捗状況を踏まえ、トカマク方式を主案とする原型炉開発のための技術基盤構築に向けた戦略的取組を推進する。並行して、トカマク以外の方式（ヘリカル方式、レーザー方式）や、核融合工学の研究開発を進めることにより、将来に向けた重要な技術である核融合エネルギーの実現に向けた研究開発に取り組む。

なお、これらの取組を推進するに当たっては、原型炉開発に向けたロードマップを策定し、量子科学技術研究開発機構、核融合科学研究所、大学、産業界等を網羅する全日本の連携体制で臨む。

また、現行 BA 活動終了後の日欧協力の在り方について検討を進めているところであり、その結果に応じて、必要があれば、本計画を見直すこととする。

中目標の達成状況の測定指標 （平成 28 年度～30 年度） <small>※政策評価の事前分析表から転記</small>	事業名 （事業期間） <small>※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）</small>	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 <small>※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況</small>	備考 <small>※その他の気づき等</small>
①ITER 建設作業の進捗と計画の着実な進展への貢献（ITER 計画において我が国が分担する機器製作等を担う国内機関である量子科学技術研究開発機構が毎年度定める事業計画中の課題の達成割合）93.4%（5年平均） ②先進プラズマ研究開発のプラットフォームの構築（BA 活動の実施機関である量子科学技術研究開発機構が定める事業計画のうち、先進プラズマ研	ITER 計画（建設段階）等の推進（H18～H47 以降）	H28 年 :228.0 億円 H29 年 :189.9 億円 H30 年 :188.8 億円	H29	中間評価		

【核融合科学技術委員会】

<p>究開発のプラットフォーム構築に資する課題の達成割合) 91%(5年平均) ③原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得(定性的指標)※1 ④核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤構築※2</p>						
<p>トカマク方式に対する相補的・代替的な役割の発揮※3</p>	<p>ヘリカル方式 (超高性能プラズマの定常運転の実証) (大学共同利用機関法人核融合科学研究所)</p>	<p>H28年度: 43億円 H29年度: 43億円 H30年度: 41億円 (大規模学術フロンティア促進事業)</p>	<p>H28</p>	<p>進捗評価</p>		<p>※学術分科会研究環境基盤部会学術研究の大型プロジェクトに関する作業部会において評価</p>
	<p>レーザー方式 (大阪大学レーザー科学研究所)</p>					

<p>※1 原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得(定性的指標)</p>	<p>H28年度</p>	<p>原型炉用超伝導コイルの概念構築に向けた検討の進展などにより、原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得に貢献した。</p>
	<p>H29年度</p>	<p>新たな原型炉研究開発の在り方を示すものとして、核融合科学技術委員会において「核融合原型炉研究開発の推進に向けて(平成29年12月18日)」をとりまとめるとともに、原型炉設計合同特別チームにおいて、原型炉の炉構造・遠隔保守の概念構築に向けた検討を深めるなど、原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得に貢献した。</p>
	<p>H30年度</p>	<p>アクションプランに示された研究課題のうち、優先的に実施すべき課題を抽出するため「原型炉研究開発ロードマップについて(一次とりまとめ)」(平成30年7月24日)をとりまとめるとともに、原型炉設計特別チームにおける検討の結果、原型炉の設計要件である数10万キロワットの電気出力を発生できる見通しを得るなど、原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得に貢献した。</p>

【核融合科学技術委員会】

※2 核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤構築	H28 年度	アウトリーチ・ヘッドクォーターの設置について核融合科学技術委員会で議論を進めるなどにより、社会の理解と支援の基盤構築に貢献した。
	H29 年度	社会の理解と支援の基盤構築に貢献するべく、アウトリーチ活動など、社会連携活動強化に向けた提言を「核融合原型炉研究開発の推進に向けて（平成29年12月18日核融合科学技術委員会）」の中で取りまとめた。さらに、アウトリーチ・ヘッドクォーターの設置など戦略的なアウトリーチ活動の展開方策を、「核融合エネルギー開発の推進に向けた人材の育成・確保について（平成30年3月28日核融合科学技術委員会）」において取りまとめた。
	H30 年度	アウトリーチ・ヘッドクォーターを設置（平成31年2月26日）し、今後の社会連携活動強化に向けた議論を始め、社会の理解と支援の基盤構築に貢献する端緒を掴んだ。
※3 相補的・代替的な役割の発揮状況	H28 年度	重水素実験を開始した。（ヘリカル方式） 流体不安定性を回避した新型核融合燃料ペレットを考案し、実験を開始した。（レーザー方式）
	H29 年度	イオン温度1億2,000万度を達成した。（ヘリカル方式） 超高磁場印加加熱、イオン加熱、衝撃波加熱などより効率的な加熱法を目指した実験を実施した。（レーザー方式）
	H30 年度	核融合炉に外挿可能な超高性能プラズマを実現するとともに、水素同位体効果の解明を進めた。（ヘリカル方式） 核融合燃料高速点加熱の物理機構を解明した。また、数kJのレーザーエネルギーで核融合プラズマ200億気圧を実証した。（レーザー方式）

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<p>核融合研究開発については、国際約束に基づく ITER（国際熱核融合実験炉）計画・BA（幅広いアプローチ）活動を推進しているとともに、研究開発の加速と課題達成を促すためには、多角的なアプローチが必要であることより、ITER や BA で採用されているトカマク方式の着実な進展を図るとともに、相補的・代替的なヘリカル方式・レーザー方式、更には革新的概念の研究を並行して行うべきとして、核融合科学研究所および大学等での学術研究基盤を推進し、研究成果を要素還元するなど、オールジャパンで取り組んでいる。更に核融合科学研究所および大学等は、これからの核融合研究を担う多くの優秀な人材を育成すべく、国内外との共同研究を通して、多様な研究の機会を提供するなどの役割を担っている。</p> <p>核融合研究開発は現在、実験炉の開発等を行う第三段階計画から原型炉の実現に向けた第四段階への移行を見据えるべき時期に入っており、我が国の原型炉に向けた新たな政策を示すため、核融合科学技術委員会において「核融合原型炉研究開発の推進に向けて」（平成 29 年 12 月 18 日）を策定した。その中では、原型炉研究開発のビジョンを明確にし、原型炉建設判断を行うにあたって達成すべき目標とその時期を示し、「チェックアンドレビュー」（以下 C&amp;R）を実施することとしている。C&amp;R 項目は本プログラム評価の中期目標達成の測定指標と実質的に同義であることより、C&amp;R をプログラム評価と連動することとする。</p>										
<p>各測定指標と C &amp; R 各項目との関係</p>											
<table border="1"> <thead> <tr> <th data-bbox="352 943 836 987">中目標の達成状況の測定指標等</th> <th data-bbox="836 943 1492 987">C &amp; R 項目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="352 987 836 1099">① ITER 建設作業の進捗と計画の着実な進展への貢献</td> <td data-bbox="836 987 1492 1099">① ITER による自己加熱領域での燃焼制御の実証 ③ ITER による統合化技術の確立</td> </tr> <tr> <td data-bbox="352 1099 836 1234">② 先進プラズマ研究開発のプラットフォームの構築</td> <td data-bbox="836 1099 1492 1234">② 原型炉を見据えた高ベータ定常プラズマ運転技術の確立 ④ 原型炉に係わる材料開発</td> </tr> <tr> <td data-bbox="352 1234 836 1346">③ 原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得</td> <td data-bbox="836 1234 1492 1346">⑤ 原型炉に係わる炉工学技術開発 ⑥ 原型炉設計</td> </tr> <tr> <td data-bbox="352 1346 836 1458">④ 核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤構築</td> <td data-bbox="836 1346 1492 1458">⑦ 社会連携</td> </tr> </tbody> </table>		中目標の達成状況の測定指標等	C & R 項目	① ITER 建設作業の進捗と計画の着実な進展への貢献	① ITER による自己加熱領域での燃焼制御の実証 ③ ITER による統合化技術の確立	② 先進プラズマ研究開発のプラットフォームの構築	② 原型炉を見据えた高ベータ定常プラズマ運転技術の確立 ④ 原型炉に係わる材料開発	③ 原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得	⑤ 原型炉に係わる炉工学技術開発 ⑥ 原型炉設計	④ 核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤構築	⑦ 社会連携
中目標の達成状況の測定指標等	C & R 項目										
① ITER 建設作業の進捗と計画の着実な進展への貢献	① ITER による自己加熱領域での燃焼制御の実証 ③ ITER による統合化技術の確立										
② 先進プラズマ研究開発のプラットフォームの構築	② 原型炉を見据えた高ベータ定常プラズマ運転技術の確立 ④ 原型炉に係わる材料開発										
③ 原型炉の工学設計に向けた見通しの獲得	⑤ 原型炉に係わる炉工学技術開発 ⑥ 原型炉設計										
④ 核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤構築	⑦ 社会連携										
<p>(参考)</p> <p>トカマク方式の着実な進展を図るとともに、相補的・代替的なヘリカル方式、レーザー方式、革新的概念の研究を並行して行う。</p>											
<p>C &amp; R および次段階への移行判断の実施時期</p>											
<p>2021 年頃</p> <p>2025 年以降数年内</p>	<p><b>第三段階</b></p> <p>(科学的・技術的実現性)</p> 	<p>第 1 回中間 C &amp; R</p> <p>第 2 回中間 C &amp; R</p>									

2035 年頃	原型炉移行判断	C & R
	<div data-bbox="675 300 793 349" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">第四段階</div> <p data-bbox="692 371 1046 405">(技術的実証・経済的実現性)</p> <div data-bbox="780 441 831 562" style="text-align: center;">  </div>	
21 世紀中葉	実用化判断	
	<div data-bbox="675 712 793 761" style="border: 1px solid black; padding: 2px;">実用段階</div>	

## 研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：疾病領域ごとの取組）：  
 「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、疾病領域ごとの取組：がん、精神・神経疾患、感染症等の疾患克服に向けた研究開発等を推進する。

中目標の達成状況の測定指標 (平成28年度～令和元年度) ※政策評価の事前分析表から転記	事業名 (事業期間) ※中目標の達成に必要な事業(必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載)	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
脳科学研究戦略推進プログラム・脳機能ネットワークの全容解明プロジェクトにおいて発表された論文数	脳科学研究戦略推進プログラム(臨床と基礎研究の連携強化による精神・神経疾患の克服(融合脳))(H28～R2)	調整中	H28	事前評価	「健康・医療戦略(平成26年7月22日閣議決定)」の「認知症やうつ病などの精神疾患等の発症に関わる脳神経回路・機能の解明に向けた研究開発及び基盤整備を各省連携の基に強力に進めることにより、革新的診断・予防・治療法を確立し、認知症・精神疾患等を克服する」、及び「医療分野研究開発推進計画(平成26年7月22日健康・医療推進本部決定)」の「基礎研究を強化し、画期的なシーズが常に生み出されることが、医療分野の研究開発を持続的に進めるためには必要である」に貢献するものである。	

	<p>脳科学研究戦略推進プログラム(臨床と基礎研究の連携強化による精神・神経疾患の克服(融合脳))(H28~R2)</p>	<p>63.8 億円<sup>※1</sup>/3 年</p>	<p>H30</p>	<p>中間評価</p>	<p>本事業は基礎研究と臨床研究の融合を図り、認知症性疾患の早期発見に向けた脳脊髄液中の疾患バイオマーカーの測定法の探索、ASD 治療に向けたオキシトシンの多施設臨床試験の実施、うつ病治療に向けた R-ケタミンの導出、神経科学研究推進に向けた日本ブレインバンクネットを介した検体の提供等が進捗しており、各研究開発グループで目標の達成に向けて役割分担を明確にした研究開発が進められている。脳科学研究を戦略的に推進し、精神・神経疾患の予防、診断、治療への貢献が求められる中で、「健康・医療戦略」(平成 26 年 7 月 22 日閣議決定、平成 29 年 2 月 17 日一部変更)における「認知症やうつ病などの精神・神経疾患等の発症に関わる脳神経回路・機能の解明に向けた研究開発及び基盤整備を各省連携の下に強力に進めることにより、革新的診断・予防・治療法を確立し、精神・神経疾患等を克服する。」に貢献している。</p>	
--	---	---------------------------------	------------	-------------	---	--

	<p>脳科学研究戦略推進プログラム（行動選択・環境適応を支える種を超えた脳機能原理の抽出と解明（環境適応脳））(H29～R3)</p>	<p>調整中</p>	<p>H28</p>	<p>事前評価</p>	<p>「脳科学研究戦略推進プログラム（脳プロ）」は「社会に貢献する脳科学」の実現のために、社会への応用を見据えた脳科学研究を戦略的に推進することを目的として、平成20年度より実施されている。本プログラムにおいて、従来は着手されていなかった行動選択・環境適応を支える脳機能原理の解明を進めることで、その破綻によって生じる疾患（依存症、PTSD、睡眠障害等）のメカニズム・病態の解明や、創造性の基盤となる脳機能の理解等に貢献する。</p>	
	<p>脳科学研究戦略推進プログラム（行動選択・環境適応を支える種を超えた脳機能原理の抽出と解明（環境適応脳））(H29～R3)</p>	<p>59.2 億円<sup>※2</sup>/3年</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p>	<p>環境適応の不全に関連した疾患（依存症、PTSD、睡眠障害等）発症に深く関わる行動選択・環境適応を支える脳機能原理の解明に向けて、高性能な新規 PET トレーサーを開発し、霊長類の意思決定のメカニズムに関する知見を得る等、各チームが独創的・先駆的技術を開発・駆使しながら着実に成果をあげるとともに、研究開発の効率化のためチーム間の交流に努めている。このことから*健康・医療戦略（平成26年7月22日閣議決定、平成29年2月17日一部変更）に即して策定された医療分野研究開発推進計画の達成目標のうち、「精神疾</p>	

					<p>患の客観的診断法の確立」「精神疾患の適正な治療法の確立」及び「認知症の診断・治療効果に資するバイオマーカーの確立」などに向けて、貢献しているものと考えられる。 *参考：科学技術基本計画（平成 28 年 1 月 22 日閣議決定）第 3 章（1） ② i)</p>	
	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト(革新脳) (H26～R5)	調整中	H25	事前評価	<p>「健康・医療戦略」（平成 25 年 6 月 14 日関係大臣申合せ）において、「認知症やうつ病といった精神・神経疾患の克服や新しい情報処理技術の確立につながる高次脳機能を担う脳神経回路・機能の解明に向けた技術開発及び研究開発を進める」ことが明記されており、本プログラムを推進する必要がある。</p>	
	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト(革新脳) (H26～R5)	101.7 億円/3 年	H29	中間評価	<p>超高磁場 MRI によるマーモセット MRI 実験系を確立し、構造レベルでのマッピングにおけるデータ蓄積及びその解析が順調に進んでいる。細胞レベルでの機能マッピングについては若干の遅れが見られることから体制の改善が必要である。多施設共同大規模 MRI 研究や多数のトランスレータブル脳指標の開発、複数の疾患モデルマーモセットの作出・解析等が進んでいることから、マーモセットとヒトの脳機能を結</p>	

					<p>び、神経回路と脳機能障害の因果関係を解明するという目的に向けて着実に進展しているものと評価できる。更に、脳のより広域・深部でのイメージングを可能にする技術や神経活動計測技術等、マーマセットの脳の全容解明を加速させるための有用な革新的技術が創出されていると評価できる。これらは「健康・医療戦略」(平成26年7月22日閣議決定)における、「認知症やうつ病と言った精神・神経疾患の克服や新しい情報処理技術の確立につながる高次脳機能を担う脳神経回路・機能の解明に向けた技術開発及び研究開発を進める」に貢献する。</p>
	<p>革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト(革新脳)(H26~R5)</p>	<p>178.8億円<sup>*3</sup>/5年</p>	<p>H30</p>	<p>中間評価</p>	<p>ヒトの脳の理解については、ヒト脳MRI画像撮像の標準プロトコルを策定し、統合失調症に特異的な淡蒼球の左右差を世界で初めて解明した。また、統合失調症患者のゲノム解析から第22番染色体の部分欠失を原因候補変異として同定し、患者死後脳や患者由来iPS細胞の解析を通して、同疾患の病態メカニズムの一端を解明するとともに早期診断の可能性を示唆した。</p> <p>霊長類脳構造・機能マップ作成に寄与する革新的</p>

				<p>な技術開発については、脳深部の標識神経細胞からの発光を自由行動下、非侵襲的に可視化する新規発光システム AkaBLI や、大脳皮質の広領域の神経活動のマッピングに成功した超広視野顕微鏡等を開発するなど、計画以上に順調に進捗し、国際的に極めて競争力のある成果を上げた。</p> <p>霊長類の脳の情報処理原理を抽出するための戦略及び方法が明確にされないまま研究が進められている点はプロジェクト全体のマネジメントを見直す必要がある。</p> <p>本プロジェクトは、脳科学の発展に大きな貢献が期待される成果及び国際的に極めて競争力のある成果を上げるとともに、米国のブレインイニシアティブ、EU のヒューマンブレインプロジェクトに匹敵するものとして国際的に認知されている。精神・神経疾患の患者数の増大が大きな社会問題となりつつある中で、「健康・医療戦略」(平成 26 年 7 月 22 日閣議決定、平成 29 年 2 月 17 日一部変更)において、「認知症やうつ病などの精神・神経疾患等の発症に関わる脳神経回路・機能の解明に</p>
--	--	--	--	---

					向けた研究開発及び基盤整備を各省連携の下に強力に進めることにより、革新的診断・予防・治療法を確立し、精神・神経疾患等を克服する。」ことに貢献している。	
	戦略的国際脳科学研究推進プログラム(国際脳) (H30～R5)	調整中	H29	事前評価	脳科学分野における国内外での大型の研究プロジェクトがそれぞれの特色を生かしつつ、相互に緊密に協力することの重要性が国際的な枠組みで認識されている(平成28年2月開催のGサイエンス学術会議共同声明、平成28年5月開催のG7伊勢志摩サミット首脳宣言附属文書)。 我が国の、ひいては世界の脳科学研究を飛躍的に発展させるため、国内外の共同研究体制の構築に向けて中核的組織を形成するとともに既存の国内外の研究開発と連携し、革新脳の拡充分としてヒト脳の経時的臨床データの比較研究、非ヒト霊長類脳とヒト脳の比較研究、新規に脳神経回路解析のための革新的技術開発、AI研究との連携による新たな脳型アルゴリズムの構築と脳の動作原理の理解に資する研究を推進する。これらは健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、精神・神経疾患の疾患克服に向けた研究開発	

					等の推進に貢献する。	
--	--	--	--	--	------------	--

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康・医療戦略（平成 26 年 7 月 22 日閣議決定、平成 29 年 2 月 17 日一部変更）に即して策定された医療分野研究開発推進計画の達成目標のうち、「精神疾患の客観的診断法の確立」に対して AMPA 受容体の PET 薬剤の開発など、「精神疾患の適正な治療法の確立」に対してうつ病治療薬としての R-ケタミンの治験開始に向けた研究開発などを順調に推進し、目標達成に貢献している。</li> <li>・研究開発計画（平成 29 年科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会）における「精神・神経疾患の克服に向けた知の蓄積」として、平成 27 年度から 30 年度までの 4 年間で論文掲載数 2573 報<sup>※4</sup>につながっている。 また、精神・神経疾患克服の基盤となる脳機能ネットワークの解明として、革新脳において世界に先行した霊長類の脳神経回路の研究基盤の構築に取り組むことにより、国際的に我が国の脳科学研究の認知度を高め、脳科学研究の国際連携に向けた国際脳の開始につながった。 さらに、3 つのプログラムとも若手公募課題を設けるなど次世代を担う若手研究者を育成する場を提供している。</li> <li>・ファンディングがもたらした脳科学研究の我が国における波及効果や育成の成果について、脳科学委員会は脳科学の研究開発に係る有識者から構成されているため、日本全体に対するその経済効果や異なる分野での2次利用の動向などを踏まえた定量評価・分析をするには、別途取組みが必要である。</li> <li>・なお、今回のように脳科学研究の各事業を横断的に見て評価する取組がなされてこなかったことから、今後はこのような観点も踏まえて評価の実施方法を検討してはどうか。</li> </ul>
------------------------------	--

※1 BMI 技術、霊長類モデル（以上、平成 29 年度終了）、及び環境適応脳（令和 3 年度終了予定）の予算を含む。

※2 BMI 技術、霊長類モデル（以上、平成 29 年度終了）、及び融合脳（令和 2 年度終了予定）の予算を含む。

※3 平成 30 年度予算には戦略的国際脳科学研究推進プログラムの予算を含む

※4 論文数は文部科学省「令和元年度実施施策に係る事前分析表」より集計。AMED に提出される研究成果報告書に基づく合計値であり、重複して集計されている可能性がある。[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2018/10/05/1409681\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/10/05/1409681_9.pdf)

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：医薬品・医療機器開発への取組）：  
 「健康・医療戦略（平成26年7月22日閣議決定、平成29年2月17日一部変更）」及び「医療分野研究開発推進計画（平成26年7月22日健康・医療戦略推進本部決定、平成29年2月17日一部変更）」等に基づき、医薬品・医療機器開発への取組：医薬品創出のための支援基盤の整備等により、革新的医薬品・医療機器開発を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～〇〇年度） ※政策評価の事前分析表から転記	事業名（事業期間） ※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
①創薬支援により新たに創薬シーズ※が見つかった件数 ※：取扱いテーマにおいて一次スクリーニングでヒットがあった場合を1とカウ	創薬等ライフサイエンス研究支援基盤事業	-	R1	中間評価	アカデミアの創薬研究支援により、「オールジャパンでの医薬品創出」に寄与し、第5期科学技術基本計画において重要政策課題の一つに設定されている「世界最先端の医療技術の実現による健康長寿社会の形成」に貢献している。	

<p>トする。 426 件/5 年</p> <p>②革新的医療機器の実用化に資する成果の件数（累積） 4 件/3 年</p>	<p>先端的バイオ創薬等基盤技術開発事業 (H31～H35)</p>	-	H30	事前評価	<p>アカデミアの創薬研究支援により、「オールジャパンでの医薬品創出」に寄与し、第5期科学技術基本計画において重要政策課題の一つに設定されている「世界最先端の医療技術の実現による健康長寿社会の形成」に貢献する。</p>
	<p>医療分野研究成果展開事業 (H27～)</p>	171.2 億円/3 年	H30	中間評価	<p>「医療分野研究開発推進計画」に基づく各省連携の重点プロジェクトの一つである「オールジャパンでの医療機器開発プロジェクト」を構成する重要施策として位置付けられ、アカデミアの技術シーズを革新的な医療機器の実用化につなげるにより、これらで定められる目標の達成に貢献。</p>

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<p>○本評価の使われ方などが不明確で有用性や必要性が不明であるほか、各事業の研究の在り方に妙なフィードバックが掛かるのではないかと危惧する。</p> <p>○本研究開発プログラム評価を構成している事業はすべて、内閣総理大臣を本部長とする健康・医療戦略推進本部の下、文部科学省事業のみならず、厚生労働省や経済産業省等も含めたオールジャパンの統合プロジェクトを構成する事業として、厳格な KPI 等に基づき有識者等の評価を受けているところ。一方、研究開発プログラムの手法では、文部科学省事業のみの評価となることに加え、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づく統合プロジェクトの構成とも異なり、その意義が不明確であるとも考えられる。ついては、いわゆる評価疲れの観点も踏まえ、今後の研究開発計画・研究開発プログラムと健康・医療戦略推進本部における評価との関係性について整理されることを望む。</p> <p>○実際の事業運営を AMED で行っている事業にとっては、当省においてこのような</p>
------------------------------	---

	<p>評価を行うことで、AMED（や PSP0）に対して、文部科学省の考えや問題意識を伝えられるのは副次的効果となりえる。</p> <p>○そもそも、現実的に、事後評価を（概算要求の関係で）後継事業の事前評価の後に 行わざるを得ない仕組みを改善すべきだと思う。</p>
--	--

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：臨床研究・治験への取組）：  
 「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、臨床研究・治験への取組：全国に橋渡し研究拠点を整備し、アカデミア等の基礎研究の成果を一貫して実用化に繋ぐ体制を構築する。

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～〇〇年度） ※政策評価の事前分析表から転記	事業名（事業期間） ※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
橋渡し研究支援拠点の支援により基礎研究の成果が「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」に基づく医師主導治験の段階に移行した数（件） 85件/5年	橋渡し研究戦略的推進プログラム	-	R1	中間事前評価	本事業においては、臨床研究中核病院と連携しながら、橋渡し研究支援基盤によるアカデミアのシーズ育成や研究成果の導出支援、人材育成等を行っている。健康・医療戦略（平成26年閣議決定）に基づく革新的医療技術創出拠点プロジェクトの成果目標である医師主導治験届出件数、FIH試験（企業治験含む）件数に貢献することにより、本事業は医療分野研究開発推進計画に貢献している。	

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<p>○本評価の使い方などが不明確で有用性や必要性が不明であるほか、各事業の研究の在り方に妙なフィードバックが掛かるのではないかと危惧する。</p> <p>○本研究開発プログラム評価を構成している事業はすべて、内閣総理大臣を本部長とする健康・医療戦略推進本部の下、文部科学省事業のみならず、厚生労働省や経済産業省等も含めたオールジャパンの統合プロジェクトを構成する事業として、厳格な KPI 等に基づき有識者等の評価を受けているところ。一方、研究開発プログラムの手法では、文部科学省事業のみの評価となることに加え、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づく統合プロジェクトの構成とも異なり、その意義が不明確であるとも考えられる。ついては、いわゆる評価疲れの観点も踏まえ、今後の研究開発計画・研究開発プログラムと健康・医療戦略推進本部における評価との関係性について整理されることを望む。</p> <p>○橋渡し研究戦略的推進プログラムにおける成果は、革新的医療技術創出拠点プロジェクトの成果目標に貢献しているが、5か年のプログラムの中で成果目標の見直しが行われず、状況の変化に対応した成果目標や評価指標となっていない可能性がある。また、AMED による省を跨いだプロジェクト運営を期待しておきながら、評価を省ごとに行うことにより、結果として事業が分断されてしまっている。</p>
------------------------------	--

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：世界最先端の医療の実現に向けた取組）：  
 「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、世界最先端の医療の実現に向けた取組：iPS細胞等を用いた革新的な再生医療・創薬をいち早く実現するための研究開発の推進を図るとともに、ゲノム医療の実現に向けた取組を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～〇〇年度） ※政策評価の事前分析表から転記	事業名（事業期間） ※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
①iPS細胞等幹細胞を用いた課題の臨床研究への移行（件）（累積） 28件/5年  ②発見された疾患関連遺伝子候補及び薬剤関連遺伝子候補数（累積） 1,245件/5年	再生医療実現拠点ネットワークプログラム（H25～H34）	404.7億円/4年	R1	中間評価	本プログラムの成果及び、引き続いて臨床段階に移行した研究課題への厚生労働省等による支援により、「健康・医療戦略」（平成26年7月22日閣議決定、平成29年2月17日一部変更）に即して策定された医療分野研究開発推進計画の2020年までの成果目標（KPI）のうち、特に「臨床研究又は治験に移行する対象疾患の拡大 約35件」は既に達成されている。特にiPS細胞を用いた再生医療については複数の支援課題が世界に先駆けて臨床段階に到達してお	

					り、「科学技術基本計画」(平成 28 年 1 月 22 日閣議決定)の「世界最先端の医療技術の実現による健康長寿社会の形成」を引き続き進めていく上で、大きく貢献するものと考えられる。
	疾患特異的 iPS 細胞の活用促進・難病加速プログラム	-	R2	中間評価	「健康・医療戦略」(平成 26 年 7 月 22 日閣議決定、平成 29 年 2 月 17 日一部変更)に即して策定された「医療分野研究開発推進計画」の 2020 年までの成果目標 (KPI)のうち、「iPS 細胞技術を活用して作製した新規治療薬の臨床応用 (臨床研究又は治験の開始)」は旧事業の成果が進捗・発展したことで、既に達成されている。本プログラムでも、疾患特異的 iPS 細胞を用いた新規治療候補薬の同定に向けた研究開発が順調に進んでおり、今後の臨床応用が期待される。また、理研 BRC の研究用ヒト iPS 細胞バンクは世界最大規模のバンクとして、iPS 細胞研究基盤の強化に大きく寄与している。このような本プログラムの成果は、「科学技術基本計画」(平成 28 年 1 月 22 日閣議決定)の「世界最先端の医療技術の実現による健康長寿社会の形成」を引き続き進めていく上で、大きく貢献す

					るものと考えられる。	
	ゲノム研究バイオバンク事業 (H30～R4)	3.6 億円 /1 年 (要 求 額)	H29	事前評価	本事業は、世界最大級の疾患バイオバンクであるバイオバンク・ジャパンの利活用促進により、ゲノム医療の実現に貢献を目指すものであり、第5期科学技術基本計画において求められているゲノム医療などの世界最先端の医療の実現に貢献すると考えられる。	
	ゲノム医療実現推進プラットフォーム事業 (H28～R7)		H27	事前評価	本事業は、既存のバイオバンク等を研究基盤・連携のハブとして再構築するとともに、その研究基盤を利活用した目標設定型の先端研究開発を一体的に行うものであり、第5期科学技術基本計画において求められているゲノム医療などの世界最先端の医療の実現に貢献すると考えられる。	
	東北メディカル・メガバンク計画	328 億円 /5 年	H27	中間評価	本事業は、東日本大震災で未曾有の被害を受けた被災地を中心に、15万人規模の大規模コホート研究を行うことにより、地域医療の復興に貢献するとともに、創薬研究や個別化医療等の次世代医療体制の構築を目指すものである。バイオバンク構築等は概ね妥当な水準で	

					実施されており、第5期科学技術基本計画において求められているゲノム医療などの世界最先端の医療の実現に貢献している。
--	--	--	--	--	---

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<p>○本評価の使い方などが不明確で有用性や必要性が不明であるほか、各事業の研究の在り方に妙なフィードバックが掛かるのではないかと危惧する。</p> <p>○本研究開発プログラム評価を構成している事業はすべて、内閣総理大臣を本部長とする健康・医療戦略推進本部の下、文部科学省事業のみならず、厚生労働省や経済産業省等も含めたオールジャパンの統合プロジェクトを構成する事業として、厳格な KPI 等に基づき有識者等の評価を受けているところ。一方、研究開発プログラムの手法では、文部科学省事業のみの評価となることに加え、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づく統合プロジェクトの構成とも異なり、その意義が不明確であるとも考えられる。については、いわゆる評価疲れの観点も踏まえ、今後の研究開発計画・研究開発プログラムと健康・医療戦略推進本部における評価との関係性について整理されることを望む。</p> <p>○研究計画・評価分科会 ライフサイエンス委員会 幹細胞・再生医学戦略作業部会においても、再生医療実現拠点ネットワークプログラム中間評価の結果を踏まえた上で今後の幹細胞・再生医学研究の支援方針について議論を行うことができ、「今後の幹細胞・再生医学研究の在り方について（第3版）」（令和元年9月3日）をとりまとめる上で議論の土台となったと考えられる。</p> <p>○評価を行うことで、次世代医療実現のための基盤形成に関する作業部会において議論を行う土台ができたと考えられる。一方、各研究開発事業の期間は事業によって異なるため、ゲノム関連の研究開発プログラム全体としての評価は困難であった。</p>
------------------------------	--

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

【ライフサイエンス委員会 3/5】

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：疾病領域ごとの取組）：

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、疾病領域ごとの取組：がん、精神・神経疾患、感染症等の疾患克服に向けた研究開発等を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～〇〇年度） ※政策評価の事前分析表から転記	事業名 （事業期間） ※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
①次世代がん医療創生研究事業採択課題のうち、新規分子標的薬剤及び新規治療法に資する有望シーズ、早期診断・個別化治療予測バイオマーカー及び新規免疫関連有	精神・神経疾患の克服を目指す脳科学研究（課題F） (H23～H27)			事後評価		別途提出した脳科学委員会の評価票を参照
	脳科学研究を支える集約的・体系的な情報基盤の構築（課題G） (H23～H27)			事後評価		別途提出した脳科学委員会の評価票を参照

<p>効分子の数（累積） 4 件/2 年</p> <p>②病原体（インフルエンザ・デング熱・下痢症感染症・薬剤耐性菌）の疫学研究及び治療薬、迅速診断法等の研究開発の進捗</p>	<p>感染症研究革新イニシアティブ</p>	<p>40.5 億円 /3 年（調整費を含む）</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p> <p>・「医療分野研究開発推進計画」に基づく各省連携の重点プロジェクトの1つである「新興・再興感染症制御プロジェクト」を構成する重要施策として位置付けられ、これらで定められる目標の達成に貢献。</p>	
<p>H28 年度：インドネシアにおいて高病原性鳥インフルエンザウイルス H5N1 に対するヒトの抗体保有調査によって多数の不顕性感染者の存在を世界で初めて示し、また薬剤耐性菌の耐性を阻害し、感受性を回復させる候補薬剤を見いだした等の成果を創出。</p>	<p>次世代がん医療創生研究事業</p>	<p>-</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p> <p>・「医療分野研究開発推進計画」に基づく各省連携の重点プロジェクトの1つである「ジャパン・キャンサー・リサーチ・プロジェクト」を構成する重要施策として位置付けられ、これらで定められる目標の達成に貢献。</p>	
<p>H29 年度：全てのデングウイルスについてウイルス増殖阻害効果を示</p>	<p>脳科学研究戦略推進プログラム（行動選択・環境適応を支える種を超えた脳機能原理の抽出と解明（環境適応脳）） (H29～H33)</p>				<p>別途提出した脳科学委員会の評価票を参照</p>
	<p>革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト (H26～H35)</p>				<p>別途提出した脳科学委員会の評価票を参照</p>

す候補化合物の取得に成功し、また薬剤耐性菌についてサーベイランスや感染予防に有用となる迅速簡便な検出方法を開発した等の成果を創出。	戦略的国際脳科学研究の推進 (H30～H35)					別途提出した脳科学委員会の評価票を参照
	脳科学研究戦略推進プログラム (H28～H32)					別途提出した脳科学委員会の評価票を参照
	感染症研究国際展開戦略プログラム	108.5 億円 /5 年 (調整費を含む)	R1	事後評価	・「医療分野研究開発推進計画」に基づく各省連携の重点プロジェクトの1つである「新興・再興感染症制御プロジェクト」を構成する重要施策として位置付けられ、これらで定められる目標の達成に貢献。	
	脳科学研究戦略推進プログラム（ブレイン・マシン・インターフェイス（BMI）技術を用いた自立支援、精神・神経疾患等の克服に向けた研究開発）					別途提出した脳科学委員会の評価票を参照

	脳科学研究戦略推進プログラム（霊長類モデル動物の創出・普及体制の整備）				別途提出した脳科学委員会の評価票を参照
	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト（H26～H35）				別途提出した脳科学委員会の評価票を参照

研究開発プログラムの評価に当たっての気づき	<p>○本評価の使われ方などが不明確で有用性や必要性が不明であるほか、各事業の研究の在り方に妙なフィードバックが掛かるのではないかと危惧する。</p> <p>○本研究開発プログラム評価を構成している事業はすべて、内閣総理大臣を本部長とする健康・医療戦略推進本部の下、文部科学省事業のみならず、厚生労働省や経済産業省等も含めたオールジャパンの統合プロジェクトを構成する事業として、厳格なKPI等に基づき有識者等の評価を受けているところ。一方、研究開発プログラムの手法では、文部科学省事業のみの評価となることに加え、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づく統合プロジェクトの構成とも異なり、その意義が不明確であるとも考えられる。については、いわゆる評価疲れの観点も踏まえ、今後の研究開発計画・研究開発プログラムと健康・医療戦略推進本部における評価との関係性について整理されることを望む。</p>
-----------------------	--

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（ライフサイエンス分野：研究開発の環境の整備や国際的視点に基づく取組）：  
「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、ライフサイエンス研究基盤の整備、国際共同研究等の取組を推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成28年度～〇〇年度） ※政策評価の事前分析表から転記	事業名（事業期間） ※中目標の達成に必要な事業（必要に応じ、国立研究開発法人において運営費交付金等により実施されている事業も記載）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況 ※科学技術基本計画やその他政府の計画等への貢献状況	備考 ※その他の気づき等
提供した実験動物・植物等を用いて発表された論文数 4,618件/5年	ナショナルバイオリソースプロジェクト	-	R1	中間評価	本事業は、第5期科学技術基本計画（平成28年1月22日閣議決定）に記載されている「幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効率的促進するために～（中略）～生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備」に貢献している。	
	老化メカニズムの解明・制御プロジェクト （H29年度～R3年度）	39.4億円（3年間）	R1	中間評価（案）	多面的なアプローチや種々のモデル生物を活用した検討により、細胞老化の誘導・維持に関わる因子の同定や新たな分子機構についての知見を取得し、健康長寿延	

				<p>伸シーズにつながる発見等、着実に成果をあげている。このことから*健康・医療戦略（平成26年7月22日閣議決定、平成29年2月17日一部変更）に即して策定された医療分野研究開発推進計画のうち、疾患領域対応型事業の取組みとして「高齢者に特有の疾患や老化・加齢メカニズムの解明・制御についての研究を推進する」に貢献しているものと考えられる。</p> <p>*参考：科学技術基本計画（平成28年1月22日閣議決定）第3章（1）② i)</p>	
	<p>革新的先端研究開発支援事業 （平成26年度-）</p>	<p>88億円</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p> <p>本事業では、革新的な医薬品や医療機器、医療技術等に繋がる画期的シーズの創出・育成を目的に、客観的根拠に基づき定めた研究開発目標の下、先端的研究開発を推進している。これまでに科学的・学術的に優れた成果を多数創出するとともに、特許登録やAMED他事業へのシーズ展開も着実に推進しているほか、成果最大化のための制度改善にも継続的に取り組んでいる。このことから、本事業は科学技術基本計画及び健康・医療戦略に貢献しているものと評価できる。</p>	

	<p>医療分野国際 科学技術共同 研究開発推進 事業</p>	<p>10 億円/ 年</p>	<p>R1</p>	<p>中間評 価</p>	<p>本事業においては、国際協力を推進し、質の高い臨床研究や治験、研究ネットワークの構築等を行うための国際共同研究の実施支援体制強化に向け、7機関との MOC を締結した。また、持続可能な発展目標達成に向けた地球規模課題解決については、SATREPS 及びアフリカ NTDs プログラムでの国際共同研究の成果が相手国政府から高く評価されており、このことから、本事業は科学技術基本計画及び健康・医療戦略（平成 26 年 7 月 22 日閣議決定、平成 29 年 2 月 1 日一部変更）に貢献しているものと評価できる。</p>
--	--	---------------------	-----------	------------------	--

<p>研究開発プログラムの評価に当たっての気づき</p>	<p>○本評価の使い方などが不明確で有用性や必要性が不明であるほか、各事業の研究の在り方に妙なフィードバックが掛かるのではないかと危惧する。</p> <p>○本研究開発プログラム評価を構成している事業はすべて、内閣総理大臣を本部長とする健康・医療戦略推進本部の下、文部科学省事業のみならず、厚生労働省や経済産業省等も含めたオールジャパンの統合プロジェクトを構成する事業として、厳格な KPI 等に基づき有識者等の評価を受けているところ。一方、研究開発プログラムの手法では、文部科学省事業のみの評価となることに加え、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づく統合プロジェクトの構成とも異なり、その意義が不明確であるとも考えられる。ついては、いわゆる評価疲れの観点も踏まえ、今後の研究開発計画・研究開発プログラムと健康・医療戦略推進本部における評価との関係性について整理されることを望む。</p> <p>○研究開発計画（平成 29 年科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会）において、健康・医療戦略等の下で「老化のメカニズム解明・制御の基礎研究の推進及び研究基盤等の構築等の取組について実施する。」としている。当該計画の下、老化メカニズムの解明・制御プロジェクトでは、基礎研究を実施する 2 つの研究開発拠点とその 2 拠点を専門的な解析技術や人材交流の支援等を目的とした研究推進・支援拠点を設置し、基礎研究を体系的に強化する取組を進めている。その取組により、事業開始から 2 年間で 34 報の学術的にインパクトがある論文が掲載され、皮膚の</p>
------------------------------	--

	<p>質と恒常性の維持や肝臓の修復機構などにおいて、国際的に評価される老化の新しい概念につながる研究成果が創出されている。</p> <p>○革新的先端研究開発支援事業の承継元事業である JST 戦略的創造研究推進事業（新技術シーズ創出）については、科学技術・学術審議会基礎研究振興部会において、事業の一層の充実・強化に向けた観点が取りまとめられており、戦略目標の大きくくり化、これまでの領域運営で得られたグッドプラクティスの蓄積、提出書類等の研究者の事務負担の軽減などについて提言されている。今後はこういった提言も踏まえて医療・創薬分野の特性に応じた事業改善に不断に取り組んでいくことが必要である。</p> <p>○医療分野国際科学技術共同研究開発推進事業では、中目標達成のために重点的に推進した取組として、海外事務所を活用し、国際的活動を拡大するとともに、国際的な研究ネットワーク及び研究環境の基盤の構築を行った。これらのネットワーク及び基盤をもとに重要な研究分野について国際共同研究を推進した。また、アフリカ・ASEAN 等との共同研究を推進し、その成果の社会実装に努めるなど科学技術外交・保健外交に貢献した。さらに、今後重要となる研究領域を対象に、Interstellar Initiative 事業を創設し、国際的に活躍が期待される若手研究者の育成を強化した。</p> <p>○実際の事業運営を AMED で行ってる事業にとっては、当省においてこのような評価を行うことで、AMED（や PSP0）に対して、文科省の考えや問題意識を伝えられることは「副次的効果」ではないか。</p>
--	--

<参考>

大目標：

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

## 研究開発プログラム評価票

(令和元年度)

中目標（航空科学技術分野）：

航空科学技術について、我が国産業の振興、国際競争力強化に資するため、社会からの要請に応える研究開発、次世代を切り開く先進技術の研究開発及び航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発を推進する。

中目標の達成状況の測定指標 (平成 28 年度～平成 30 年度)	事業名 (事業期間)	予算規模	評価 年 度	評価 の 種 類	科学技術基本計画等への貢 献状況	備考
①航空科学技術の研究開発における連携数（JAXAと企業等との共同／受託研究数） H28：53 H29：69 H30：63	社会からの要請に応える研究開発 ※2 (-)	-	-	-	平成 30 年度においては、機体騒音低減技術における欧米の実証結果を大きく上回る低騒音デバイスの設計等の優れた成果が得られた。	
②航空科学技術の研究開発の成果利用数（JAXA 保有の知的財産（特許、技術情報、プログラム／著作権）の供与数） H28：39 H29：53 H30：54					本研究開発は、科学技術基本計画及び研究開発計画のみならず第 10 次交通安全基本計画（平成 28 年 3 月 11 日中央交通安全対策会議）等関連の閣議決定に対し、①特殊気象の影響を予知・検知・防御する技術による航空機運航の安全性・効率性の向上、②災害対応・警備警戒等の危機管理分野のニーズへの対応による我が国の防災・危機管理能力の向上、③次世代エンジンの鍵となるコアエンジン技術、並びに機体騒音の低騒音化設計技術等による環境適合性・経済性の向上と国際競争力の強化を通じた貢献を果たしている。	
③航空分野の技術の国内外の標準化、基準の高度化への貢献 ※1 欄外に記載					コアエンジン技術の研究開	

	<p>発 ※3 (H30～R5 年 度)</p>		<p>評 価</p>	<p>に推進すべき研究開発の取組として、我が国の産業の振興、国際競争力強化に資するため、社会からの要請に応える研究開発の推進が掲げられている。</p> <p>本研究開発は、燃焼器に関する希薄予混合燃焼技術や高圧タービン静翼へのCMCの適用等の次世代エンジンの鍵となる革新的なコアエンジン技術により航空機の環境適合性・経済性向上を可能とするものである。また、JAXA に整備中の実証用エンジン（F7 エンジン）を活用するなどによって、2030 年代に就航が予想される次世代航空機用エンジンの国際共同研究開発においても国内メーカーが設計分担を狙えるレベルまで技術成熟度を高めることとしている。</p> <p>以上から、本研究開発は科学技術基本計画に基づく研究開発計画に掲げられる取組の推進を通じて、我が国の航空科学技術の発展に大きく貢献するものである。</p>	
	<p>次世代を切り開く先進技術の研究開発 ※2 (-)</p>	-	-	<p>平成 30 年度においては、電動航空機に関する産学官の連携体制である航空機電動化コンソーシアム（ECLAIR）の立ち上げ、この体制による将来ビジョンの策定等の優れた成果が得られた。</p> <p>本研究開発は、低ブーム超音速機実現の鍵となる要素技術研究及びシステム設計技術（既存機の離着陸騒音基準に適合しつつ陸地上空においても超音速飛行を実現）、航空</p>	

				機の推進システム電動化（航空機の大幅な燃費削減（CO2排出量削減）を実現）の鍵技術の獲得等により、特に2040年代以降の将来航空輸送のブレークスルーの実現などを見込めることから、科学技術基本計画、研究開発計画等に対し貢献を果たすものである。	
	航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発 ※2 (一)	-	-	-	平成30年度においては、数値シミュレーション技術、検証データ生産用試験・計測技術、データ科学の三者を連携させ、世界最高レベルの信頼性と予測精度を有する解析ツール群の開発を目指す取組として、フラッタ現象の予測に資する解析ツールのパイロットコードが完成する等の優れた成果が得られた。 本研究開発は、統合シミュレーション技術とともに、試験・計測技術、材料等の評価技術等の技術の確立による共通基盤技術の戦略的強化を通じ、科学技術基本計画、研究開発計画等に対し貢献を果たすものである。

研究開発プログラムの評価に当たっての気づき	<p>(研究開発成果の総覧)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各事業の内容及び進捗状況はいずれも計画に貢献する価値の高いものであると評価できる。</li> <li>・「社会要請に応える研究開発」では、特に地球全体で脅威を増す異常気象に関して国内のデータ及び対応技術をオープンイノベーションで集約し、世界的に注目される成果を出している点が評価できる。</li> <li>・「次世代を切り開く先進技術の研究開発」では、特に世界が一斉に取り組みだしたエミッションフリー技術に対して、国内メーカー・有識者をこれまでに例がない規模で連携するコンソーシアムを展開し、海外での標準化への発信力・存在感を高めている点が評価できる。</li> <li>・「航空機産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発」では、特に世界的なデジタルでの産業革命の潮流の先端的取組として、実機開</li> </ul>
-----------------------	---

発機会に限られる中で航空機の本質的なインテグレーション力をシミュレーションで補う技術を示し、日本が主体的に国際協調する体制を築いている点が評価できる。

(今後の取組の方向性について)

- ・(次期) 科学技術基本計画で謳われるであろう人間中心の社会(Society 5.0)の実現に向け、航空科学技術分野から、これに関する課題抽出と研究開発を行うことが重要である。
- ・各事業について、以下のとおり、研究開発ビジョン中間とりまとめにおける「デザイン・シナリオを実現する研究開発基盤の方向性」の記載事項に留意して取り組むべきである。
  - －「我が国の優位技術を考慮した研究開発戦略」については、中間のとりまとめに例示されている事項を考慮すること
  - －「異分野連携も活用した革新技術創出」については、連携先となる異分野のプレーヤーとの役割分担について十分留意すること
  - －「出口を見据えた産業界との連携」については、出口(範囲および期間など)を的確に捉えること
- ・各事業の連携による相乗効果や更なる貢献の可能性を考慮して研究開発を進めるべきである。(例: 推進システムに関するコアエンジン技術とエミッションフリー航空機技術の関係性)
- ・「技術のための技術」や「手段の目的化」等に陥らないよう、計画の最終的な目的の意識、社会のニーズへの適合の確認を絶えず行っていくべきである。
- ・研究開発期間の完了後における成果の速やかな技術移転のため、現在も事業の実施期間中から構築を開始しているメーカーとの協働関係を、継続的に発展させるよう取り組んでいくことが重要である。

(システム改革との関連)

- ・研究予算と人的資源の事業間の大きな偏りの有無、それらの配分に関する改善の余地について、常に注視していくべきである。
- ・研究開発課題評価の対象課題がない「航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発」の研究成果や、それ以外の研究開発課題の進捗に対する貢献に鑑み、当該事業に十分な予算措置、人員配置を行っていくことが重要である。

(研究開発プログラム評価の仕組みの改善)

- ・以下の点についても評価することを検討してはどうか。
  - －我が国の研究開発の優位性や進捗状況を諸外国と比較・評価した結果に基づく処置(事業進捗の加速等)の要否について
  - －基礎基盤的な事業における人材力の維持・強化及び挑戦的な技術課題を創出するための活動について

	一開発した技術の活用先（具体的な事例による）について 一効率的な研究開発のための課題間のコミュニケーションについて
--	--

※1 ③航空分野の技術の国内外の標準化、基準の高度化への貢献

H28

- ・国際民間航空機関（ICAO）において超音速機の騒音技術の進捗に関する資料の作成やソニックブーム基準に用いる評価指標の検討等に貢献した。
- ・複合材試験評価技術に関し、日本工業規格（JIS）及び国際標準化機構（ISO）に規格・標準の提案を行うなど、国内外の標準化・基準化に貢献した。

H29

- ・国際民間航空機関（ICAO）における超音速機の騒音基準策定において、離着陸騒音推算ツールを策定メンバー間で相互検証を行うなど、基準策定検討に貢献した。
- ・複合材試験評価技術に関し、日本工業規格（JIS）及び国際標準化機構（ISO）に提案した規格が制定されるなど、国内外の標準化・基準化に貢献。

H30

- ・低ソニックブーム設計機体騒音低減量評価を行うなど、国際民間航空機関（ICAO）の基準策定検討に貢献した。
- ・複合材試験評価技術に関し、国際標準化機構（ISO）に提案した規格が制定されるなど、国外の標準化・基準化に貢献した。
- ・航空機搭載型晴天乱気流装置に関し、国内メーカーの海外での標準化活動を支援した。

※2 「社会からの要請に応える研究開発」、「次世代を切り開く先進技術の研究開発」、「航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発」は、研究計画・評価分科会策定の研究開発計画において、航空科学技術分野における中目標達成のための研究開発の取組として掲げられている3つの柱であり、それぞれ分野ごとの研究開発課題の集合体である。

※3 「コアエンジン技術の研究開発」は、「社会からの要請に応える研究開発」における研究開発課題の一つであるとともに、研究開発計画では重点課題として位置付けられている。科学技術基本計画等への貢献状況の記載は、令和元年度に実施した中間評価の記載を引用したもの。

## 研究開発プログラム評価票

(R1 年度)

中目標（原子力科学技術分野：福島第一原子力発電所の廃炉やエネルギーの安定供給・原子力の安全性向上・先端科学技術の発展等）：

東京電力福島第一原子力発電所事故を受け、廃炉や放射性物質による汚染への対策等に必要の研究開発を推進すること、及びエネルギーの安定供給や原子力の安全性向上、先端科学技術の発展等に資する研究開発成果を得ることを推進する。

中目標の達成状況の測定指標（平成 28 年度～平成 30 年度）	事業名（事業期間）	予算規模	評価年度	評価の種類	科学技術基本計画等への貢献状況	備考
<p>①除染や廃炉に必要な研究開発の取組の進捗状況、廃止措置に資する研究の推進に関する取組の進捗状況</p> <p>・ 除染効果評価システムの自治体等ユーザーへの活用件数 ○H28 : 2 ○H29 : 6 ○H30 : 4</p> <p>・ 国際共同研究棟等拠点の整備状況 ⇒（※ 1 参照）</p>	東京電力福島第一原子力発電所事故の対処に係る研究開発	647.0 億円／3 年	R1	中間評価	<p>第 3 期中長期目標期間中間評価（H27～H30 の取組評価）において、</p> <p>①櫛葉遠隔技術開発センター及び国際共同研究棟は、避難指示区域の段階的解除に併せるため、関係省庁や自治体と密に連携を図り、着工から約 1 年の短期間で整備、運用を開始し、東京電力福島第一原子力発電所廃炉の推進に貢献</p> <p>②CLADS 国際共同研究棟に国内外の英知を結集するための土台となる施設（ハード）と枠組み（ソフト）を構築などについて、高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている廃炉技術の高度化に貢献している。</p>	

	英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業 (H27～)	34.8 億円 ／3 年	H30	中間 評価	研究計画・評価分科会の中間評価において、本事業は、大学等の研究機関における基礎的・基盤的研究を推進し、我が国の原子力研究の裾野の拡大を図るとともに、東京電力福島第一発電所の廃止措置に向けた研究・人材育成に貢献している点について高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている廃炉技術の高度化に貢献している。
②東京電力福島第一原子力発電所事故を踏まえた安全性向上のための研究開発の取組の進捗状況 ・関係行政機関、民間を含めた事業者等からの共同・受託研究件数、及びその成果件数 OH28 : ⇒研究件数 5 件 ⇒成果件数 75 件 OH29 : ⇒研究件数 5 件 ⇒成果件数 96 件 OH30 : ⇒研究件数 11 件	原子力安全規制行政への技術的支援及びそのための安全研究 (一)	122.0 億円 ／3 年	R1	中間 評価	第 3 期中長期目標期間中間評価 (H27～H30 の取組評価) において、 ①格納容器の過温破損や水素リスクに関する実験によるアクシデントマネジメント策の有効性の検討や、溶融炉心／冷却材相互作用解析コードの改良による、注水量に対する冷却成功確率の算出を通じた、新規制基準に対応した規制判断を支援するための技術基盤強化への貢献 ②原子力規制委員会における基準策定に関する検討における人的貢献や新規制基準適合性審査における技術データの提供 などについて、高い評価を受けており、科学技術基本計画に定めら

<p>⇒成果件数 84 件 ※成果件数は外部発表件数の総計</p>	<p>原子力の安全性向上のための研究開発等及び核不拡散・核セキュリティに資する活動 (一)</p>	<p>63.7 億円 ／3 年</p>	<p>R1</p>	<p>中間 評価</p>	<p>れている原子力利用における安全性・核セキュリティの高度化に貢献している。</p> <p>第 3 期中長期目標期間中間評価（H27～H30 の取組評価）において、 ①シビアアクシデント（SA）時の熱流動挙動や化学反応など多様な物理現象を評価できる解析コードの開発を通じた、SA 対策設備の最適設計への多大な寄与 ②軽水炉全般の体系的な技術資料「SA アーカイブズ」のドラフト版の作成を通じた軽水炉に関する知識基盤および人材育成における産業界への貢献 などについて高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている原子力利用における安全性の高度化に貢献している。</p>	
<p>③独創性・革新性の高い科学的意義を有する研究成果の創出状況等 ・安全基準作成の達成度 ○H28 : 28.6% ○H29 : 50.0% ○H30 : 64.3%  ・試験研究炉の運転再開に向けた取組状況</p>	<p>原子力の基礎基盤研究と人材育成 (一)</p>	<p>996.1 億円 ／3 年</p>	<p>R1</p>	<p>中間 評価</p>	<p>第 3 期中長期目標期間中間評価（H27～H30 の取組評価）において、 ①高温ガス炉の実用化に必須な実用工業材料製機器を用いた連続運転技術の完成 ②産業界が参画した国内協力体制を構築しつつ、日本の高温ガス炉技術に注目したポーランドとの共同研究への道の開拓 などについて高い評価</p>	

<p>(定性的観点) ⇒ (※2 参照)</p> <p>・必要な研究基盤の検討、整備状況 (定性的観点) ⇒ (※3 参照)</p>					<p>を受けており、エネルギー基本計画に定められている、固有の安全性を有する高温ガス炉などの安全性の高度化に貢献する技術開発の国際協力の下における推進に貢献している。</p>	
	<p>原子力システム研究開発推進事業 (H17～)</p>	<p>44.7 億円 ／3 年</p>	<p>H30</p>	<p>中間評価</p>	<p>研究計画・評価分科会の中間評価において、本事業は、平成 23 年度以降、安全性向上に資する「安全基盤技術研究開発分野」や、放射性廃棄物の減容及び有害度低減に資する「放射性廃棄物減容・有害度低減技術研究開発分野」を募集しているところ、多数の応募があることによって競争性が生まれ、優れた研究課題を採択することができている点などについて高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている原子力利用における安全性・核セキュリティの高度化に貢献している。</p>	
<p>④高速炉の研究開発等の進捗状況</p> <p>・国際会議への戦略的関与の件数 ○H28 : 85 件</p>	<p>高速炉の研究開発 (一)</p>	<p>978.8 億円 ／3 年</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p>	<p>第 3 期中長期目標期間中間評価 (H27～H30 の取組評価) において、安全設計要件の国際標準化の取組として、重要な安全機能を担うシステムについて複数の</p>	

<p>OH29 : 82 件 OH30 : 84 件</p>					<p>システムを連携させた安全上の設計方針を示した「安全アプローチ SDG」を我が国主導で構築し、多くの国の賛同を得て国際標準化に見通しが得られた点などについて高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている原子力利用における安全性・核セキュリティの高度化に貢献している。</p>	
<p>⑤独立行政法人通則法に基づく主務大臣による業務実績の評価結果のうち、標準評価（B評価）以上の評価を受けた項目の割合 OH28 : 81.8% OH29 : 100% OH30 : 90.9%</p>	—	—	—	—	—	
<p>⑥原子力システム研究開発事業や英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業における中間評価及び事後評価での評価のうち、計画通りの成果が</p>	<p>【再掲】 原子力システム研究開発推進事業（H17～）</p>	(略)	(略)	(略)	(略)	

挙げられ、又は見込まれるとされたA評価以上の課題の件数割合 ○H28 : ⇒原シス : 100% ⇒英知 : 88.9% ○H29 : 100% ⇒原シス : 100% ⇒英知 : 100% ○H30 : ⇒原シス : 100% ⇒英知 : 95.0%	<b>【再掲】</b> 英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業 (H27～)	(略)	(略)	(略)	(略)	
①～④に係る特許等知財 ○H28 : 92 件 ○H29 : 91 件 ○H30 : 84 件	—	—	—	—	—	
②・③に係る学会等受賞 ○H28 : 22 件 ○H29 : 33 件 ○H30 : 22 件	—	—	—	—	—	

※1	平成 28 年度	福島県双葉郡富岡町に国際共同研究棟の整備を進め、計画通りに平成 29 年 3 月 15 日に竣工し、引渡しを完了した。本施設を活用して、国内外の大学・研究機関等との共同研究等を推進することにより、関係機関が一体となり、英知を結集した国際的な廃炉研究拠点の形成を目指す。
	平成 29 年度	平成 29 年 4 月 23 日に国際共同研究棟の開所式を行い、計画通り研究開発を開始するとともに東京工業大学との共同研究でも活用を開始した。また東京電力 HD による利用も計画通り開始された。
	平成 30 年度	放射性微粒子の性状把握のための研究設備として、フィールドエミッション型走査型電子顕微鏡、オートラジオグラフィシステム、顕微ラマンシステム、および二次イオン質量分析装置等を整備し、放射性微粒子の研究に必要な装置が充実した。
※2	平成 28 年度	原子炉施設の再稼働にむけて、新規制基準の適合性確認のため、

		JRR-3 においては、原子力規制庁に対し、延べ、審査会合 21 回、ヒアリング 78 回を受審した。平成 29 年度も対応を継続し、早期の許可取得を目指す。原子炉安全性研究炉 (NSRR) においても原子力規制庁に対し、延べ、審査会合 9 回、ヒアリング 45 回を受審し、許可取得の見通しを得た。常陽については 3 月 30 日に設置変更許可等を申請した。
	平成 29 年度	原子力施設の早期再稼働に向け、NSRR は、原子力規制委員会による審査会合 (5 回) 及びヒアリング (42 回) に対応し、設置変更許可を取得した。定常臨界実験装置 (STACY) は、原子力規制委員会による審査会合 (1 回) 及びヒアリング (18 回) に対応し、設置変更許可を取得した。JRR-3 は原子力規制委員会による審査会合 (6 回) 及びヒアリング (27 回) に対応し、第 3 回及び第 4 回補正申請を提出した。これらにより来年度の許可取得の見通しを得た。
	平成 30 年度	NSRR 及び STACY について、新規規制基準に適合した原子炉設置変更許可を取得したことに加えて、平成 30 年度に JRR-3 と放射性廃棄物処理場について原子炉設置変更許可を取得した。NSRR については、施設定期検査及び使用前検査を完了して、6 月 28 日に運転再開を果たした。
※3	平成 28 年度	外部資金により定常臨界実験装置 (STACY) 更新炉や保障措置関連分析装置 (LG-SIMS) の整備を行い、炉心損傷前の原子炉熱水力現象を調査するための高圧熱流動ループ (HIDRA) を完成させるとともに、平成 27 年度に完成した大型格納容器実験装置 (CIGMA) による試験を開始し、新たなニーズにも対応する大型研究施設等の整備・維持を進めた。
	平成 29 年度	受託事業による外部資金により STACY の更新、保障措置関連分析装置 (LG-SIMS) の整備を行うとともに、大型非定常試験装置 (LSTF)、大型格納容器実験装置 (CIGMA) 及び炉心損傷前の原子炉熱水力現象を調査するための HIDRA を用い、運転・維持管理費を確保した上で試験を実施して研究成果を創出し、大型施設基盤の増強・維持を図った。
	平成 30 年度	受託事業による外部資金により、STACY の更新、保障措置関連分析装置 (LG-SIMS) の整備を行うとともに、原子力規制委員会の使用前検査の合格等を経て平成 30 年 6 月に運転を再開した原子炉安全性研究炉 (NSRR)、大型非定常試験装置 (LSTF)、大型格納容器実験装置 (CIGMA)、HIDRA 及び火災時フィルタ目詰り挙動観察装置 (ACUA) を用い、運転・維持管理費を確保した上で試験を実施して研究成果を創出し、大型施設基盤の増強・維持を図った。

<p>研究開発プログラムの評価に当たったの気づき</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体を通じ、各事業は審議会などにおける第三者による事業内容及び進捗状況の確認を得ながら進められており、適切な運用体制が一定程度構築できていると考えられる。</li> <li>○また、事業の内容及び進捗状況について、いずれの事業も科学技術基本計画やエネルギー基本計画に貢献する価値の高いものであると評価できる。</li> <li>○一方、各事業は現段階では進行中かつ長期間の事業実施が必要であるため、今後とも定期的に事業内容や進捗状況の確認を行うべきである。</li> <li>○また、今後の事業の進捗状況に応じて、評価指標自体の見直しも必要ではないか。</li> </ul>
------------------------------	---

## 研究開発プログラム評価票

(R1 年度)

中目標（原子力科学技術分野：原子力分野の研究・開発・利用の基盤整備）：  
 原子力に係る人材の育成・確保、核不拡散・核セキュリティに資する活動、国際協力の推進、電源立地対策としての財政上の措置などを通じ、原子力分野の研究・開発・利用の基盤整備を図る。

中目標の達成状況の測定指標 (平成 28 年度～30 年度)	事業名 (事業期間)	予算規模	評 価 年 度	評 価 の 種 類	科学技術基本計画等への貢献状況	備考

<p>①放射性廃棄物減容化研究開発等の推進の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高レベル放射性廃液のガラス固化処理本数、プルトニウム溶液の貯蔵量（未処理分）</li> </ul> <p>OH28：16本※ （流下14本） ※平成27年度未保管4本含む</p> <p>OH29：34本</p> <p>OH30：3本※ ※非放射性のガラスカレットを用いた溶融炉内洗浄</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原子力施設の廃止措置及び放射性廃棄物の処理処分の計画的遂行状況</li> </ul> <p>⇒（※1参照）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高速炉及びADSを用いた核変換技術や地層処分技術等の研究開発成果の創出状況</li> </ul> <p>⇒（※2参照）</p>	<p>核燃料サイクルに係る再処理、燃料製造及び放射性廃棄物の処理処分に関する研究開発</p> <p>（一）</p>	<p>—</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p>	<p>第3期中長期目標期間中間評価（H27～H30の取組評価）において、</p> <p>①日本原燃株式会社へのガラス固化設備の安定運転確保につながる白金族元素の挙動等の運転ノウハウに関する情報の提供、</p> <p>②実廃液を用いた分離試験及びシミュレーション評価により、MA分離回収（Am回収率99.9%、RE除去率99.9%以上）の見通しを得るなどの顕著な成果の創出や将来的な成果の創出の期待</p> <p>などについて高い評価を受けており、科学技術基本計画に定められている核燃料サイクル技術の確立に向けた研究開発に貢献している。</p>	
<p>②原子力施設に関する新規制基準及び安全確保対策等の取組の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・原子力施設に関する新規制基準への対応状況等</li> </ul>	<p>安全確保及び核セキュリティに関する事項</p> <p>（一）</p>	<p>—</p>	<p>R1</p>	<p>中間評価</p>	<p>第3期中長期目標期間中間評価（H27～H30の取組評価）において、安全確保の取組について更なる改善が必要であるとされつつ、</p> <p>①「核物質防護規定違反」等の4年連続ゼロ件を達成したこと</p>	

<p>⇒ (※3参照)</p> <p>・事故・トラブルの件数</p> <p>○H28 : ⇒法令報告0件 ⇒火災2件</p> <p>○H29 : ⇒法令報告1件 ⇒火災0件</p> <p>○H30 : ⇒法令報告1件 ⇒火災4件</p>					<p>②日本の全核物質が平和的活動に留まっているとIAEA から4年連続で評価を受けたこと</p> <p>など、核セキュリティ等に関する取組では一定の評価を受けており、科学技術基本計画に定められている原子力利用における安全性・核セキュリティの高度化に貢献している。</p>	
<p>③独立行政法人通則法に基づく主務大臣による業務実績の評価結果のうち、標準評価（B評価）以上の評価を受けた項目の割合</p> <p>○H28 : 81.8% ○H29 : 100% ○H30 : 90.9%</p>	—	—	—	—	—	
<p>④丁寧な対話活動等を通じた社会の理解度の状況</p> <p>⇒【見学会・勉強会開催（報道機関対象）】</p> <p>○H28 : 9件 ○H29 : 8件 ○H30 : 9件</p>	—	—	—	—	—	

※1	平成28年度	<p>【原子力施設の廃止措置】</p> <p>年度計画に則して、ホットラボ、液体処理場及び再処理特別研究棟等の廃止措置を継続した。</p> <p>【放射性廃棄物の処理処分】</p>
----	--------	--

		<p>廃棄体化加速のため施設中長期計画重要な施設である OWTF 建設については、建設工事及び内装設備工事を年度計画に則して継続し、地上 3 階までの施工（進捗率：約 52%）を実施した。</p>
	平成 29 年度	<p><b>【原子力施設の廃止措置】</b> 原子力施設の廃止措置と廃棄体化施設整備を施設中長期計画に則り着実に実施した。</p> <p><b>【放射性廃棄物の処理処分】</b> OWTF 建設については、平成 29 年度も建設工事及び内装設備工事を継続し、建屋を竣工させた（内装設備工事を含まれた全体の進捗率：約 76%）。</p>
	平成 30 年度	<p><b>【原子力施設の廃止措置】</b> 「ふげん」施設では、使用済燃料の処理や輸送に関してステークホルダーと連携して具体的な搬出計画をとりまとめるとともに、使用済燃料の搬出に向けた準備を進める契約を海外事業者と締結した。ウラン濃縮原型プラントでは、「加工の事業に係る廃止措置計画認可申請書」を規制委員会へ申請した。</p> <p><b>【放射性廃棄物の処理処分】</b> OWTF について第 3 期中長期計画内での建設完了を約 3 年前倒し、平成 30 年度末までに建設工事及び内装設備工事が完了し、施設設備を竣工した。</p>
※ 2	平成 28 年度	<p><b>【高速炉及び ADS を用いた核変換技術】</b> 高速炉を用いた核変換技術の研究開発に関して、照射試験用 MA 含有 MOX 燃料の製造に向けた遠隔燃料製造設備機器の性能確認、ODS 鋼被覆管及び PNC-FMS ラッパ管材（溶接部を含む）の最大 3.8 万時間までの熱時効を実施し、強度と組織の変化を評価した。 ADS ターゲット試験施設の建設に向けてこれまでに実施した要素技術開発の結果を反映してターゲットシステム概念の詳細化等を行い、施設概念検討結果を技術設計書 JAEA-Technology 2017-003「J-PARC 核変換実験施設技術設計書：ADS ターゲット試験施設（TEF-T）」（平成 29 年 3 月）として取りまとめた。</p> <p><b>【地層処分技術等の研究開発】</b> 研究開発成果については、積極的に国内外の学会で発表（120 件）するとともに、研究開発報告書類の刊行（32 件）、論文掲載（58 件）を行い、原子力学会バックエンド部会奨励賞（1 件）、土木学会論文奨励賞（1 件）土木学会土木情報学論文賞（1 件）を受賞するなど、学術的に高い評価を受けた。研究成果の一部については、プレス発表（3 件）を行い、積極的な成果の普及に努めた。これは地層処分技術の信頼性の向上とともに、他の分野への技術的貢献が期待できる顕著な成果である</p>
	平成 29 年度	<p><b>【高速炉及び ADS を用いた核変換技術】</b> 照射試験用 MA 含有 MOX 燃料のセル内製造設備の機能確認を実施するとともに、希土類元素を微量添加したグリーンペレットの収縮率及び到達密度を調</p>

		<p>べ、焼結性に及ぼす添加元素の影響を明らかにし、多元系 MA 含有燃料の製造に向けた基礎データを得た。ODS 鋼及び PNC-FMS について、材料強度基準（案）の策定に向けた高温・長時間データの取得を着実に進め、ODS 鋼については、被覆管として重要な優れた内圧クリープ破断強度が確認され、長寿命被覆管としての適用可能な見通しを得た。</p> <p>核変換物理実験施設（TEF-P）の建設に向け、施設の設置許可申請に向け、安全要求事項を整理し、事故事象に対する解析等を実施して、技術設計書としてとりまとめた。研究施設の設計の具体化が進み、施設建設着手に向け計画どおり設計検討を進捗させた。</p> <p>【地層処分技術等の研究開発】</p> <p>研究開発成果については、積極的に国内外の学会で発表（127 件）し、「International Conference on Gas Geochemistry 2017」において優秀ポスター賞（1 件）を受賞し、研究開発報告書類の刊行（26 件）、論文掲載（53 件）を行った。また、資源・素材学会にて奨励賞（1 件）を受賞するなど、学術的に高い評価を受けた。</p> <p>研究成果の一部については、プレス発表（3 件）を行い、積極的な成果の普及に努めた。</p>
	平成 30 年度	<p>【高速炉及び ADS を用いた核変換技術】</p> <p>ADS ターゲット試験施設（TEF-T）の鉛ビスマスループを模擬したモックアップループを用い、陽子ビームによる入熱を模擬する電気ヒータと除熱のための熱交換器を動作させ、陽子ビーム入射を模擬した状態で J-PARC の 1 サイクルに相当する 500 時間に及ぶ長期連続運転に成功した。これにより TEF-T に求められる鉛ビスマスループの運転能力が実証され、実験施設の建設に向けた主要な技術課題解決の見通しを得た。</p> <p>【地層処分技術等の研究開発】</p> <p>成果については、積極的に国内外の学会で発表（122 件）し、研究開発報告書類の刊行（30 件）、論文掲載（72 件）を行った。原子力学会へ投稿した論文（1 件）が原子力学会バックエンド部会論文賞を受賞し、学術的に高い評価を受けた。</p>
※ 3	平成 28 年度	<p>新規制基準を踏まえた安全性向上対策の実施に向け、事業指定基準規則等に基づく基準地震動、基準津波の策定を終了した。</p> <p>また先行して実施可能な対策として可搬型蒸気設備の配備等を行い、施設の安全強化を図った。</p>
	平成 29 年度	<p>安全対策に係る基本設計等を実施した。その結果、当初の計画通り、地震やその他外部事象に対する建家・構造物の補強、重要施設の系統分離等の安全対策が必要な箇所を特定するとともに、それらの箇所に対する安全対策を立案できた。</p> <p>高放射性廃液を保有する施設を優先に新規制基準を踏まえた施設の安全強化を図るため、高放射性廃液貯蔵場における高レベル放射性廃液の崩壊熱の除</p>

	<p>去機能、水素掃気機能、閉じ込め機能に対し、電源喪失時の対策として動力分電盤から安全系負荷へ給電用の予備ケーブルを配備するなど電源系統の強化を図った。</p>
平成 30 年度	<p>安全対策の検討に用いる基準地震動、基準津波、設計竜巻及び火山事象、並びに平成 29 年度までに整理した安全対策の実施範囲及び実施内容について、廃止措置計画の変更認可申請を行った。</p> <p>地震、津波、外部衝撃、内部火災・溢水等の安全対策については、平成 29 年度までに実施した基本設計等の結果を踏まえた詳細評価及び詳細設計を実施するとともに、地震やその他外部事象に対する建家・構造物の補強、重要施設の系統分離等の安全対策が必要な箇所について現地での詳細調査を行い、既存設備との干渉、対策施工時の保安確保に係る課題等を抽出し、安全対策の具体化を図った。</p>

<p>研究開発プログラムの評価に当たったの気づき</p>	<p>○全体を通じ、各事業は審議会などにおける第三者による事業内容及び進捗状況の確認を得ながら進められており、適切な運用体制が一定程度構築できていると考えられる。</p> <p>○また、事業の内容及び進捗状況について、いずれの事業も科学技術基本計画やエネルギー基本計画に貢献する価値の高いものであると評価できる。</p> <p>○一方、各事業は現段階では進行中かつ長期間の事業実施が必要であるため、今後とも定期的に事業内容や進捗状況の確認を行うべきである。</p> <p>○また、今後の事業の進捗状況に応じて、評価指標自体の見直しも必要ではないか。</p>
------------------------------	--

# 研究開発計画

平成 29 年 2 月  
(最終改訂 平成 29 年 8 月)  
科学技術・学術審議会  
研究計画・評価分科会

# 目次

研究開発計画の策定に当たって.....	3
<b>第1章 未来社会を見据えた先端基盤技術の強化.....</b>	<b>5</b>
I. 大目標	
1. 大目標達成のために必要な中目標(情報科学技術分野)	
2. 大目標達成のために必要な中目標(ナノテクノロジー・材料科学技術分野)	
3. 大目標達成のために必要な中目標(量子科学技術分野)	
II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策	
<b>第2章 環境・エネルギーに関する課題への対応.....</b>	<b>24</b>
I. 大目標 [1]	
1. 大目標達成のために必要な中目標(環境エネルギー科学技術分野)	
2. 大目標達成のために必要な中目標(核融合科学技術分野)	
II. 大目標 [2]	
1. 大目標達成のために必要な中目標(環境エネルギー科学技術分野)	
III. 大目標 [3]	
1. 大目標達成のために必要な中目標(環境エネルギー科学技術分野)	
IV. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策	
<b>第3章 健康・医療・ライフサイエンスに関する課題への対応.....</b>	<b>37</b>
I. 大目標	
1. 大目標達成のために必要な中目標(医薬品・医療機器開発への取組について)	
2. 大目標達成のために必要な中目標(臨床研究・治験への取組について)	
3. 大目標達成のために必要な中目標(世界最先端の医療の実現に向けた取組について)	
4. 大目標達成のために必要な中目標(疾病領域ごとの取組について)	
5. 大目標達成のために必要な中目標(研究開発の環境の整備や国際的視点に基づく取組について)	
II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策	

<b>第4章 安全・安心の確保に関する課題への対応</b> .....	42
I. 大目標	
1. 大目標達成のために必要な中目標(防災科学技術分野(予測力・予防力の向上))	
2. 大目標達成のために必要な中目標(防災科学技術分野(対応力の向上))	
II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策	
<b>第5章 国家戦略上重要な基幹技術の推進</b> .....	50
I. 大目標	
1. 大目標達成のために必要な中目標(航空科学技術分野)	
2. 大目標達成のために必要な中目標(福島第一原子力発電所の廃炉やエネルギー安定供給・原子力の安全性向上・先端科学技術の発展等)	
3. 大目標達成のために必要な中目標(原子力分野の研究・開発・利用の基盤整備について)	
II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策	
<b>第6章 研究計画・評価分科会における研究開発評価の在り方</b> .....	62

## 研究開発計画の策定に当たって

我が国の科学技術の振興に関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るための基本方針を示す第5期科学技術基本計画（以下「第5期基本計画」という。）が、平成28年1月22日に閣議決定された。

研究計画・評価分科会では、主に第5期基本計画の第2章及び第3章に関する研究開発課題に対応するため、今後10年程度を見通し、おおむね5年程度を計画の対象期間として、本分科会下の各委員会における議論を中心に、今後実施すべき「重点的に実施すべき研究開発の取組」及び「推進方策」について、委員会の枠を超えて検討し、「研究開発計画」を取りまとめることとした。

また、文部科学省では、第5期基本計画に掲げられた諸課題に対応するため、文部科学省政策評価基本計画において定められる「文部科学省の使命と政策目標」（以下「政策評価体系」という。）の見直しを行った。見直しに当たっては、①第5期基本計画の政策・施策体系、②文部科学省における政策評価体系、③科学技術・学術審議会等が策定・実施する計画・評価体系を可能な限り整合させることで、効果的なフォローアップの実施が可能となるようにされたところである。このことを踏まえ、本計画は、政策評価の体系に合わせた構成とすることとした。

なお、第5期基本計画では、政策の4つの柱として、世界に先駆けた「超スマート社会」（Society5.0）の実現を目指した①未来の産業創造と社会変革、②経済・社会的な課題への対応、③基盤的な力の強化、④人材、知、資金の好循環システムの構築が示されている。超スマート社会の実現には、人材育成、オープンサイエンス、オープンイノベーション等のこれまで以上の推進が欠かせず、組織やセクター、さらには国境を越えて、人材、知識・技術、資金を循環させ、多様なステークホルダー間で対話と協働により共創していくことが重要である。

研究計画・評価分科会では、本研究開発計画の策定に当たって、研究開発に携わるすべての個人・組織は科学技術と社会との関係がこれまで以上に重要性を増していることを踏まえ、研究開発は、社会からの信頼の上に成り立っており、社会との価値観の共創が重要であることを認識しつつ研究開発を推進することに留意することとした。具体的には、①社会との関係深化の前提となる研究公正（論文作成の過程のみならず、研究に対する信頼性の醸成の観点から）を確保した上で、②当該研究開発がどのような社会変化をもたらすのか、またどのような課題を伴うことがあるのかについて自ら考えるとともに、③社会・国民から研究開発や政策立案へのインプットないしフィードバックを活かすための方法論や、人文社会科学の役割・連携の強化、④基礎

研究の重要性についての認識や、研究開発の将来成果に対する期待や懸念について、適切に社会と共有すること、⑤研究開発に携わるすべての者が、人文社会科学分野との連携などにより、国民と対話・協働するために必要なコミュニケーション能力の向上を図ること、その上で、研究開発と人文社会科学、ステークホルダー等との橋渡し人材\*等の育成と活用を行うことなどである。なお、これらの留意点を踏まえ、各計画を策定しているところであるが、経済・社会の状況は日々刻々と変化を続けており、その変化に適宜対応することが必要である。

※ここでは、研究者、国民、メディア、産業界、政策形成者等の多様なステークホルダーを対話・協働を通して結び付けるとともに、人文社会学的視点も踏まえた研究開発の実施や成果普及方策の創出を促す能力のある人材を指す。

一方、研究開発の評価については、第5期基本計画の策定を受け、国の研究開発評価について基本的な方針を定めた「国の研究評価に関する大綱的指針」が平成28年12月に改定された。本指針では、政策立案者や推進する主体等の行動及びその結果について評価を行う「研究開発プログラムの評価」のさらなる推進等が示された。研究計画・評価分科会における評価は、これまで当分科会所管の個別の研究開発課題の評価にとどめていたが、今後、研究開発計画に掲げた中目標単位で研究開発プログラムとしての評価も実施することとし、新たに第6章として研究計画・評価分科会における評価の在り方を盛り込むこととした。

本計画は、政策評価とともに、「企画立案 (Plan)」「実施 (Do)」「評価 (Check)」「反映 (Action)」を主要な要素とする政策のマネジメントサイクルが効果的に回り、第5期基本計画が掲げる科学技術イノベーション及び社会との関係深化が効果的に進むよう、必要に応じて適宜見直されるべきものである。

## 第1章 未来社会を見据えた先端基盤技術の強化

### I. 大目標

ICTを最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来社会の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ「Society 5.0」として強力に推進し、世界に先駆けて超スマート社会を実現していく。このため、国は、超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術及び個別システムにおいて新たな価値創出のコアとなり現実世界で機能する基盤技術について強化を図る。

#### 1. 大目標達成のために必要な中目標(情報科学技術分野)

我が国が世界に先駆けて超スマート社会を形成し、ビッグデータ等から付加価値を生み出していくために、産学官で協働して基礎研究から社会実装に向けた開発を行うと同時に、技術進展がもたらす社会への影響や人間及び社会の在り方に対する洞察を深めながら、中長期的視野から超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術の強化を図る。

##### (1) 中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①情報科学技術分野における研究開発の論文数、学会発表数
- ②情報科学技術分野における研究成果に基づく特許数

###### ■アウトカム指標

- ①社会実装された研究開発のテーマ数
- ②研究開発が社会実装されたことによる経済的・社会的インパクト

##### (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

- ①未来社会における新たな価値の創出と着想の獲得に向けた研究開発の推進  
未来社会における新たな価値を創出し、そこから生まれる新たな着想を得るために、超スマート社会サービスプラットフォームの構築に必要となる基盤技術の研究開発を推進し、他分野との連携を図りながら価値創出と研究開発をスパイラルに発展させる。

ア イノベーションの創出に向けたAI/ビッグデータ/IoT/セキュリティ等に関する研究開発

ビッグデータからの新たな価値を創出するために、ビッグデータ格納、検索、分析技術、並びに、革新的な AI の基盤技術を開発・活用する。また、ビッグデータの充実のため高度な IoT 技術を開発・活用し、併せてセキュリティの研究開発を行い、<sup>けんろう</sup>堅牢なセキュリティの構築を推進する。

#### イ 超スマート社会に対応した次世代基本ソフトウェア基盤技術の研究開発

「超スマート社会」を実現するための各種のサービスの実装に向けて、機能のモジュール化・コンポーネント化と、モジュールを動的に組み上げ新たなサービスを実現する統合化技術から構成される、基本ソフトウェア技術の研究開発を推進し、超スマート社会を実現するためのソフトウェア基盤技術の研究開発を推進する。

#### ウ 次世代アーキテクチャと革新的なハードウェアの研究開発

様々なモノがインターネットにつながる IoT 社会を迎えて、ますます重要となる次世代モバイル技術やクラウドデータセンター技術にも展開可能なアーキテクチャ及びデバイス技術の持続的発展を図るために、新しい動作原理を含む革新的アーキテクチャ及びデバイスの研究開発を推進する。また、多様なニーズに応える革新的な計算環境を構築し、その利用を推進することで、我が国の科学技術の発展、産業競争力の強化、安全・安心な社会の構築に貢献する。

#### エ 人間と人間、及び人間と人間を含む全体の環境・システムとのインタラクションの研究開発

インタラクションは、人間と人間、及び人間と環境との相互作用を研究する分野であり、様々なモノがインターネットにつながる IoT 社会や超スマート社会の実現に向け、重要な分野である。多岐にわたる人間と人間の相互作用全般を支援する技術を始め、人間と環境の相互作用を支援する技術、ヒューマン・ロボット・インタラクション、ヒューマン・エージェント・インタラクション、個別の人間支援に資するテレプレゼンスや人間拡張工学、ノンバーバル対話、VR（仮想現実）、AR（拡張現実）、群衆センシングによる空間環境改善、ウェアラブル開発等の研究開発のシーズを更に発展・高度化させ、人間中心の革新的なインタラクション研究を集中的に行うことにより次世代の超スマート社会の実現を目指す。

#### ②社会システムと高度に連携したサイバーフィジカル情報システム技術の実現

「世界最高水準の ICT 利活用社会の実現」に向けて、課題解決のための技術

を確立するだけでなく、社会のあるべき姿の実現のために必要な技術のシーズを見いだすとともにその実用化を見据えた研究開発を推進し、社会実装につなげる。

ア 環境・エネルギー問題に対応した新たな情報科学技術の研究開発

全世界的な人類共通の課題である「環境・エネルギー問題」への対応のため、再生エネルギーに関する技術革新や省エネルギーのためのスマート化が極めて重要である。社会活動を一層の高効率な状態にしていくためには、リアルタイムに実世界の情報を集約・解析し、その最適解を実世界にフィードバックするサイバーフィジカル情報統合基盤技術の研究開発を推進する。

イ 健康医療問題に対応した新たな情報科学技術の研究開発

医療・創薬等に資する高度なデータや、病気の予防、早期発見・治療等へつなげるための新たな情報科学技術、また、ゲノム情報等を含む膨大な患者情報と治療記録を集約・統合・解析するための技術、予防医療を支援するための技術、組織を超えて共有化するために秘匿すべき情報を保護する技術の研究開発を推進する。また、健康・医療及びライフサイエンス分野のビッグデータを産学官が利活用するための基盤を構築する。

ウ 災害等に強い安全・安心な社会の実現に向けた IT 関連技術の研究開発

地震・津波等の大規模自然災害に関する防災・減災を巡る様々な問題点に対応するために、致命的なダメージを回避して、システムとして最低限の機能を維持し、自己調整・自己修復等のできるレジリエントなシステムの実現を目指す。また、災害時及び災害後の広範囲かつ多岐にわたるリアルタイム情報をデータベース技術を用いて集約整理、統合化し、状況の変化を最適な避難活動・救援活動・防災活動及び被災者の最適行動の判断材料にフィードバックできるような IT 統合システムを構築し、災害等に強い安全・安心な社会の実現を目指す。

エ 新たな価値創出のコアとなる強みを有する基盤技術に関する研究開発

システム化技術を発展させて、我が国が強みを有する技術を活かした新たな価値を生み出すシステムを構築することで、我が国の優位性を確保し、国内外の経済・社会の多様なニーズに対応する新たな価値を生み出すシステムとすることが可能となる。このように、個別システムにおいて新たな価値創出のコアとなり現実世界で機能する技術の研究開発を推進する。

## 2. 大目標達成のために必要な中目標（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）

ナノテクノロジー・材料科学技術分野は我が国が高い競争力を有する分野であるとともに、広範で多様な研究領域・応用分野を支える基盤であり、その横串的な性格から、異分野融合・技術融合により不連続なイノベーションをもたらす鍵として広範な社会的課題の解決に資するとともに、未来の社会における新たな価値創出のコアとなる基盤技術である。また、革新的な技術の実現や新たな科学の創出に向けては、社会実装に向けた開発と基礎研究が相互に刺激し合いスパイラル的に研究開発を進めることが重要である。

これらを踏まえ、望ましい未来社会の実現に向けた中長期的視点での研究開発の推進や社会ニーズを踏まえた技術シーズの展開、最先端の研究基盤の整備等に取り組むことにより、本分野の強化を図り、革新的な材料を創出する。

### （1）中目標達成状況の評価のための指標

#### ■アウトプット指標

- ①ナノテクノロジー・材料分野に関連する事業の活動状況（技術支援件数、参画研究者数、共同研究の取組状況等） 等

#### ■アウトカム指標

- ①ナノテクノロジー・材料分野の発展状況（優れた材料の創出事例 等）

### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

第5期科学技術基本計画を踏まえ、本研究開発計画では、未来社会の実現のためにより長期的な視点に立ち、社会の変革等に先見性を持って戦略的に進めていく研究開発と、我が国及び世界が持続的に発展していくために顕在化している様々な課題を解決するための短中期的な研究開発という、2つの時間軸で研究開発の取組を整理することとし、具体的な内容について以下に示す。

#### ①未来社会における新たな価値創出に向けた研究開発の推進

我が国が高い国際競争力を有するナノテクノロジー・材料科学技術は広範で多様な研究領域・応用分野を支える基盤であり、その横串的な性格から異分野融合・技術融合により不連続なイノベーションをもたらす鍵である。

このような特徴を踏まえ、ナノテクノロジー・材料科学技術は、第5期科学技術基本計画において、サイバー空間とフィジカル空間（現実社会）が高度に融合した「超スマート社会」の実現のためのコアとなる基盤技術として位置づけられた。そこで、「超スマート社会」を実現するために必要となる機能性材料・構造材料の研究開発やデータ駆動型の材料設計等の新たな研究手

法の開発等を推進する。

また、ナノテクノロジー・材料分野が「超スマート社会」を超えた全く予想だにしない新しい未来社会をもたらす可能性があることを踏まえ、新たな技術領域・未来社会を切り拓く<sup>ひら</sup>挑戦的な基礎・基盤的な研究開発も進める。

#### ア. 未来社会としての「超スマート社会」を実現する機能性材料・構造材料研究

第5期科学技術基本計画において、「超スマート社会（Society5.0）」を実現するためには、様々な「もの」がネットワークを介してつながり、それらが高度にシステム化されるとともに、複数の異なるシステムを連携協調させることが必要である。そのために個別のシステムの開発を先行的に進めるとともに、それらの個別のシステムの高度化を通じて連携協調を進めていくことが求められている。このようなシステムの高度化及び超スマート社会の実現には、エネルギー、インフラ、健康医療やライフサイエンス等を支える機能性材料や革新的構造材料の開発を推進し、それらを適用したコンポーネントの高度化によりシステムの差別化を実現するナノテクノロジー・材料科学技術をより一層強力に推進することが必要である。

そこで、機能性材料においては、個別システムの実現のために必要な機能の高度化やその原理・原則の究明により、機能の飛躍的な向上を目指すとともに、未だ見いだされていない新たな機能の探索・顕在化等の取組を進める。

また、構造材料については、社会活動の基盤を支える材料として、国及び国民の安全・安心確保のために長期にわたって安定に性能を発揮することが求められている。そこで、精緻な特性評価技術や組織解析技術等を活用して材料の劣化機構の解明を進めるとともに、その知見に基づいた構造材料の高信頼性化・高性能化を進めるなど、総合的なアプローチを行う。

これらの取組により個別システムの高度化とともに「超スマート社会」の実現に貢献する。なお、実施に当たっては、後述する「イ. 新たな研究開発手法の開発」によって得られた知見を最大限活用しながら取り組む。

#### イ. 新たな研究開発手法の開発

##### (i) 社会システムを俯瞰<sup>ふかん</sup>した材料開発

持続可能な未来社会を実現するためには、既存の研究開発の延長ではなく、「ズームアウト」の視点による社会システム全体を俯瞰<sup>ふかん</sup>した目標設定と、

「ズームイン」の視点による要素技術課題へのブレークダウンの双方が必要である。研究開発に当たっては、未来社会のニーズと材料シーズの適切なマッチングを図るため、理論・計測・材料創製を融合した材料研究とライフサイクル設計やデバイスシミュレーション等の活用による社会システム全体を俯瞰する取組との協働により、サイエンスが今後どのようにデバイス化・システム化するかという、階層構造を把握しつつ、社会と材料開発をつなぎながら研究開発を行うことが重要である。このような新しい研究開発スキームの有効性を実証すべく、技術シーズの源泉となる基礎基盤研究を強化し、出口課題の実用化に向けた研究開発を推進する。

#### (ii) データ駆動型の材料設計手法の開発

新たなデータ駆動型の材料設計技術「マテリアルズ・インフォマティクス」は、物質・材料分野における膨大なデータ群に、最先端のデータ科学・情報科学の手法を組み合わせることにより物質・材料の研究開発を飛躍的に加速させ、材料の開発手法にパラダイムシフトをもたらす可能性を持つ。本研究領域の開拓は、国際的な潮流の観点からも、我が国の物質・材料研究の発展にとって重要であることから、様々な研究を通じて蓄積された膨大・高品質なデータを産学官で共有・利活用を行うためのデータプラットフォームを構築し、これを活用した材料開発に積極的に取り組む。

データプラットフォームの構築に当たっては、様々な研究機関からデータを集めるための制度設計や体制整備等に取り組む。

#### (iii) 材料開発に資するプロセス技術の開発

材料を開発し、社会実装へと繋げるため、スマート生産システムへの対応や経済合理性等を考慮した製造（プロセス）技術の開発等に注力する。これらの開発を一体で推進することにより、機能発現の本質と製造プロセスに用いられる要素反応・要素過程の理解を同時に進め、その知見に基づき高機能材料を開発する。

#### (iv) 先端材料計測解析技術の開発

革新的な機能を持つ材料の開発には、その機能発現メカニズムの根源的かつ効率的な解明が重要であるため、情報科学技術等も活用しつつ、ナノより更に小さな領域から様々なスケールでの計測技術、実使用環境下（オペランド）での計測技術・解析システム等を開発する。

#### ウ. 新たな技術領域・未来社会を切り拓く<sup>ひら</sup>挑戦的な基礎・基盤研究の強化

研究者の自由な発想による研究を格段に発展させる学術研究や、将来のプロジェクトの芽を創出するような探索型研究、国内外の研究動向を踏まえ、組織や分野の枠を超えた研究体制の下で将来社会に大きな影響をもたらす新技術シーズの創出を目指す戦略的な基礎研究、さらには社会経済や科学技術の発展、国民生活の向上に寄与する研究成果の実用化を見据えた研究等を進める。また、従来技術の延長では実現し得ないナノ構造の自在制御による新規材料創製技術の開発にも取り組む。

上記のような取組を通じて、ナノテクノロジー・材料分野の新たな技術領域を切り開くとともに、当該分野の発展によりどのような新しい未来社会が創り出されるかについて検討を進め、必要な措置を講ずる。

#### ②広範な社会的課題の解決に資する研究開発の推進

第5期科学技術基本計画も踏まえ、エネルギーの一層の効率的利用や医療分野への応用、社会インフラの老朽化対策等、近年顕在化している社会的課題への解決の鍵となるナノテクノロジー・材料科学技術分野の研究開発を、実用化も見据えつつ推進する。

具体的には、第5期科学技術基本計画に掲げられている13の重要政策課題のうち、特にナノテクノロジー・材料分野として大きな貢献が見込まれる以下の課題を中心に、その解決を実現すべく、必要な取組を推進する。また、これまでに解決できていない課題や新たな課題等、応用先の開拓にも取り組む。

#### ア. エネルギーの安定的な確保とエネルギー利用の効率化

再生可能エネルギーの活用と、エネルギー貯蔵、輸送システムの革新によるエネルギー利用の効率化は、資源の少ない我が国にとってエネルギー安全保障上重要であるとともに、地球温暖化抑止に向けた低炭素社会の実現と持続可能な社会の構築にも大きく貢献する。そのため、多様なエネルギー利用を実現するための研究開発として、システム化・デバイス化を念頭に、太陽電池や燃料電池、エネルギー変換・貯蔵等のための材料開発を行うものとする。また、最終システムを意識しつつ、エネルギーの高効率変換等に関わる

大きなブレークスルーに<sup>つな</sup>繋がる次世代の技術シーズを探索する。

さらに、低環境負荷社会に資する高効率・高性能な輸送機器材料やエネルギーインフラ材料の開発を推進する。

#### イ. 資源の安定的な確保と循環的な利用

レアアース等の材料の高性能化に必須な希少元素の世界的な需要急増や資源国の輸出管理政策により、深刻な供給不足を経験した我が国では、資源リスクを克服・超越する「元素戦略」が必要不可欠である。特に、ナノレベル（原子・分子レベル）での理論・解析・制御によって元素の秘めた機能を自在に活用することが、新たな高機能材料の創製や希少元素代替・減量の実現、ひいては産業競争力の鍵となる。そこで、希少元素を用いない、全く新しい代替材料の創製等に取り組む。

#### ウ. 世界最先端の医療技術の実現による健康長寿社会の形成

我が国は既に世界に先駆けて超高齢社会を迎えているため、我が国の基礎科学研究を展開して医療技術の開発を推進するとともに、社会への展開を通じて医療関連分野における産業競争力の向上を図り、我が国の経済成長に貢献することが期待される。このような期待に応えるべく、生体材料の開発や基盤技術としてのナノテクノロジーの活用を推進し、医療分野の研究開発に貢献する。

#### エ. 効率的・効果的なインフラの長寿命化への対策／国及び国民の安全・安心の確保と豊かで質の高い生活の実現

国民生活や経済・社会活動を支えている公共インフラはその多くが高度経済成長期に建設されているため、高齢化が進んでおり、重大事故の可能性が上昇するとともに、維持補修に必要な経費も増大していくことが大きな社会的課題となっている。また、我が国は、地震などの大規模な自然災害に対して、国民の安全・安心を確保してレジリエントな社会を構築することが課題となっている。そのため、公共インフラの効率的な維持管理・更新や、国土強<sup>きょうじん</sup>靱化に資する社会インフラ材料の高性能化・高信頼性化のための基礎・基盤技術の開発等を推進する。

#### オ. ものづくりの競争力向上

安価な生産コストを武器とした中国等の新興国の追い上げや、インダストリー4.0 等の国家イニシアティブを掲げる欧米諸国における製造業の徹底的な ICT 化といった世界の動向に対し、我が国の製造業が更なる競争力・収益力の強化や新市場の創出等を実現するためには、これまでの我が国の強みであるフィジカル関連技術のさらなる進化に加え、それらと IoT やビッグデータ、AI 等の ICT とを融合させることにより、新たなものづくりシステムの

開発することが課題である。

上記の課題解決のため、ナノテクノロジー・材料分野においては、前述の材料設計手法を構築するとともに、戦略的イノベーション創造プログラム「革新的構造材料」マテリアルズインテグレーション領域とも連携し、国際的な競争の中でいち早く材料から部材までの一貫した開発を行う。

#### カ. 更なる社会課題への対応

前述した課題に加え、今後次々と顕在化してくる新たな社会課題に対して常に注意を払いつつ、速やかに解決することが重要である。これに鑑み、幅広い領域の物質・材料研究を継続的に進めていく。

### 3. 大目標達成のために必要な中目標（量子科学技術分野）

内外の動向や我が国の強みを踏まえつつ、中長期的視野から、21世紀のあらゆる分野の科学技術の進展と我が国の競争力強化の根源となり得る量子科学技術の研究開発及び成果創出を推進する。

#### （1）中目標達成状況の評価のための指標

##### ■アウトプット指標

- ①論文数
- ②若手の関連事業参画数

##### ■アウトカム指標

- ①優れた研究成果の創出状況（論文被引用数 等）

#### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

第5期科学技術基本計画では、人々の豊かさをもたらす「超スマート社会」を世界に先駆けて実現するとしており、量子科学技術（光・量子技術）は、この中で、新たな価値創出のコアとなる強みを有する基盤技術の1つと位置づけられている。

半導体やレーザーなど、量子論を応用した科学技術や光技術の進展により、これまでも産業や社会は大きく変革してきたが、近年の目覚ましい技術進展やサイエンスの深化に伴い、量子科学技術のフロンティアは更に拡大しつつある。先端レーザーによる量子状態制御や、量子情報処理を可能とする物理素子の要素技術等が生み出され始め、サイエンスの進展のみならず、超スマート社会(Society 5.0)実現に向けた社会課題の解決と産業応用を視野に入れた新しい技術体系が急速に発展する兆しがある。

経済・社会の様々な課題が複雑化し、資本や競争優位が激しく動く社会の中で、量子科学技術は、Society 5.0 を実現し、我が国の競争力を強化するための根源及びプラットフォームとなり得る。より具体的に述べれば、量子科学技術は、高度な情報処理から、材料・ものづくり、医療までの広範な応用が可能であり、非連続に課題を解決（Quantum leap）できる大きな潜在力を有している。さらに、我が国の産学官が培ってきた科学技術における強みをベースに、簡単にコモディティ化できない知識集約度が高い技術体系である。

これらを背景として、官民研究開発投資の拡大に向けて 2018 年度に創設することとされた官民研究開発投資拡大プログラム（PRISM）において、光・量子技術を含む革新的フィジカル空間基盤技術が官民の研究開発投資ターゲット領域の 1 つに決定<sup>1</sup>した。

Society 5.0 実現に向けた改革をまとめた未来投資戦略 2017（本年 6 月閣議決定）においては、資本集約型経済から知識集約型経済に変化する中、知と人材の拠点である大学・国立研究開発法人を中核として、産業界も巻き込み、社会全体で優れた研究開発やベンチャーが自発的・連続的に創出されるイノベーション・ベンチャーのエコシステムを構築するため、我が国が強い分野への資源の集中を進めるとしている。

これらを踏まえて、米欧中で量子科学技術に係る産学官の研究開発投資や産業応用の模索がこの数年で拡大する中、官民投資を拡大し、他国の追従に対し、簡単にコモディティ化できない知識集約度の高い技術体系を構築していくことが重要である。

（量子科学技術の推進にあたって考慮すべき点について）

① 我が国独自の視点やアイデア

我が国の限られた資源と、欧米等の投資規模や研究者層の厚さを考えると、我が国独自の視点やアイデアを生み出し、伸ばすことが重要である。基礎研究や基礎理論における斬新なアイデアを重視し、それを国内で展開・実証しやすい環境にすることも、目覚ましい量子科学技術の進化に対応するための取組として重要である。

② 突出した点と点を繋ぎ、若手を含めた多様なアイデアを基に新しい技術領域を拓くハイブリッド型の研究推進

我が国は、物理や材料分野における基礎研究、半導体等のデバイス製造技術に強みがあるとともに、世界的に見ても枢要なアイデア・要素技術を生み出している。また、我が国は、いずれ世界の国々が直面することになる少子高齢化、資源・エネ

<sup>1</sup> 2016 年 4 月 21 日総合科学技術・イノベーション会議決定

ルギー問題などに真っ先に取り組まざるを得ない「課題先進国」の立場におかれている。課題先進国であることを逆に強みとして、世界に先駆けて課題を解決することができれば、新たな成長分野で一躍世界のトップに躍り出ることが期待される。さらに、絶え間ないイノベーションにより、成長と格差是正の両立する社会を世界に先駆けて目指し、国連の新しい開発目標である SDGs (Sustainable Development Goals)<sup>2</sup>の達成にも貢献することが期待される。量子科学技術は、我が国が有する突出した点と点をつないで競争力を生み出す組み合わせがほぼ無限にあり、若手を含めた多様な研究者の多様なアイデアを基に新しい技術領域・成長分野を拓くような、ハイブリッド型の研究推進による競争力強化が強く望まれる。また、研究推進に多様な研究者が参加できる体制の構築が重要である。

(重点的に推進すべき研究開発の取り組み)

① ネットワーク型研究拠点を通じた Society 5.0 関連技術の横断的強化

量子技術と光技術は密接な関係にあり、情報通信、ナノテクノロジー・材料、ライフサイエンス、環境・エネルギー等の重点的に推進すべき分野を横断する基盤技術である。大変革時代を先導し、新しい価値やサービスが次々と創出される「超スマート社会」を世界に先駆けて実現するための、新たな価値創出のコアとなる強みを有する基盤技術であり、革新的な計測技術、情報・エネルギー伝達技術、加工技術など、様々なコンポーネントの高度化によりシステムの差別化につながるものである。

様々なコンポーネントの高度化によって、我が国の優位性を確保しつつ、国内外の経済・社会の多様なニーズに対応するためには、量子技術と光技術を更に糾合して推進する必要がある。理論、基礎物理、材料、物性、デバイス計測、分析化学及び生命科学などの異なる分野、基礎研究や実用化といった異なる技術段階の間での対話、融合及び流動を推進するため、ネットワーク型研究拠点により推進していくことが適切である。

今後、「量子」のポテンシャルを最大限引き出し、解き放ち、今後の量子科学技術の進展を先導するとともに、将来にわたって国民・社会に広く裨益していくためには、以下の観点を踏まえたネットワーク型研究拠点を通じた研究開発を推進していくことにより、Society 5.0 関連技術を横断的に強化していくことが重要である。

---

<sup>2</sup> SDGs: 2015年9月25-27日、ニューヨーク国連本部において開催された「国連持続可能な開発サミット」で採択された国連の新しい開発目標。貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す普遍的な行動。「すべての人に健康と福祉を」、「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、「産業と技術革新の基盤をつくろう」など、17項目の目標が掲げられている。

## ア. トップダウン的なアプローチによる研究開発推進

領域によっては、実験研究者、物性理論研究者や潜在的ユーザーと一緒に、一定の目標を定め、課題に取り組むような、トップダウン的な開発アプローチも必要となる。このようなトップダウン的なアプローチが必要な領域としては、科学技術・経済・社会に与えるインパクトが相当程度期待されるとともに、中長期にわたるインパクトを見据えつつも、5～10年で国民の目に見える進展が期待される研究・技術領域を対象とすることが適切と考えられる。

これを踏まえ、以下 i)～iv)の研究・技術領域において、時間軸とともに研究・技術がどう進展して何が実現されうるのか等を示すロードマップを策定した。ネットワーク型研究拠点においては、これらの研究・技術領域の研究開発を、明確な研究開発目標等の設定及びきめ細かな進捗管理により行う、言わばフラッグシッププロジェクトを中核として推進しつつ、フラッグシッププロジェクトと連携し、相補的かつ様々な挑戦的課題に取り組むことで持続的にサイエンスエクセレンスの創出を図る基礎基盤研究を併せて取り組むことが重要である。これにより、フラッグシッププロジェクトで得られる知見が、基礎基盤研究に人材育成面も含めよい刺激や影響を与え、逆に、基礎基盤研究で得られる知見が、フラッグシッププロジェクトに好影響を与えたり必要に応じ反映されたりといった相乗効果が見込まれる。

### i) 量子情報処理（主に量子シミュレータ、量子コンピュータ）

量子力学的な効果を情報処理の単位とした計算や物質中の電子等の振る舞いを人工的な別の量子状態で模擬する技術。物性や化学反応を支配する電子状態の解明に基づく、超低消費電力デバイス等の開発や創薬への応用、量子コンピュータへの発展が期待される。物流・交通、ものづくり、エネルギー、健康長寿といった社会的課題の解決に貢献。

### ii) 量子計測・センシング

電子等が有する量子状態を利用し、古典力学を基本とした従来技術を凌駕する精度・感度等を可能とする計測・センサ技術。自動走行やIoTはもとより、生命・医療、省エネ等の様々な分野でこれまでなかった情報と応用をもたらすと期待される。健康長寿、ものづくり、交通・物流、エネルギー、環境・災害対応といった社会的課題の解決に貢献。

### iii) 極短パルスレーザー

これまで難しかった、電子が動く時間（アト（ $10^{-18}$ ）秒）スケールでの電子の動きの計測・制御を実現するパルスレーザー開発が進んでおり、光合成等の化学反応メカニズム解明、電子状態制御による高性能電子デバイス等の開発が期待され

る。健康長寿、ものづくり、エネルギーといった社会的課題の解決に貢献。

#### iv) 次世代レーザー加工

加工学理又は機械学習からの予測を活用し、ワンストップで最終形状に仕上げが可能な高精度・低コストのGPS（サイバー・フィジカル・システム）型次世代レーザー加工技術。次世代レーザー加工機によりスマート生産体制が構築され、製造・流通の革新が期待される。ものづくり、交通・物流といった社会的課題の解決に貢献。

### イ. 量子科学技術を支える共通的な基盤技術の長期的視点に立った研究開発の推進

光学・フォトンクス技術や加速器・計測技術等は、歴史的に、科学技術の最先端を切り拓き、「量子」研究を支えてきた。例えば、光周波数コムやレーザー冷却等の技術は、複数の研究・技術領域に共通する基盤技術であり、それらの進展に大きく貢献するとともに、広い分野に波及効果をもたらす可能性がある。Society 5.0 関連技術を横断的に強化していくためには、ア. i)～iv)の研究・技術領域のみならず、これらを支える理論を含めた基盤技術の研究開発を長期的視点に立ち、推進することが重要である。

#### ② 新たな技術シーズの持続的創出を支える戦略的な基礎研究の継続的強化

「量子」のポテンシャルを最大限引き出すためには、①で示したネットワーク型研究拠点の形成に加え、国内外の研究動向を踏まえ、将来社会に大きな影響をもたらす新たな技術シーズの創出を目指す戦略的な基礎研究を併せて進める必要がある。このような戦略的な基礎研究を推進するのに適した領域としては、例えば、量子技術と生命科学との融合により、細胞内の生体分子が有する機能を量子レベルから統合的に理解し、制御することを目指す量子生命科学や、物質が持つトポロジカルな性質を利用することで新しい技術的枠組みによるデバイス革新を目指すトポロジカル量子などの研究領域が考えられるが、これらに限らず、量子科学技術の進展や国際動向を踏まえ、適時適切に研究領域を設定し、戦略的な基礎研究を継続的に推進することが重要である。

## II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策

### (1) 人材育成

#### ① 情報科学技術分野

世界中で高度な人材の獲得競争が激化する中、科学技術イノベーションを支える人材の質の向上と能力発揮が一層重要となっており、計算科学とデータ科学をベースとした工学教育は、情報科学技術分野だけでなく、あらゆる研究分野において研究開発力を高めていく上で重要である。

情報科学技術分野においては、データ利活用を先導できる高度なデータサイエンティストや、高度なセキュリティ知識と管理能力を持つサイバーセキュリティ人材など、人工知能やビッグデータ等の分野を<sup>けんいん</sup>牽引するハイレベルな人材の育成を積極的に推進する。また、ビッグデータを組み合わせて価値創造につなげられる力を持つ人材育成も非常に重要である。クロスアポイントメントやインターンシップ、出向などの制度の積極的活用を図り、各研究機関の交流を促進するとともに、産学官連携等を通じた研究者の多様なキャリアパスの確保や優秀な若手研究者が能力を発揮できる環境の整備を図る。

### ②ナノテクノロジー・材料科学技術分野

激しい国際競争が行われる中、世界に先駆けて革新的な材料開発を行うことが求められており、その担い手となる人材の育成が急務となっている。ナノテクノロジー・材料科学技術が分野横断的であるという特徴を<sup>い</sup>活かし、一つの専門分野で論文を執筆できる能力が十分に備わっていることに加えて、広範な分野の基礎的素養を身に付け、<sup>ふかん</sup>俯瞰的視野を持った上で研究を推進できる人材や社会的価値への展開を戦略的に推進するリーダーを育成することが重要である。

そこで、クロスアポイントメントや等の制度の活用による研究機関間の交流の促進や、産学官連携等を通じた研究者の多様なキャリアパスの確保、優秀な若手研究者が能力を発揮できる環境の整備を図る。また、国際的な研究者ネットワークへの参画等を促進し、グローバルに活躍するリーダーの育成を目指す。

さらに、ナノテクノロジー・材料科学技術の多様な研究活動を支える上で、高度な分析、加工等の専門能力を有する技術者が極めて重要な役割を果たしていることを踏まえ、技術者の養成と能力開発等に着実に取り組む。

### ③量子科学技術分野

理論や実験など、各分野のレベルが高度化している中において、分野間の協力や融合努力を積極的に評価する視点や、基礎物理からシステム開発まで見通せる人材を育成する観点が必要である。異なる分野及び基礎研究や実用化といった異なる技術段階の間での連携や流動性が重要で、このような広がりにもたがるような基礎研究や人材育成が求められる。これにより、オープンイノベーションをリードしていく人材の育成が期待される。例えば、異分野の若手研究者同士の協力関係を加速するための中規模の研究費の枠組みや、各々の研究費を合わせて大きな研究開発に展開できるようなフレキシブルな枠組み、異分野の一流のシニア研究者が若手研究者に対して支援・アドバイスを行う体制などの

工夫により、一層の分野を超えた連携や流動性が期待できる。また、多様な視点や発想を取り入れることは、研究活動を活性化し、創造的な研究成果の創出に資するものであり、量子科学技術分野における女性研究者の人材育成に取り組むことが重要である。若手研究者の挑戦的な研究課題への取り組みを促進するため、継続性・安定性に配慮した人材育成に取り組むことが重要である。

## (2) オープンサイエンスの推進

### ①情報科学技術分野

研究者やユーザーが所属する学界や産業界がデータや研究成果を広く共有可能にすることで、研究者の所属機関、専門分野、国境を越えた多様なステークホルダーの新たな協働による知の創出が加速され、新たな価値を生み出していくことが可能となる。したがって、資金配分機関や、大学等の研究機関、研究者等の関係者が連携し、オープンサイエンスの推進体制を確立するとともに、リサーチデータプラットフォームを海外との密な協調とともに構築する。

### ②ナノテクノロジー・材料科学技術分野

オープンアクセスと研究データのオープン化を含めたオープンサイエンスの概念は、オープンイノベーションの重要な基盤として世界中で注目されている。このような現状を踏まえ、「(6) ナノテクノロジー・材料科学技術を支える基盤の強化」に掲げるオープン／シェア／クローズド戦略も踏まえつつ、適切な産学官連携・国際連携により新たな価値の創出につなげるデータプラットフォームを構築することにより、オープンサイエンスを推進する。

### ③量子科学技術分野

国際的にオープンな研究交流： 諸外国は量子科学技術の推進に関する政策を強力に推進し、その研究開発に対して政府及び民間企業が大規模な投資を行っているが、大部分の研究においては、一国に閉じた開発が可能であるとは考えられておらず、国際的な協力のもと多くの課題が推進されている。そのため、国際的な研究協力や共同研究といったオープンな研究交流を通して、新しいアイデアを常に取り入れながら、相乗的に技術を向上させ、時宜に応じた政策的な対応を図るような国際化への対応が求められる。

海外の研究グループとの積極的な研究ネットワーク構築： 欧州では研究者が国境なく往来して共同研究を実施しており、一国当たりの研究者数は限られていても、欧州全体として見ると多くの研究者が存在している。我が国の研究環境を改善することで、欧米との研究協力や共同研究を促進し、相乗的に技術を向上させるような国際化への対応が重要となりうる。また近年、中国やシンガポールといったアジアの研究グ

ループも急速に力を付けてきている。アジアの研究グループとの積極的な研究協力や共同研究を含む研究ネットワークの構築についても検討すべき時期に来ている。

### (3) オープンイノベーション（産学連携）の推進

#### ①情報科学技術分野

大企業やベンチャー企業を巻き込んだエコシステムを構築し、多くの民間企業とともに研究開発を行っていくことが重要である。大企業や中小企業・ベンチャー企業のニーズの把握やオープン・クローズそれぞれの価値とリスクについても検討しながら「協調領域」と「競争領域」を設定し、大学及び公的機関等を中核とした共同の場の形成と活用を推進する。また、民間企業が集中的に資金や人材を投入して研究している研究課題を後追いするのではなく、差別化を図る必要がある。企業と研究機関がより密接に連携してデータの活用の自由度を上げることを目指し、民間企業の研究成果を活用しながら、我が国全体の情報科学技術分野の強化を図る。

#### ②ナノテクノロジー・材料科学技術分野

企業や大学、公的研究機関等の人材、知、資金が結集する産学官、グローバル拠点の形成や、全国の研究機関のネットワーク化等を通じ、人材育成や分野融合を促進するとともに、我が国全体の材料開発力の強化を図る。具体的には、世界最高水準の研究開発成果を創出し、イノベーションシステムを強力に駆動する役割を果たす国立研究開発法人を中核として、大企業や中小・ベンチャー企業のニーズの把握やオープンとクローズそれぞれの価値とリスクについても検討しながら「協調領域」と「競争領域」を設定し、我が国全体の革新材料開発力強化に向けたオープンプラットフォームの形成とその活用を推進する。また、成果の展開に向けて、共同研究や事業化に向けた取組等、個別の産学連携も推進する。

#### ③量子科学技術分野

量子科学技術のポテンシャルを最大限に引き出し、Society 5.0 を実現していくためには、想定ユーザー（潜在的ユーザーも含む）との共同研究・産学連携やベンチャー創出の促進等により、経済・社会の多様なニーズに取り組んでいくことが重要である。異なる分野及び基礎研究や実用化といった異なる技術段階の連携によりプロトタイプを示す進め方は、可能性を明確化し異分野融合を促進するためにも有効である。また、想定ユーザー（潜在的ユーザーも含む）と対話しながら、段階的に、着実に量子科学技術を向上させる取組も効果的である。その際、技術シーズ側とニーズ側両方の言葉を理解して通訳できる、両者のコーディネーションができる人材の育成が必要であり、大学や研究機関と産業界両方を経験できる人材流動性や、両者と対等にコーディネーションできる立場を確保する枠組みをいかに構築するかを検討すべきである。経済・社会の様々な課題が複雑化して

いる不確実性の時代において、アントレプレナーシップ（起業家精神）を持つことも、非連続に課題を解決し得る量子科学技術の実用化を加速する上で重要であり、大学や国立研究開発法人のインキュベーション力の強化やベンチャー・キャピタルを始めとする起業関係者とのネットワーク形成等を通じ、イノベーションが自発的・連続的に創出されるイノベーション・ベンチャーのエコシステムの構築を目指すべきである。

#### （４）知的財産・標準化戦略

##### ①情報科学技術分野

経済的波及効果の大きい社会システムに関連し、かつ国際的な競争が激化している情報科学技術分野は、国際標準化の対応の遅れが競争力低下や市場喪失に直結するため、世界と協調した迅速かつ的確な国際標準化戦略が重要である。必要な技術の確立や実証等を図りつつ、国際標準化に対する取組を推進する。

##### ②ナノテクノロジー・材料科学技術分野

日本再興戦略等で掲げられている「GDP600兆円経済」の実現には、経済的波及効果の大きい社会システムに関連し、国際的な競争が激化しているナノテクノロジー・材料分野においては、研究の対象材料が有する特徴や関連産業の国内外動向等に応じた適切な知的財産・標準化活動が重要となる。

##### ③量子科学技術分野

国際競争の観点からも、産業界を含む大きな体制での研究開発が必要であり、その中で、知的財産確保、標準化を進めることが重要である。なお、出口としてのアプリケーションが明確に決まっている場合には、ノウハウ等の成果情報の取扱いについて留意が必要である。

#### （５）社会との関係深化

##### ①情報科学技術分野

情報科学技術の発展に伴い、社会の基本的な規範が変化しつつある。例えば、ICTの発展により、経済の循環サイクルの高速化、「もの」から「情報」への取引の変化、そしてブロックチェーンなどの技術による貨幣以外の新たな価値の創出など、従来の資本主義経済体制に変化が生じている。情報科学技術の利活用は、経済分野だけでなく政治分野においても多大な影響を与えている。政府や報道機関が大きな力を持っていた社会的な情報伝達分野が、情報ネットワークの発達により多様化して、民主主義の基盤となる社会システムが大きく変わっている。今後は技術の発展の方向性とそれに伴う社会システムの在り方について議論する必要がある。また、教育分野においても更なる情報科学技術の利活用について議論を進めていく。

さらに、情報科学技術の社会実装に際しては、多様なステークホルダー間の公式又は非公式のコミュニケーションの場を設けつつ、倫理的・法制度的課題について人文社会科学及び自然科学の様々な分野が参画する研究を進めていく必要がある。

## ② ナノテクノロジー・材料科学技術分野

### ア. ナノテクノロジーにおける人文社会科学的視点の導入

ナノテクノロジー・材料科学技術分野は、横断的・複合的な分野であるため、今後の取組について個別具体の進め方を検討する際には、人文社会科学的視点を導入し、社会との直接的接点をより強固にすることが重要である。

例えば、ナノテクノロジーに関する環境・健康・安全面（EHS: Environment, Health and Safety）の課題や倫理的・法的・社会的問題（ELSI: Ethical, Legal and Social Issues）対策については、研究開発の状況と人文社会科学的視点や産業界の視点も踏まえながら検討を進める。

### イ. 情報発信・アウトリーチ

得られた研究成果を新たな価値創造に結びつけるため、成果の社会における認知度を高め、社会還元に繋げていく。また、産学官連携による研究情報の蓄積・発信体制の強化を図り、我が国における研究情報の好循環と戦略的な社会実装を促す。

## ③ 量子科学技術分野

量子科学技術のような革新的な基盤技術に対しては、長期的視点に立った継続的な研究が特に必要である、そのためには、研究・技術がどのようなレベルにあるのか、その進展によってどのようなインパクトや可能性があるのか、どのように社会に役立ち世界が開けるのか、などについて国民、企業、社会に分かりやすく発信し、理解を求めることを通じて、量子科学技術、研究者と社会との関係を深めていくことが重要である。

## (6) ナノテクノロジー・材料科学技術を支える基盤の強化・活用（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）

先端計測等のナノテクノロジー・材料科学技術の研究開発に当たって基盤となる技術に関する研究開発を推進するとともに、最先端の計測・加工設備の共用及びデータプラットフォームの戦略的利活用を両者の融合を図りながら推進する。データプラットフォームの構築に当たっては、材料科学のみならず、システム工学や情報科学等の人材とも連携し、様々な研究機関からデータを集めるための制度設計や体制整備等に取り組む。

### ア. 最先端の研究施設・設備の整備・共用・活用等

我が国の部素材開発の基礎力引上げとイノベーション創出に向けた強固な研究基盤を形成するために、ナノテクノロジーに関する最先端設備の有効活用、今後を見据えた更新・導入、及び相互のネットワーク化を引き続き促進する。運用に当たっては、産業界を含め幅広い利用者のニーズに応じて、共用機関ネットワークの強化等を行う。また、施設共用の視点のみにとどまらず、研究施設及び設備を共用する際の多様な支援形態に対応可能な研究者及び技術者の育成やイノベーション創出に寄与する次世代の若手利用者の育成にも貢献する。これらの共用の活動を通じて、我が国のナノテクノロジー・材料研究の研究開発投資効率と成果最大化に資する。

この他、大学共同利用機関法人や共同利用・共同研究拠点、Spring-8 やパソコン「京」等の大型共用研究施設・設備等、他の共用のフレームワークも一層積極的に活用し、材料分野の研究開発を推進する。

#### イ. 知的基盤としてのデータプラットフォームの整備・利活用

科学研究活動の効率化と生産性の向上を目指し、オープン／シェア／クローズド等の戦略の下、適切な産学官連携・国際連携により、新たな価値の創出につながるデータプラットフォーム拠点を構築する。この際、企業や大学が積極的にデータベースを活用する仕組みの構築やセキュリティの確保に努める。

### (7) 国内外の研究ネットワーク構築の強化（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）

公的研究機関の橋渡し機能を強化する仕組みを整備することにより、地方の優秀な研究者との共同研究等を推進し、日本における人的ネットワークを構築する。これにより、例えば地方大学の研究者と企業の出会いの場を積極的に作り出すなど、新たなイノベーションの創出を誘発する環境作りを進める。

また、世界中から優秀な人材を確保・育成することを通じ、海外研究機関との連携を構築・強化するとともに、その人的・機関的ネットワークを活用することで、更なる人材交流やモノ・資金が集まるような仕組み作りを進める。

さらに、我が国の優れた研究成果を世界に発信することも視野に入れ、諸外国や地域と連携した国際共同研究等により、我が国の競争力の源泉となり得る科学技術を発展させる。

### (8) 戦略的研究テーマ等の提案力の向上（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）

政策立案や戦略策定に向けて、科学技術シーズや技術動向、特許動向、社会的ニーズ、経済社会・国際情勢を分析するとともに、政府全体の政策動向の調査を行い、未開拓の領域や真に求められる研究開発領域の把握に努める。この際、現場の

実際の研究活動を通じて得られる内外の研究動向や各種動向調査からの情報も活用する。また、産学官のオープンイノベーションの取組や研究施設・設備の共用、データプラットフォームの整備や、地方・海外とのネットワーク構築等を通じて得られたデータ・知見を集約する。

これらの取組を通じて得られた知見等を最大限活用し、世界に先駆けた材料開発を推進するための戦略的な研究テーマの設定や研究課題の解決のための提案力を強化することで、我が国全体のナノテクノロジー・材料開発力の向上を図る。

#### **(9) 分野融合の推進（ナノテクノロジー・材料科学技術分野）**

幅広い分野の基盤技術となるナノテクノロジー・材料科学技術は、他分野との融合を図ることで新たなブレークスルーをもたらす可能性がある。また、分野融合による新たなイノベーションの創出に当たっては、若手研究者のフレキシブルな発想、能力を十分に活用することが肝要である。これに鑑み、他分野連携が実現しやすくなる環境作りについて検討を進めるとともに、その実現に向けて必要な措置を講じる。

## 第2章 環境・エネルギーに関する課題への対応

### I. 大目標 [1]

将来のエネルギー需給構造を見据えた最適なエネルギーミックスに向け、エネルギーの安定的な確保と効率的な利用を図る必要があり、現行技術の高度化と先進技術の導入の推進を図りつつ、革新的技術の創出にも取り組む。(第5期基本計画)

資源生産性と循環利用率を向上させ最終処分量を抑制した持続的な循環型社会の実現を目指し、バイオマスからの燃料や化学品等の製造・利用技術の研究開発等にも取り組む。(第5期基本計画)

COP21で策定された「パリ協定」を踏まえ、長期的視野に立って、CO<sub>2</sub>排出削減のイノベーションを実現するための中長期的なエネルギー・環境分野の研究開発を、産学官の英知を結集して強力に推進し、その成果を世界に展開していく。(エネルギー・環境イノベーション戦略)

革命的なエネルギー関係技術の開発とそのような技術を社会全体で導入していく。(エネルギー基本計画)

再生可能エネルギーや省エネルギー等の技術開発・実証を、早い段階から推進するとともに、そうした技術の社会実装を進める。(地球温暖化対策計画)

### 1. 大目標達成のために必要な中目標(環境エネルギー科学技術分野)

エネルギーの安定的な確保と効率的な利用、温室効果ガスの抜本的な排出削減を実現するため、目指すべきエネルギーシステム等の社会像に関する検討・議論を見据えつつ、従来の延長線上ではない新発想に基づく低炭素化技術の研究開発を大学等の基礎研究に立脚して推進するとともに、温室効果ガスの抜本的な排出削減の実現に向けた革新的な技術の研究開発を推進する。

#### (1) 中目標達成状況の評価のための指標

##### ■アウトプット指標

- ①低炭素化技術の研究開発、温室効果ガスの抜本的な排出削減のための明確な課題解決のための研究開発の達成状況(当初の実施計画以上の実績があったテーマ数、論文数 等)

##### ■アウトカム指標

- ①低炭素化技術の研究開発、温室効果ガスの抜本的な排出削減に向けた明確な課題解決のための研究開発による特許出願累積件数
- ②「低炭素化技術の研究開発、温室効果ガスの抜本的な排出削減に向けた明確な課題解決のための研究開発」から「企業との共同研究、他省事業との連携

等の実用化に向けた研究開発」への橋渡しテーマ数

- ③温室効果ガスの抜本的な削減に向けた研究開発成果の寄与状況（例：太陽電池のコストを考慮した変換効率等）

※「パリ協定」で掲げられた世界共通の長期目標である 2.0℃/1.5℃の達成に向けては、中長期的な視野をもった研究開発を推進することが重要であることから、5年間の評価指標のほか、以下の中長期的な参考指標を設定。

（参考指標）地球温暖化対策と経済成長を両立させながら、長期的目標として2050年までに80%の温室効果ガス削減を目指す（地球温暖化対策計画）

## （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

- ①大学等の基礎研究に立脚した新発想に基づく低炭素化技術の研究開発

我が国の大学や国立研究開発法人における優れた基礎研究の力を活かし、従来の延長線上ではないゲームチェンジングな研究者の発想に基づく低炭素化技術の研究開発を行い、温室効果ガス排出削減のイノベーションを実現する。

具体的には、ステージゲート評価による課題の選択と集中等を通じ、低炭素社会の実現に貢献する革新的技術シーズに関する研究開発及びそれらを統合した実用化に向けた技術の研究開発を一体的に実施する。さらに、国立研究開発法人理化学研究所や国立研究開発法人物質・材料研究機構等における低炭素化技術に係る研究開発を推進する。

- ②温室効果ガスの抜本的な排出削減に向けた明確な課題解決のための研究開発

温室効果ガスの抜本的な排出削減に向け、明確なターゲットを示し、その解決を図るための革新的な技術の研究開発を推進し、温室効果ガスの大幅な削減に貢献する。

具体的には、2030年の社会実装を目指して取り組むべきテーマとして、文部科学省と経済産業省の合同検討会を経て設定した次世代蓄電池、ホワイトバイオテクノロジー分野等において、産学官の多様な関係者が参画した共同研究開発を推進する。また、電力損失を大幅に削減できる次世代半導体の実現に向けて、青色LEDの研究開発に代表される窒化ガリウム（GaN）に関する我が国の強みを活かした研究開発等に取り組む。さらに、「エネルギー・環境イノベーション戦略」等を踏まえ、2050年の温室効果ガスの大幅削減というゴールからバックキャストした明確なターゲットを設定し、あらゆる手段を駆使してターゲット達成を目指す複数チームによる研究開発を関係省庁等との連携により実施する。

## 2. 大目標達成のために必要な中目標(核融合科学技術分野)

核融合エネルギーは、燃料資源が地域的に偏在なく豊富であること、発電過程で温室効果ガスを発生しないこと、少量の燃料から大規模な発電が可能であること等の特性を持つ。また、安全性の面でも優れた特性を有することから、エネルギー問題と環境問題を根本的に解決する、将来の基幹的エネルギー源として期待されている。

大目標の達成に向け、文部科学省は、国際約束に基づく ITER（国際熱核融合実験炉）計画・BA（幅広いアプローチ）活動を推進しつつ、これらの進捗状況を踏まえ、トカマク方式を主案とする原型炉開発のための技術基盤構築に向けた戦略的取組を推進する。並行して、トカマク以外の方式（ヘリカル方式、レーザー方式）や、核融合理工学の研究開発を進めることにより、将来に向けた重要な技術である核融合エネルギーの実現に向けた研究開発に取り組む。

なお、これらの取組を推進するに当たっては、原型炉開発に向けたロードマップを策定し、量子科学技術研究開発機構、核融合科学研究所、大学、産業界等を網羅する全日本の連携体制で臨む。

また、現行 BA 活動終了後の日欧協力の在り方について検討を進めているところであり、その結果に応じて、必要があれば、本計画を見直すこととする。

### (1) 中目標達成状況の評価のための指標

核融合科学技術分野については、核融合エネルギーの実用化という明確な目標があるため、その実現に向けて、本計画実施期間中に達成すべきマイルストーンを指標とした。

#### ■アウトプット指標

- ① ITER の確実な運転開始に貢献するため、我が国が調達責任を有する ITER 機器の製作を着実に進める。
- ② BA 協定に基づく JT-60SA の組立工程を完了し、運転を開始する。
- ③ LHD において、1 億 2000 万度の高性能プラズマを生成する。
- ④ 予備的な原型炉設計活動と研究開発活動を完了する。
- ⑤ 社会との協働・共創により、核融合エネルギー開発の理解と支援を得るべく、アウトリーチ・ヘッドクォーターを設置し、多様な双方向型の交流の実績を積む。

#### ■アウトカム指標

- ① ITER 建設作業の進捗と計画の着実な進展に貢献する。
- ② JT-60SA について、先進プラズマ研究開発のプラットフォームが構築される。

- ③LHDによる高性能プラズマの実験結果が、環状プラズマの総合的理解を通じて、ITER計画と原型炉設計の進展に貢献する。
- ④原型炉の工学設計に向けた見通しが得られる。
- ⑤社会との連携強化が進み、核融合炉の安全性に関する対話の増進も含め、核融合エネルギー実現に向けた社会の理解と支援の基盤が構築される。

## (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

### ①国際約束に基づく ITER 計画・BA 活動の推進

国際約束に基づき、核融合実験炉の建設・運転を通じて核融合エネルギーの科学的・技術的実現可能性を実証する ITER 計画を推進する。日欧協力により、ITER 計画を補完・支援するとともに原型炉に必要な技術基盤の確立を目指した先進的核融合研究開発である幅広いアプローチ (BA) 活動を推進する。なお、現行 BA 活動後の日欧協力に関しては、国内活動との相補性を考慮し効果的に推進する。

#### ア. ITER 計画の推進

ITER の運転開始 (ファーストプラズマ) を見据え、国際約束に基づくスケジュールに従って我が国が調達責任を有する機器の製作を進め、超伝導導体、超伝導コイル及び中性粒子入射加熱装置実機試験施設用機器の製作を完了する。また、テストブランケットモジュールについて、ITER における試験に向けた設計活動等を実施する。さらに、ITER 計画の円滑な推進に貢献するため、ITER 建設地 (仏国 サン・ポール・レ・デュランス) において ITER 国際核融合エネルギー機構 (以下「ITER 機構」という。) が実施する機器の統合作業 (据付け・組立て・試験・検査) を支援するとともに、ITER 機構及び他極との情報交換及び連携を強化する。

#### イ. BA 活動の推進

国際核融合エネルギー研究センター (IFERC) 事業については、予備的な原型炉設計活動と研究開発活動を完了する。国際核融合材料照射施設 (IFMIF) に関する工学実証及び工学設計活動 (EVEDA) 事業については、IFMIF 原型加速器の実証試験を完了する。ITER のサテライト・トカマクとしても位置付けられている JT-60SA については、我が国が調達責任を有する機器の製作や日欧が製作する機器の組立てを完了し運転を開始することにより、ITER の運転と原型炉の開発に向けた研究開発・支援のプラットフォームを構築する。

### ②学術研究・基礎研究の総合的推進

核融合科学及び関連理工学の学術的体系化と発展を図ることを目指し、核融合科学研究所、大学等における先進的な研究を含む幅広い学術研究や基礎研究を総合的に推進する。特に、トカマク方式に対して相補的・代替的な役割を有するヘリカル方式とレーザー方式については、引き続き学術研究に重点をおいて研究を進める。

#### ア. LHD（大型ヘリカル装置）計画

ヘリカル方式の物理及び工学の体系化と環状プラズマの総合的理解に向けて、これまでの軽水素実験による成果を踏まえた重水素実験を開始する。これにより、イオン温度1億2,000万度を達成し、核融合炉に外挿可能な超高性能プラズマを実現する。また、国内外の共同研究により、重水素放電における水素同位体効果等の学術研究を推進する。

#### イ. レーザー方式

レーザー方式による核融合については、大阪大学レーザーエネルギー学研究センターを中心として進められている高速点火方式による実験において、核融合点火・燃焼の可能性を見極めるとともに、その研究成果等を踏まえて、今後の研究の展開の方向を定める。

#### ウ. 幅広い学術研究・基礎研究

核融合に関する学術研究・基礎研究については、①大型装置では得られないプラズマ領域を実現できる中小規模のプラズマ実験装置を用いた研究、②大規模シミュレーション技術や情報技術を駆使する理論・シミュレーション研究、③特徴ある中小規模の工学研究装置を用いた材料・炉工学の研究等、斬新なアイデアに基づく多様な先駆的・萌芽的<sup>ほうが</sup>研究を推進するとともに、幅広い学術分野との接点である大学と核融合科学研究所との連携強化を促進し、伝統的な分野間連携にとどまらず、新たな分野間連携や新分野の創成に繋がる<sup>つな</sup>研究の推進を図る。

#### ③原型炉の設計・研究開発活動の推進

原型炉建設判断に必要な技術基盤を構築するため、原型炉総合戦略タスクフォースの提示するアクションプランに沿って、ITER計画の着実な推進に基づく経験と実績とともに、IFERC、IFMIF/EVEDA等のBA活動や、トカマク国内重点化装置<sup>\*</sup>でもあるJT-60SAを通じた研究開発活動の成果も取り込みつつ、原型炉

設計合同特別チームによる全日本体制での原型炉設計活動と研究開発活動を進める。

※「今後の核融合研究開発の推進方策について」（平成 17 年 10 月 26 日 原子力委員会核融合専門部会）において、核融合エネルギーの早期実現に向けて、国内のトカマク装置を重点化し、トカマク方式の改良を我が国独自に進めるための「トカマク国内重点化装置計画」を進め、JT-60 の後継機をトカマク国内重点化装置とすることとされている。

## II. 大目標 [2]

地球規模での温室効果ガスの大幅な削減を目指すとともに、我が国のみならず世界における気候変動の影響への適応に貢献する。（第 5 期基本計画）

地球温暖化に係る研究については、従前からの取組を踏まえ、気候変動メカニズムの解明や地球温暖化の現状把握と予測及びそのために必要な技術開発の推進、地球温暖化が環境、社会・経済に与える影響の評価、温室効果ガスの削減及び地球温暖化への適応策などの研究を、国際協力を図りつつ、戦略的・集中的に推進する。（地球温暖化対策計画）

スーパーコンピュータ等を用いたモデル技術やシミュレーション技術の高度化を行い、時間・空間分解能を高めるとともに発生確率を含む気候変動予測情報を創出する。また、気候予測の高解像度化を検討する。（気候変動の影響への適応計画）

最新の気候変動予測データや、全球気候モデルのダウンスケーリングを活用することで、洪水や高潮による将来の外力の変化を分析する。（気候変動の影響への適応計画）

気候変動適応情報にかかるプラットフォーム等において、ダウンスケーリング等による高解像度のデータなど地域が必要とする様々なデータ・情報にもアクセス可能とするとともに、地方公共団体が活用しやすい形で情報を提供する。また、地方公共団体が影響評価や適応計画の立案を容易化する支援ツールの開発・運用や優良事例の収集・整理・提供を行う。（気候変動の影響への適応計画）

### 1. 大目標達成のために必要な中目標(環境エネルギー科学技術分野)

国内外における気候変動対策に活用されるよう、地球観測データやスーパーコンピュータ等を活用し、気候変動メカニズムの解明、気候変動予測モデルの高度化を進め、より精確な将来予測に基づく温暖化対策目標・アプローチの策定に貢献する。また、より効率的・効果的な気候変動適応策の立案・推進のため、不確実性の低減、高分解能での気候変動予測や気候モデルのダウンスケーリング、気候変動影響評価、適応策の評価に関する技術の研究開発を推進する。

## (1) 中目標達成状況の評価のための指標

### ■アウトプット指標

- ①気候変動メカニズムの解明や気候変動予測モデルの高度化、影響評価技術モデル等の開発数、累計論文数 等
- ②気候変動影響評価・適応策評価技術の研究開発に参画した地方公共団体等の数

### ■アウトカム指標

- ①研究開発成果を活用した国際共同研究の海外連携実績
- ②気候変動影響評価・適応策評価技術の開発の成果を活用し、気候変動適応に関する計画や対策の立案・検討・実施を開始した地方公共団体等の数

## (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

- ①国内外における気候変動対策に活用するための気候変動予測・影響評価技術の開発

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）等における議論をリードするとともに国内外における気候変動適応・緩和策の立案・推進に貢献するため、全ての気候変動対策の基盤となる気候モデル研究の高度化に必要な研究開発を進める。

具体的には、地球観測データやスーパーコンピュータ等を活用し、気候変動メカニズムの解明、高分解能での気候変動予測等の技術の研究開発を推進し、気温上昇の不確実性の低減、緩和策立案の科学的根拠となる炭素・窒素循環・気候感度等の不確実性の低減、環境の不可逆変化（ティッピングエレメント）のより確実な解明、我が国周辺における気候変動適応・緩和策の立案・推進に必要となる気候モデルの時空間解像度の向上、極端気象現象に関する高精度な確率的予測や

ぜいじゃく脆弱性・暴露等も考慮した統合的影響評価を可能とする。

- ②地域レベルでの気候変動適応に活用するための気候変動影響評価・適応策評価技術の開発

「気候変動への適応計画」の策定を踏まえ、今後本格化することが想定される地方公共団体における地域レベルでの気候変動適応策の立案・推進に貢献するため、国における気候変動研究の蓄積を活かし、地域を支える共通基盤的な気候変動影響評価・適応策評価技術を開発する。

具体的には、気候変動適応策の立案等に必要となる気候モデルのダウンスケーリング、地域レベルでの気候変動影響評価、適応策の評価、影響の可視化等を可能とするアプリケーションを、地球科学、社会科学等の研究者と地方公共団体関係者等の協働により開発し、関係省庁等と連携しつつ、地方公共団体のニーズがある分野（農業、防災等）における地域の実情に応じた効率的・効果的な適応策の立案・推進に貢献する。

### Ⅲ. 大目標 [3]

ICT を最大限に活用し、サイバー空間とフィジカル空間（現実世界）とを融合させた取組により、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会」を未来社会の姿として共有し、その実現に向けた一連の取組を更に深化させつつ「Society 5.0」として強力に推進し、世界に先駆けて超スマート社会を実現していく。（第5期基本計画）

地球環境の情報をビッグデータとして捉え、気候変動に起因する経済・社会的課題の解決のために地球環境情報プラットフォームを構築する。（第5期基本計画）

気候リスク情報等は、各主体が適応に取り組む上での基礎となるものであることを踏まえ、多種多様な気候リスク情報等の収集と体系的な整理を行うための気候変動適応情報にかかるプラットフォームについて関係府省庁において検討を行う。その際「科学技術イノベーション総合戦略 2015」（平成 27 年 6 月 19 日閣議決定）において経済・社会的課題の解決に向けた重要な取組として位置づけられた地球環境情報プラットフォームの活用も含めて検討する。（気候変動の影響への適応計画）

#### 1. 大目標達成のために必要な中目標（環境エネルギー科学技術分野）

我が国の政府等が収集した地球観測データ等をビッグデータとして捉え、人工知能も活用しながら各種の大容量データを組み合わせる解析し、環境エネルギーをはじめとする様々な社会・経済的な課題の解決等を図るプラットフォームの構築を図る。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①データ統合・解析システム（DIAS）に新たに格納された地球環境情報の数（データセット数）

###### ■アウトカム指標

- ①DIAS を利用する研究課題数、利用者数、提供ソリューション数（開発されたアプリケーションの数等）。

## (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

### ①地球環境情報プラットフォームの構築

地球観測情報や気候変動予測情報等を用いて気候変動への適応・緩和等の国内外の社会課題に貢献するための社会基盤として、社会課題の解決を図ろうとする企業等の具体のユーザーニーズも踏まえた地球環境情報プラットフォームを構築する。

具体的には、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）、国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）、国立研究開発法人防災科学技術研究所（NIED）や、気象庁、国土交通省等の政府が保有する地球観測データ等を集約する。また、多分野・多種類のデータをリアルタイムで統合・解析するための情報基盤を構築するとともに、企業等のユーザーが長期的・安定的に利用できるための運営体制の強化や、ユーザーの拡大のため水課題（ダム管理）等のテーマに関するアプリケーション開発等を通じ、社会課題解決への一層の貢献を図る。また、研究利用に加え、気候変動適応や再生可能エネルギーの導入等の公共・国際利用、産業利用も促進し、我が国の有する地球観測データ等によるイノベーションの創出を図る。

## IV. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策

### (1) 人材育成

#### ①環境エネルギー科学技術分野

環境エネルギー分野の科学技術は、学際的な性質を有するとともに、社会との関係性が強く問われる性質を持っている。広い視野を持ちながら、社会との関係、技術の出口を常に意識しながら、従来の延長線上ではないゲームチェンジングな発想に基づく研究開発を遂行することができる人材の育成が重要である。

また、地球観測データ等のビッグデータの活用に当たっては、活用する分野毎<sup>ごと</sup>の問題意識とデータ活用の技術を併せ持った専門人材が不可欠であるが、現在の我が国ではそのような人材の層が薄いことから、充実を図ることが重要である。

#### ②核融合科学技術分野

核融合エネルギーの実現は、長期間を要する研究課題であり、長期的な視点で、特に若手研究者の育成・確保に向けた取組を、学校教育における人材確保も視野に入れつつ、幅広い視点から進める必要がある。また、研究を成功させるためには、核融合研究に関する長期的ビジョンが示され、社会とのリスクコミュニケーションの観点を考慮しつつ、社会的な合意を形成する必要がある。

このため、大学、核融合科学研究所、量子科学技術研究開発機構（QST）が固有の機能を活かし、主体的な役割に基づいた人材育成・確保のネットワークを形成することが必要である。

特に、大学共同利用機関である核融合科学研究所においては、大学の人材育成機能の強化に更に貢献することが、QSTにおいては、大学院教育への協力や、連携大学院制度の活用をより一層推進することが望まれる。

また、核融合に関連する従来からの専門分野に限らず、人文社会系を含めた広い学術分野及び産業界との連携・交流活動を活発に行いながら、分野を越えた人材の流動性を一層高めていく必要がある。

さらに、国際プロジェクトとして推進されているITER計画やBA活動への参加を人材育成の観点から積極的に活用すべきである。特に若手研究者にとっては、その参加がキャリアパスとして位置づけられることが重要である。

多様な視点や優れた発想を取り入れるため女性の能力を最大限に発揮できる環境を整備し、その活躍を促進していくことは、核融合研究開発にとっても極めて重要である。そのため、女子中高生等への理解促進活動や、各研究機関での採用に当たってのポジティブアクションの採用等を推進していくべきである。

## （２）オープンサイエンスの推進

### ①環境エネルギー科学技術分野

地球観測・予測データをはじめとしたデータを戦略的に活用し、科学研究の発展を図ることは重要であり、オープン・アンド・クローズ戦略等に留意しつつ、対応をしていく必要がある。

### ②核融合科学技術分野

核融合の研究開発を進めるためには、研究者の所属機関、専門分野、国境を越えた新たな協働により、絶えざるイノベーションを創出していくことが必要である。このため、オープンサイエンスを進めることにより、学界、産業界、市民等あらゆるユーザーに対し、研究成果を広く利用可能とすることが重要である。また、オープンサイエンスが進むことで、核融合の社会に対する研究プロセスの透明化を図ることが重要である。

## （３）オープンイノベーション（産学官連携）の推進

### ①環境エネルギー科学技術分野

研究開発プログラムの立案・実施に当たっては、その社会実装を担う産業界のニーズを常に把握し、研究開発成果が円滑に実用化されるよう留意するべきである。

## ②核融合科学技術分野

産業界が核融合に関してこれまで蓄積してきた機器開発・機器製作を中心とした技術は、今後の核融合研究開発の推進にとって不可欠であり、産業界との連携は極めて重要である。したがって、産業界における技術力の維持等も含め、核融合エネルギーフォーラム等を通じた産業界と国及び実施機関との連携体制の更なる強化が必要である。

これまで、ITER等の大型核融合実験装置の製作を中心として、産学連携による研究活動が活発に行われ、産業界において様々な産業技術の実用化が図られてきたところであるが、今後とも、それぞれの特長を生かしつつ、一層連携協力を推進すべきである。

さらには、核融合技術が、ナノテクノロジー・材料、ライフサイエンス、情報・通信、環境分野を始め、多くの産業分野に波及効果をもたらしてきていることを踏まえ、分野や組織を越えた人材交流を進めることなどによって、核融合研究で開発された先端技術の他分野への活用を積極的に進める必要がある。

## (4) 知的財産・標準化戦略

### ①環境エネルギー科学技術分野

オープンイノベーションの推進に当たっては、オープン・アンド・クローズ戦略をはじめとする知的財産戦略や、標準化戦略についても研究開発初期段階から検討する体制を整備すべきである。

また、地球観測データ等のビッグデータの活用にあたっては、データポリシーの整備、知的財産権に関する検討、課金制度の検討、システム間連携を行うための標準化戦略の検討等が不可欠であり、地球環境情報プラットフォームの構築に際して、関係府省とも連携を図りつつ、検討を推進することが必要である。

### ②核融合科学技術分野

世界の核融合研究開発は、現在、科学的・技術的実現性を実証する段階であるが、核融合エネルギー技術は、将来実用化されれば、我が国の基幹産業の一つと成り得る。将来の実用化を視野に入れつつ、世界をリードする研究開発の成果を創出していくことが重要である。核融合分野においては、特に核融合装置の機器やコンポーネントの設計・製作に伴う知的財産の蓄積とデファクトスタンダードの確立も含めた標準化を進めていくとともに、その波及効果としてもたらされる他の産業分野での成果についても知的財産としての活用を進めるべきである。また、アジア諸国等との国際協力を積極的に行っていくべきである。

## (5) 社会との関係深化

### ①環境エネルギー科学技術分野

基本計画等にも記載のあるとおり、温室効果ガスの抜本的な排出削減のための革新的な技術の研究開発の成果を社会に円滑に実装していくため、社会科学・人文科学の知見も生かし、環境の持続性に加え、社会の持続性、経済の持続的な発展も一体的に考えた定量的な低炭素技術シナリオ、社会・経済シナリオの研究開発を行い、その成果が社会に広く活用されるよう取り組む必要がある。また、持続可能な開発目標(SDGs)においても、再生可能エネルギーの導入割合の大幅増加やエネルギー効率の改善等に関する目標や気候変動の緩和、適応、影響軽減及び早期警戒に関する教育、啓発、人的能力及び制度機能を改善する目標等が掲げられていることも考慮する必要がある。

文部科学省においては、以上のような社会のニーズを踏まえたシナリオ戦略のもと、国内の関係機関と連携しつつ、地球環境研究を国際的なステークホルダーと協働して進める「フューチャー・アース」構想の推進を図るとともに、気候変動予測技術や影響評価・適応策評価技術の研究開発に当たり、関係府省、地方公共団体、企業、市民等のマルチなステークホルダーとも研究開発初期段階から協働し、出口戦略としての成果の社会実装が確実に図られるよう取組を進めるべきである。

### ②核融合科学技術分野

核融合エネルギーは、核融合炉が実用化された暁には恒久的なエネルギー源として人類に多大な貢献をすると期待されるが、その実現のためには、非常にチャレンジングかつ大規模な技術開発が必要であり、今後も多額の予算と数十年にわたる長期の開発期間を要する研究開発分野である。したがって、将来のエネルギー・環境問題の解決に向け、社会との共創により核融合研究開発の継続的な発展を図るべく、核融合エネルギーの意義や安全性等に対する理解を得ることが重要である。

そのためにはまず核融合研究者自らが、現在取り組んでいる研究課題の魅力や、今後目指すべき研究の方向性について分かりやすい言葉で説明しつつ、積極的に社会に向けて、核融合研究に関する情報発信に努めることが重要である。

また、研究施設への見学者の受入れ、大学や初等中等教育機関との連携活動、一般市民を対象とした講演会や対話集会の実施等を通じて、国民の核融合に対する理解促進に資する活動の充実に努めるべきである。

さらには、将来の核融合エネルギーでは安全性の問題が課題となるため、人文社会系の専門家とも連携協力し、放射線やトリチウムなど核融合が社会に対してどのような課題があり、どのように解決していくのかを示していくことにより、信頼を得るように努めることが重要である。

## **(6) 国際連携**

### **①環境エネルギー科学技術分野**

気候変動問題に国際的に連携して対処していくため、文部科学省の行う気候変動に関する研究開発については、IPCC や国連気候変動枠組条約 (UNFCCC) 等の国際的な枠組みにおける議論を十分に踏まえるとともに、その成果が広く発信され、2020 年に公表予定の WG1 の IPCC 第 6 次評価報告書 (AR6) 等の国際的な気候変動対策に関する議論や我が国政府の取組に反映がなされるよう留意するべきである。

また、文部科学省の行う地球環境情報プラットフォームの構築に当たっては、地球観測に関する政府間会合 (GEO) における取組も踏まえ、我が国の地球観測・予測データが GEO における各国の地球観測・予測データを共有する全球地球観測システム (GEOSS) を通じて国際的に有効に活用されるよう留意するべきである。

### **②核融合科学技術分野**

我が国は、これまでも ITER 計画や BA 活動等の国際協力プロジェクトに積極的に参加するとともに、米国、欧州、中国、韓国等との二国間協力を推進してきたところであり、今後とも、国内研究開発との相補性を考慮した上で国際連携を戦略的に推進し、世界の核融合研究開発の中で主導的な役割を果たすことが重要である。

## **(7) 府省連携 (環境エネルギー科学技術分野)**

環境エネルギー分野の研究開発は、内閣府、外務省、農林水産省、経済産業省、国土交通省、環境省等、関係府省が多く、様々な取組が行われている。政府全体として取組が効率的・効果的に行われるよう、研究開発の推進に当たっては、関係府省間での役割分担や連携を図るための取組を進めることが重要である。

## 第3章 健康・医療・ライフサイエンスに関する課題への対応

### I. 大目標

健康・医療戦略推進本部の下、健康・医療戦略及び医療分野研究開発推進計画に基づき、国立研究開発法人日本医療研究開発機構を中心に、オールジャパンでの医薬品創出・医療機器開発、革新的医療技術創出拠点の整備、再生医療やゲノム医療など世界最先端の医療の実現、がん、精神・神経疾患、新興・再興感染症や難病の克服に向けた研究開発などを着実に推進する。また、我が国の医療技術や産業競争力を生かし、例えば、感染症対策などの分野で、諸外国との連携による地球規模の課題への取組や、我が国の優れた力を生かした国際貢献といった主導的取組を進めていく。

加えて、幅広い研究開発活動や経済・社会活動を安定的かつ効果的に促進するために不可欠なデータベースや生物遺伝資源等の知的基盤について、公的研究機関を実施機関として戦略的・体系的に整備する。

#### 1. 大目標達成のために必要な中目標（医薬品・医療機器開発への取組について）

「健康・医療戦略（平成26年7月22日閣議決定、平成29年2月17日一部変更）」及び「医療分野研究開発推進計画（平成26年7月22日健康・医療戦略推進本部決定、平成29年2月17日一部変更）」等に基づき、医薬品・医療機器開発への取組：医薬品創出のための支援基盤の整備等により、革新的医薬品・医療機器開発を推進する。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①創薬支援の取組における化合物提供件数（累積）
- ②創薬支援の取組における放射光施設外部利用件数
- ③革新的医療機器の実用化に資する成果に関する特許出願等の件数（累積）

###### ■アウトカム指標

- ①創薬支援により新たに創薬シーズが見つかった件数
- ②革新的医療機器の実用化に資する成果の件数（累積）

##### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、革新的医薬品・医療機器開発に資する研究開発を着実に実施する。

## 2. 大目標達成のために必要な中目標（臨床研究・治験への取組について）

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、臨床研究・治験への取組：全国に橋渡し研究拠点を整備し、アカデミア等の基礎研究の成果を一貫して実用化に繋ぐ体制を構築する。

### （1）中目標達成状況の評価のための指標

#### ■アウトプット指標

- ①橋渡し研究支援拠点で支援しているシーズ数

#### ■アウトカム指標

- ①橋渡し研究支援拠点の支援により基礎研究の成果が「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律」に基づく医師主導治験の段階に移行した数

### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、アカデミア等の基礎研究の成果を一貫して実用化に繋ぐ体制の構築を着実に実施する。

## 3. 大目標達成のために必要な中目標（世界最先端の医療の実現に向けた取組について）

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、世界最先端の医療の実現に向けた取組：iPS細胞等を用いた革新的な再生医療・創薬をいち早く実現するための研究開発の推進を図るとともに、ゲノム医療の実現に向けた取組を推進する。

### （1）中目標達成状況の評価のための指標

#### ■アウトカム指標

- ①iPS細胞等幹細胞を用いた課題の臨床研究への移行（累積）
- ②発見された疾患関連遺伝子候補及び薬剤関連遺伝子候補数（累積）

### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、iPS細胞等を用いた革新的な再生医療・創薬をいち早く実現するための研究開発、及び

ゲノム医療の実現に向けた研究開発を着実に実施する。

#### 4. 大目標達成のために必要な中目標（疾病領域ごとの取組について）

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、疾病領域ごとの取組：がん、精神・神経疾患、感染症等の疾患克服に向けた研究開発等を推進する。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

※がん、精神・神経疾患、感染症等、中目標に関係する疾患領域が複数あるため、それらを網羅的に評価するように指標を設定。

###### ■アウトプット指標

- ①精神・神経疾患の克服に向けた知見の蓄積
- ②精神・神経疾患克服の基盤となる脳機能ネットワーク（神経回路）の解明

###### ■アウトカム指標

- ①次世代がん医療創生研究事業採択課題のうち、新規分子標的薬剤及び新規治療法に資する有望シーズ、早期診断・個別化治療予測バイオマーカー及び新規免疫関連有効分子の数（累積）
- ②病原体（インフルエンザ・デング熱・下痢症感染症・薬剤耐性菌）の疫学研究及び治療薬、迅速診断法等の研究開発の進捗

##### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、がん、精神・神経疾患、感染症等の疾患克服に向けた研究開発を着実に実施する。

#### 5. 大目標達成のために必要な中目標（研究開発の環境の整備や国際的視点に基づく取組について）

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、ライフサイエンス研究基盤の整備、国際共同研究等の取組を推進する。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①研究基盤として整備している実験動物・植物等の提供数

###### ■アウトカム指標

- ①提供した実験動物・植物等を用いて発表された論文数

## **(2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組**

「健康・医療戦略」及び「医療分野研究開発推進計画」等に基づき、ライフサイエンス研究基盤の整備や国際共同研究等の取組を着実に実施するとともに、超少子高齢化社会を迎える我が国の情勢等を踏まえ、予防医療にも貢献する老化のメカニズム解明・制御の基礎研究の推進及び研究基盤の構築等の取組について実施する。

## **Ⅱ. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策**

### **(1) 人材育成**

ライフサイエンス分野の研究開発を発展させる上で必要不可欠な、医療関係データや情報等を効果的に活用できるバイオインフォマティクス人材等の育成を進めるとともに、臨床研究や治験を高い水準で行う臨床研究エキスパート（医師）及びそれをサポートするプロジェクトマネージャー、知的財産専門家、バイオインフォマティシャン、データマネージャー、生物統計家、倫理の専門家、レギュラトリーサイエンスに精通した人材等の専門人材の確保や、教育訓練や講習会、OJT等による人材育成を、橋渡し研究支援拠点等を中心に全国及び地域でのネットワークを構築しながら推進する。

### **(2) オープンサイエンスの推進**

大学や研究機関等の共用設備を活用しつつ、大学と産業界とが連携しながら研究開発を推進する。また、正確な臨床・健診情報が付加されたゲノム情報、脳イメージング情報、バイオマーカー情報等を、データシェアリングにより利活用し研究を推進する。

### **(3) オープンイノベーション（産学連携）の推進**

大学等の持つ優れた基礎研究成果を実用化に結び付けるため、有望なシーズの発掘から企業主体での事業化開発や、優れた基礎研究成果や産業界が抱える技術課題の解決に資するテーマを基にした産学共同研究等を推進する。

また、橋渡し研究支援拠点等を中心に、オープンイノベーションの推進のための取組を支援する。

### **(4) 知的財産・標準化戦略**

橋渡し研究支援拠点を中心に、弁理士を含む知的財産専門家を確保すること等により、医療分野に特化した事業化を見据えた特許出願・調査、知的財産管理、知的財産戦略策定等の支援を推進する。

### **(5) 社会との関係深化**

大学・研究機関等における健康・医療・ライフサイエンス分野の研究開発において、研究公正の確保に向けた取組や、研究者とステークホルダーとの対話の促進など国民の適切な理解を深める取組を推進する。また、再生医療等の本分野における倫理的・法的・社会的問題（ELSI: Ethical, Legal and Social Issues）については、研究開発の状況と人文社会科学的視点なども踏まえながら検討を進める。

### **(6) 健康・医療分野に限らない生命科学分野の推進について**

健康・医療分野に限らない幅広い生命科学の研究開発や、情報科学技術分野、ナノテクノロジー・材料科学技術分野などとの融合研究は、ライフサイエンス分野の裾野を広げ、健康・医療分野の研究開発の新たな成果の創出にもつながる重要な取組であることから、大学等における当該分野の基礎研究を含む研究開発を推進するとともに、特定国立研究開発法人理化学研究所等がこれまで幅広い研究開発の実践を通じて培ってきた研究ポテンシャルを最大限に活用し、その総合力を効果的に発揮して当該分野の研究開発を実施する。

## 第4章 安全・安心の確保に関する課題への対応

### I. 大目標

我が国は、地震・津波、水害・土砂災害、火山噴火などの大規模な自然災害により数多くの被害を受けてきた。南海トラフ地震や首都直下地震などの巨大災害の切迫性が指摘され、一度発生すれば国家存亡の危機を招くおそれもある。また、これまでの災害から得られた教訓を今後の大規模自然災害等への備えに生かすことが強く求められている。

このため、このような自然災害に対して、安全・安心を確保するべく、従来の研究手法に加え IoT、ビッグデータ、AI 等の先端科学技術を活かした研究開発を推進し、災害に対する予測力・予防力・対応力のバランスがとれたレジリエントな社会を構築する。

#### 1. 大目標達成のために必要な中目標（防災科学技術分野（予測力・予防力の向上））

自然災害を的確に観測・予測することで、人命と財産の被害を最大限予防し、事業継続能力の向上と社会の持続的発展を保つため、国土強<sup>きょうじん</sup>靱化に向けた調査観測やシミュレーション技術及び災害リスク評価手法の高度化を図る。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①基盤的観測体制の整備（稼働率）、火山データの一元化、極端気象災害や複合連鎖型災害の発生過程の解明、データ公開の充実
- ②普及型耐震工法の確立、IoT 等を用いた測定技術の開発、災害に強いまちづくりへの寄与
- ③防災リテラシー向上のための教育・啓発手法の開発及びそれによる被害軽減効果の定量化の確立
- ④査読付き論文数、研究成果報道発表数

###### ■アウトカム指標

- ①被害の軽減につながる予測手法の確立
- ②建築物・インフラの耐災害性の向上
- ③自然災害の不確実性と社会の多様性を踏まえたリスク評価手法の確立

## (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

### ①自然災害の正体を知りこれを予測する技術の研究開発

大規模な地震や津波、火山噴火等、発生すれば甚大な被害をもたらすリスクの高い災害、及び、地球規模の気候変動に伴い今後激甚化すると予想される風水害、土砂災害、雪氷災害等に対応し、被害の軽減に向けた予測手法の確立や基盤的観測体制の整備に資する研究開発に取り組む。

近年我が国は、2011年の東北地方太平洋沖地震や2016年の熊本地震等、被害規模の大きな地震に見舞われている。また、今後30年程度の内には南海トラフ地震や首都直下地震など甚大な被害をもたらす地震も想定されており、被害予測・被害軽減に向けた基盤的観測の重要性が増している。大規模な地震の発生頻度は極めて低いため、過去の地震記録は少なく、現状の観測技術と比較してその精度も低い。地震被害の軽減に向けては、海溝型地震が懸念される海域から陸域までの海陸統合型地震津波観測網の整備と長期にわたるリアルタイム観測体制の確立が重要である。

同様に、火山噴火についてもその活動頻度は低いものの、発生した場合甚大な被害をもたらすことが予想されており、観測網の整備と長期にわたるリアルタイム観測体制の確立が重要となる。

極端気象による豪雨・豪雪・竜巻・雷などの頻度増大や台風の強大化による被害の増加など、地球規模の気候変動の影響によりこれまでに経験したことのない風水害・土砂災害・雪氷災害の発生が想定されており、それらの災害に対応するための予測手法の確立や観測基盤の整備が重要である。また、地震・津波・火山噴火・風水害・土砂災害・雪氷災害等が連続して生じる「複合連鎖型災害」についても視野に入れた研究開発も必要である。

リアルタイム観測の継続性に関しては、例えば2016年熊本地震の際にも確認されたように、発災時の観測施設の被災や停電・通信網の途絶等により観測不能となることが想定されるため、冗長性を持った観測システムの開発が重要である。

また地球観測衛星やGNSS観測を利用した新しい知見を得ることや民間の各種観測網との連携は新たな予測手法の確立や観測精度の向上に寄与できるため、実利用度の向上を図る必要がある。

### ②自然災害に負けない建築物・インフラを構築する技術の研究開発

近年の自然災害を反映した巨大地震や連続地震等の新たな想定と既存建築物・インフラの老朽化に対応し、発災時の被害を最小限に抑えるとともにその後の回復を迅速に行うため、高耐震化技術を含む新しい技術・手法を含む災害

に負けない建築物・住宅・インフラの構築・維持管理に資する研究開発に取り組む。

既存建築物や、高度経済成長期に大量に整備され十分に管理・改修されていない老朽化したインフラに対し、想定される震動への耐震性能検査方法や改修工法、安価かつ効果的に補強する普及型耐震工法の確立が重要である。

想定される大規模地震に対し建物被害による影響を軽減するため、建物の被災状況を即時に推定するための個々の建物性能評価や複数回震動への耐久性評価に資する測定技術の確立することが重要であり、広範囲における被災状況を推定するために、IoT技術を利用することが有効である。また、既存建物については、現状の居住生活・経済活動を妨げることなく簡便に設置可能な測定器を用いた評価技術の確立が必要がある。

将来発生する大規模地震による災害を数値シミュレーションで予測するため、地震観測結果から得られた地震活動、発震機構、地下構造などの各種データを十分に活用し、過去の地震に対するメカニズム解析や数値計算技術の高度化により大規模地震に関する知見や予測技術を確立することが重要である。

都市部においては災害発生時の被害が著しく甚大になることが想定されるため、推論手法の発達等を踏まえ、地震、津波、火山、洪水等の理学的なハザード予測から、建物、構造物、プラント等の工学的な被害推定、社会インフラや産業活動の機能的相互関係を踏まえた経済的なリスク評価や復旧過程の予測を包括する、都市における災害過程の高詳細なシミュレーション技術等の開発が重要となる。

また、人口減少社会における災害に強い都市計画の策定手法に関する研究開発も進めていく必要がある。

③不確実かつ多様な災害リスクの評価と、それに対応する技術の研究開発  
自然災害の不確実性と社会の多様性を踏まえたリスクの評価方法を構築し、その知見を取り入れた多様な主体（行政間含む）の広域連携型防災対応や行動誘発につながる防災リテラシー向上のための教育・啓発手法、これらの効果を測定する手法等の研究開発に取り組む。

2016年の熊本地震では連続して震度7を記録し、時間差をもって発生する地震への対応の必要性が再認識され、またその後も集中豪雨による土砂災害の危険性が懸念された。甚大な被害が想定されている南海トラフ地震においても、時間差で連動する地震災害、津波災害への対応は必要であり、時間経過を考慮したリスク評価手法の確立とそれらに基づく対策立案が重要であり、またそれらを考慮したハザードマップの作成・見直しも必要である。

地震の発生確率や火山の噴火予測、局地的大雨の発生予測、台風の進路予測

など、不確実性を含む情報の効果的な伝達方法や、これらを用いた自治体等の意思決定手法の確立が重要である。

従来、我が国の防災における研究対象は経験的な既往災害を重要視し確率的に低い事象を軽視してきた傾向にあり、そのため、低頻度大規模災害などは評価対象として重要視されてこなかった。今後は国内の任意地点において発生しうる全ての災害種の潜在的危険度も考慮し、標準的、概略的評価手法を開発していくことも重要となる。

災害における経済被害推計については、その数値の推定プロセスについて、データの継続的蓄積を進めつつ理論的・実証的に体系化していく必要がある。また災害対策の実施により得られた被害の軽減効果の定量化を進めることも重要である。

我が国では、災害発生の危険性が高い地域に住居やインフラなどの資産が存在し、その危険性が十分に周知されずに被災する場合も生じている。災害リスクを住民が知ることで、地域毎で自律・分散・協調し災害に強い社会を実現するための手法の確立につながる研究開発が重要となる。

東日本大震災や熊本地震等の大規模災害時において、市民の防災行動、避難行動に関する情報が必ずしも十分に提供されていなかったことから、これまでの被災経験や教訓を踏まえ、市民を対象としたリスクコミュニケーションツールの研究開発を進め、住民等が我がことに結び付けて安全・安心を考えることを可能とする情報提供システムの開発を行うことは極めて重要である。現在様々な主体が所有している各種情報を効率的に活用するための仕組みや技術開発、情報の受け手が内容を容易に理解できる情報発信の在り方等を確立する。

あらゆる国民・企業が防災リテラシーを高め、災害に備えることを当たり前と感じる防災文化を形成する教育・啓発につながる検討も重要である。

## 2. 大目標達成のために必要な中目標（防災科学技術分野（対応力の向上））

発災後の被害の拡大防止と早期の復旧・復興によって、社会機能を維持しその持続的発展を保つため、「より良い回復」に向けた防災・減災対策の実効性向上や社会実装の加速を図る。

### （1）中目標達成状況の評価のための指標

#### ■アウトプット指標

- ①最新の科学技術（IoT、AI、ロボット等）を用いた冗長性を持つモニタリング及びデータ同化・予測手法の高度化
- ②リアルタイム被害推定・予測、即時被害判定、被害等の情報共有の実現

- ③被災者支援業務対応システムの開発と実用化、時系列行動記録の蓄積
- ④査読付き論文数、研究成果報道発表数

#### ■アウトカム指標

- ①発災後の早期の被害把握
- ②迅速な早期の復旧
- ③防災業務手順の標準化・適正化

### (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

- ①複合・誘発災害等を考慮した発災後早期の被害推定及び状況把握・予測技術の研究開発

発災後早期に、二次災害や複合・誘発災害の発生を予測するとともに、時々刻々と変化する状況を多面的に把握し、被害を最小限に抑え、迅速な復旧に資するため、リモートセンシングデータやIoT等を用いたモニタリング及びデータ同化・予測の手法の確立や高度化に資する研究開発に取り組む。

地震発生後早期における、人命救助や建物の応急危険度判定の実施に当たっては、余震の規模や発生頻度等を考慮した安全性の評価が重要な要素となってくる。同様に、津波・火山噴火・風水害・土砂災害・雪氷災害等の災害においても、発災後の事象の推移予測は、その後の避難及び救助活動等の実行のために重要な要素となってくる。確度の高い推移予測をするためにも、発災前からの継続的なモニタリングが必要であり、また機動的に状況の変化を迅速に捉えることを可能とするためのリアルタイム観測、冗長性を持った観測システムが重要となる。

近年はマルチコプターを始め、小型のUAVが普及してきており、災害現場の状況が発災後の早い段階で捉えられるようになってきた。また、人工衛星から広範囲に亘り高い精度で状況を把握することが可能になってきている。これらの比較的短時間に広範囲の状況をより多くモニタリングできる技術の開発や推移予測手法の確立・高度化が重要である。

- ②災害情報をリアルタイムで推定・予測・収集・共有し、被害最小化や早期復旧につなげる技術の研究開発

発災時に対応可能な有限のリソースで被害の最小化を図り、早期の復旧を実現するため、リアルタイム被害推定・予測、構造物の即時被害判定、被害状況や対応可能なリソース等の情報共有、対応状況や復旧・復興状況

の把握・分析、防災業務手順の標準化・適正化、防災力向上等に資する研究開発に取り組む。

災害が生じた際にその後の復旧に向けた対応を迅速に行うために、リアルタイム被害推定は有効である。地震災害の被害把握に当たっては、IoT技術による建物に設置したセンサや監視カメラの映像等からの地震波形の推定、被害状況の抽出等の技術や、遠隔操作型ロボットや小型のUAVによる臨場性の高い災害現場の高精度可視化技術等の確立が重要となる。また、各種センサからのリアルタイム情報を一元的に集約・管理する統合データベースの開発が必要となる。

発災後の支援対応を適切かつ迅速に行うためには、各種センサからの情報を含む災害現場からの入力情報をその種類に関わらず、インタラクティブに入力・共有ができ、更に様々な情報を適切かつ優先順位をつけて提供できることや、出力対象に応じた情報を整理・分析するための情報トリアージ機能の確立、立場や状況に応じた意思決定を支援するためのパーソナルアシスタント機能の確立、必要な情報や利用者の要望等に迅速かつ効率的な対応ができるためのコンシェルジュ機能の確立等が重要となる。

### ③発災直後の応急対応から被災者の生活再建支援等を含む復旧・復興対策に必要な研究開発

発災直後のフェーズはもちろん、更に数年以上が必要とされる復旧・復興のフェーズにおいて生じる膨大な災害対応について、広域応援態勢の確立やトリアージ（対応の優先度の決定）等も含め、業務を支援する技術の構築に資する研究開発に取り組む。

発災後の対応を迅速かつ適切に実施するために、災害種別に応じて、現場対応から意思決定までそれぞれの立場での対応手順を標準化することが重要である。実際の対応においては、危機対応マネジメントとガバナンスも重要であることから、災害種別の対応における時系列行動記録（クロノロジー）の蓄積とその解析が必要である。

行政を対象とした防災業務支援システムについては、発災直後の緊急対応だけを対象とするのではなく、数年以上が必要とされる復旧から復興のフェーズに生じる膨大な災害対応業務に対応し、また、単一の自治体にとどまらず広域な行政区域に対応するような、被災者支援業務に対応できるシステムの開発と実用化を図る必要がある。

被災者の迅速な生活再建に向け、被害認定の判定の技術向上と効率化を図るとともに、地域全体の復旧・復興のプロセスとあわせて、個々人の自律した再建を促しつつ、復興感（メンタルな部分を含めた復興の程度の測

定と評価)を高めて「より良い回復」の実現に資する研究開発を進めていくことが重要である。

## II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策

### (1) 人材育成

自然災害の観測・予測に当たっては、長期にわたる観測の継続に加えて、観測データを的確に評価できる人材を育成し確保することが不可欠である。また、今後は複合・誘発災害の予測と対策に対応できる人材の確保を始め、特に、従前の観測研究に加え、多くの他分野との連携・融合を図り、観測・予測から防災・減災対策まで見据えた一体的な研究の推進及び広範な知識と高度な技能を有する研究者の育成・確保を目指し、レジリエントな社会構築に結びつけることが重要である。さらに、人材の育成、キャリアパスの確保に当たっては、産学官が協力して取り組む必要がある。

### (2) オープンサイエンスの推進

自然災害科学分野の研究発展や人材育成のためにも、観測データや数値モデル等のオープン化は、より一層積極的に進めていくべきである。そのため、基盤的観測の安定的な継続、情報発信の充実等を図るとともに、各機関の有する観測データや研究成果を一元化し研究コミュニティで共有する仕組みづくりを進める必要がある。

### (3) オープンイノベーション(産学連携)の推進

IoT等の活用など、産学官が密接に連携して研究開発を進める必要のある分野は多岐にわたっている。災害発生時の事業継続能力の向上と産業界等でのプラスの経済的価値への転換を目指して、産学官の人材・情報・技術を糾合した防災科学技術イノベーションの中核拠点(ハブ)を階層的に構築することを進める。

なお、連携に当たっては、官が整備するデータだけでなく、民間の保有するデータも積極的に活用し、研究段階から社会実装の方法論なども検討しつつ、災害発生時の被害軽減と経済の持続的な発展につながるよう、研究開発を進めていく必要がある。

### (4) 知的財産・標準化戦略

研究開発の成果の普及及び利活用を支援し、社会に最大限の価値をもたらすよう、知的財産権の戦略的な取得・管理、研究開発成果の公表、権利化、許諾等に係る知的財産マネジメントを行う必要がある。なお、知的財産について、

研究開発に取り組んだ研究者等が正当に評価・奨励される仕組みが整備されることが望ましい。

また、災害発生時に効果的な情報共有を実現するためには、情報システムの標準化を進め、府省、地方公共団体等の間に存在するギャップを埋める努力が必要である。

#### (5) 社会との関係深化

社会との関係を深化させるためには、研究者は基礎研究の重要性に留意しつつも社会が求める解決法を研究開発する努力が必要であり、災害対応、リスクコミュニケーションの観点から理学・工学的なハザード研究の進め方を考える姿勢を徹底することが必要である。

そのためにも、多様な主体と密接に連携し、ワークショップや社会活動等を通じて対話と協働を図り、地域特性・社会のニーズを把握した研究開発を進め、その成果は、多様な地域に適用可能となるよう弾力性を確保しながら、着実に社会実装・社会還元を図っていくべきである。

また、大規模な災害が発生した場合には、研究者が積極的に現地に赴き、各多様な主体と連携・協働した災害現場での支援を通じて現場のニーズを把握し、その後の研究開発に反映させていくことが重要である。特に、発災直後の被害拡大防止及び復旧・復興の実効性を高めるためには状況把握や情報共有が必要なため、防災科学技術に基づいた情報提供を積極的に行い、フィードバックを受けることが有効である。

#### (6) 国際的な展開

大規模な自然災害はその発生頻度が非常に低く、災害経験や事例等の研究成果は極めて貴重であることから、災害の実相を探求するために、海外の研究機関・国際機関と連携した共同研究の実施や協定の締結等を積極的に推進し、我が国の国際的な位置づけの向上を図っていくことが望ましい。

また、海外で大規模な災害が発生した場合には、現地調査や国際共同研究を積極的に実施することが重要である。

## 第5章 国家戦略上重要な基幹技術の推進

### I. 大目標

航空・原子力科学技術については、産業競争力の強化、経済・社会的課題への対応に加えて、我が国の存立基盤を確固たるものとするものであり、更なる大きな価値を生み出す国家戦略上重要な科学技術として位置付けられるため、長期的視野に立って継続して強化していく。

原子力科学技術については、安全性・核セキュリティ・廃炉技術の高度化等の原子力の利用に資する研究開発を推進する。さらに、将来に向けた重要な技術である革新的技術の確立に向けた研究開発にも取り組む。

東日本大震災からの復興の障害となっている放射性物質による汚染等への対応が求められている。

#### 1. 大目標達成のために必要な中目標（航空科学技術分野）

航空科学技術について、我が国産業の振興、国際競争力強化に資するため、社会からの要請に応える研究開発、次世代を切り開く先進技術の研究開発及び航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発を推進する。

##### （1）中目標達成状況の評価のための指標

###### ■アウトプット指標

- ①航空科学技術の研究開発の達成状況（JAXAが実施している共同/委託/受託研究数の観点も含む）
- ②航空科学技術の研究開発課題数（実施計画以上の実績があった研究開発課題数）

###### ■アウトカム指標

- ①航空科学技術の研究開発における連携数（JAXAと企業等との共同/受託研究数）
- ②航空科学技術の研究開発の成果利用数（JAXA保有の知的財産（特許、技術情報、プログラム/著作権）の供与数）
- ③航空分野の技術の国内外の標準化、基準の高度化等への貢献

##### （2）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

###### ①社会からの要請に応える研究開発

世界市場の伸びを大幅に上回る「超成長産業」を目指し、完成機事業の継続・発展、国際共同開発における分担率の拡大や、装備品産業の育成を図る必

要がある。以下の研究開発に取り組み、現在、民間航空機に求められている、安全性・環境適合性・経済性において、他国よりも優位な技術を早急に獲得する。

#### ア. 安全性向上技術の研究開発

我が国の航空機事故で大きな割合を占める乱気流による事故を防止するとともに、我が国にとって急務である装備品産業の育成に貢献するために、装備品メーカー、機体メーカーと連携し、航空機前方の晴天乱気流を検知してパイロットに警告する技術と乱気流遭遇時の機体動揺を低減させる技術を組み合わせさせたウェザー・セーフティ・アビオニクス技術を、飛行実証等を通じ確立する。

乱気流以外による主な事故要因として挙げられる特殊気象（雪氷・雷・火山灰等の航空機に影響を与える気象）等の外的要因及びヒューマンエラーに対して、それらの影響を予知・検知・防御する技術の研究開発を進め、安全性の向上を図る。

さらに、災害時における航空機（無人機を含む）と衛星を統合した安全で効率的な救難航空機統合運用システムや、ヘリコプターの高速化等により、より多くの要救助者の救助を可能とする技術の研究開発を行う。また、無人機の目視外運用技術等、無人機の利用拡大に資する技術の研究開発を行う。

#### イ. 環境適合性・経済性向上技術の研究開発

エンジンについては、国際競争力強化のため、ファン及び低圧タービンの軽量化、高効率化を進めるとともに、JAXAに実証用エンジンとしてF7エンジンを整備し、国内メーカーが次の国際共同開発においても設計分担を狙えるレベルまで技術成熟度を高める。また、次世代エンジンの鍵となるコアエンジン技術として、低騒音化技術、低排出燃焼器技術、耐熱材料技術等、将来産業界が分担率の拡大を狙える技術について実用性の高い技術開発を行う。

機体については、空港周辺地域の騒音低減のボトルネックになっている高揚力装置及び降着装置の低騒音化技術の研究開発を行い、将来の旅客機開発並びに装備品開発に適用可能となるように技術成熟度を高める。また、乱流摩擦抵抗低減技術等の機体抵抗低減技術の研究開発を進め、飛行実証等の技術実証を行う。さらに、複合材を初めとした各種材料を、それぞれの特性を活かして機体に適用する等、材料開発から機体構造設計までをつなぐ技術の研究開発を行い、機体重量の飛躍的な軽量化を目指す。

運航技術については、拡大を続ける航空輸送需要に対応するため、交通量

や気象条件に合わせて最適な運航を行うことにより、空港容量の拡大と環境適合性の向上が両立する管制支援技術等の研究開発を行い、高密度運航の実現を目指す。

## ②次世代を切り開く先進技術の研究開発

我が国の航空科学技術を長期にわたり高めていくために、社会に飛躍的な変革をもたらす可能性のある以下の先進技術の研究開発を推進する。

### ア. 静粛超音速機統合設計技術の研究開発

これまでの研究開発で培った国際的優位性を拡大させるために、飛行実証された抵抗低減設計技術や低ソニックブーム設計技術を核として、超音速機の実現成立性を実証することを目指す。このために、想定されるソニックブーム基準と強化された空港騒音基準を満足し、かつ経済性にも優れた超音速機実現の鍵となる技術の要素技術研究開発を進めるとともに、個別要素技術を実機システムへ適用して有効性を確認するシステム設計研究を行い、低ソニックブーム／低抵抗／低騒音／軽量化に対する技術目標を同時に満たす機体設計技術を獲得する。これらの技術については飛行実証も視野に入れた技術実証構想を産業界と連携して策定する。あわせて、民間超音速機実現の鍵となる陸地上空の超音速飛行に必要な国際民間航空機関（ICAO）における国際基準策定に貢献する。

### イ. 革新的技術の研究開発

国際航空輸送協会（IATA）が掲げる「2050年までにCO<sub>2</sub>排出量半減」という目標を達成するために期待される革新的技術として、ソフトウェアとハードウェアの両面から、モーター技術、電源技術、ハイブリッド推進技術等の電動航空機技術の研究開発を進める。また、水素等の代替燃料の利用も視野に加えたエミッションフリー航空機技術、極超音速機技術等の研究開発を行う。これらの革新的技術の研究開発を行うことにより、将来国際的に優位性を持つキー技術の獲得を目指す。

## ③航空産業の持続的発展につながる基盤技術の研究開発

我が国の航空産業の持続的な発展に向けて、我が国が得意とする数値流体力学（CFD）等の数値シミュレーション技術を飛躍的に高めるとともに、試験・計測技術、材料等の評価技術等の基盤技術を維持、強化していくことが重要である。

特に、航空機開発の高速化、効率化、高精度化に貢献する航空機設計技術の

確立を目指し、非定常 CFD 解析技術をベースに空力、構造等の多くの分野を統合した解析技術（例：統合シミュレーション技術）等の開発を行う。

## 2. 大目標達成のために必要な中目標

（福島第一原子力発電所の廃炉やエネルギーの安定供給・原子力の安全性向上・先端科学技術の発展等）

「エネルギー基本計画」において位置づけられているとおり、原子力は重要なベースロード電源であり、資源の乏しい我が国にとって重要なエネルギー源の一つである。また、地球規模の問題解決や放射線利用等による科学技術・学術・産業の発展に寄与するための重要な役割も担っている。さらに、東京電力福島第一原子力発電所事故をはじめとするあらゆる原子力に関する事故の再発の防止のための努力を続けていく必要がある。

文部科学省においては、こうしたエネルギー政策や科学技術政策等を踏まえ、東京電力福島第一原子力発電所事故を受け、廃炉や放射性物質による汚染への対策等に必要な研究開発を推進すること、及びエネルギーの安定供給や原子力の安全性向上、先端科学技術の発展等に資する研究開発成果を得ることを中目標として設定する。

### （1）中目標達成状況の評価のための指標

#### ■アウトプット指標

- ①原子力分野における査読付き論文の公開数
- ②原子力分野における研究成果報道等発表数

#### ■アウトカム指標

- ①除染や廃炉に必要な研究開発の取組の進捗状況、廃止措置に資する研究の推進に関する取組の進捗状況
  - ・特許等知財
  - ・除染効果評価システムの自治体等ユーザーへの活用件数
  - ・国際共同研究棟等拠点の整備状況
- ②東京電力福島第一原子力発電所事故を踏まえた安全性向上のための研究開発の取組の進捗状況
  - ・関係行政機関、民間を含めた事業者等からの共同・受託研究件数、及びその成果件数
  - ・特許等知財
  - ・学会賞等受賞

③独創性・革新性の高い科学的意義を有する研究成果の創出状況等

- ・ 特許等知財
- ・ 学会賞等受賞
- ・ 安全基準作成の達成度
- ・ 試験研究炉の運転再開に向けた取組状況（定性的観点）
- ・ 必要な研究基盤の検討、整備状況（定性的観点）

④高速炉の研究開発等の進捗状況

- ・ 国際会議への戦略的関与の件数
- ・ 特許等知財

⑤独立行政法人通則法に基づく主務大臣による業務実績の評価結果のうち、標準評価（B 評価）以上の評価を受けた項目の割合

⑥原子力システム研究開発事業や英知を結集した原子力科学技術・人材育成推進事業における中間評価及び事後評価での評価のうち、計画通りの成果が挙げられ、又は見込まれるとされた A 評価以上の課題の件数割合

**（２）中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組**

①福島第一原子力発電所事故の対処に係る、廃炉等の研究開発

東京電力福島第一原子力発電所の廃炉等世界的にも前例のない困難な課題が山積しており、これらの解決のための研究開発の重要度は極めて高い。エネルギー基本計画等に示された福島の再生・復興に向けた取組を踏まえ、東京電力福島第一原子力発電所の安全な廃止措置等を推進するため、東京電力、国際廃炉研究開発機構（IRID）、原子力損害賠償・廃炉等支援機構（NDF）とも連携・協力をしつつ、国内外の英知を結集し、安全かつ確実に廃止措置等を実施するための研究開発や人材育成を加速する。また、環境モニタリング・マッピング技術開発や環境動態に係る包括的評価システムの構築及び除染活動支援システムの開発等を進める。

②原子力の安全性向上に向けた研究

東京電力福島第一原子力発電所事故を受け、原子力の利用においては、いかなる事情よりも安全性を最優先する必要があることが再確認された。また、エネルギー基本計画に示されているとおり、原子力利用に当たっては世界最高水準の安全性を不断に追求していく必要がある。そのため、軽水炉等の安全性向上に資する燃材料及び機器、原子力施設のより安全な廃止措置技術の開発に必

要な基盤的な研究開発を実施し、関係行政機関、原子力事業者等が行う安全性向上への支援等を実施する。また、原子炉施設の規模に合わせた適切な安全性の確保手段として、軽水炉以外の施設に関する安全対策に関する研究についても重要である。

### ③原子力の基礎基盤研究

核工学・炉工学・燃料工学など原子力の推進に必要な基礎基盤研究及び幅広い科学技術・学術分野における革新的成果の創出につながる中性子利用研究等の推進は重要である。特に、原子力分野の研究には大規模・特殊な施設の利用が不可欠である。例えば、基礎基盤研究の推進に当たっては、高速中性子による燃料・材料開発が実施できる高速実験炉「常陽」、中性子利用のための JRR-3、及び中性子照射による治療等に資する KUR をはじめとした施設が必須である。研究炉の再稼働や核燃料使用施設等のその他施設を含めた新規規制基準への対応や、高経年化対策に着実に取り組むことが必要である。また、今後必要となる原子力研究基盤として機能を果たす研究施設の具体化が必要である。加えて、エネルギー基本計画を受けて、固有の安全性を有し、水素製造を含めた多様な産業利用が見込まれる高温ガス炉に係る研究開発を国際協力の下で推進することも重要である。

### ④高速炉の研究開発

エネルギー基本計画に基づき、核燃料サイクルを推進するとともに、高速炉の研究開発に引き続き取り組む。高速増殖原型炉「もんじゅ」については、原子力関係閣僚会議において、原子炉としての運転は再開せず、今後、廃止措置に移行し、併せて今後の高速炉研究開発における新たな役割を担うよう位置付けるとの『『もんじゅ』の取扱いに関する政府方針』が決定されたことから、安全確保を前提に、本方針に基づく作業を進める。高速増殖炉「常陽」については、原子力関係閣僚会議において決定された「高速炉開発の方針」を踏まえ、再稼働に向けた取組を積極的に進める。

## 3. 大目標達成のために必要な中目標（原子力分野の研究・開発・利用の基盤整備について）

原子力に係る人材の育成・確保、核不拡散・核セキュリティに資する活動、国際協力の推進、電源立地対策としての財政上の措置などを通じ、原子力分野の研究・開発・利用の基盤整備を図る。

## (1) 中目標達成状況の評価のための指標

### ■アウトプット指標

- ①原子力分野における査読付き論文の公開数
- ②原子力分野における研究成果報道等発表数

### ■アウトカム指標

- ①放射性廃棄物減容化研究開発等の推進の進捗状況
  - ・高レベル放射性廃液のガラス固化処理本数、プルトニウム溶液の貯蔵量（未処理分）
  - ・原子力施設の廃止措置及び放射性廃棄物の処理処分の計画的遂行状況（定性的観点）
  - ・高速炉及びADSを用いた核変換技術や地層処分技術等の研究開発成果の創出状況（定性的観点）
- ②原子力施設に関する新規規制基準及び安全確保対策等の取組の進捗状況
  - ・原子力施設に関する新規規制基準への対応状況等（定性的観点）
  - ・事故・トラブルの件数
- ③独立行政法人通則法に基づく主務大臣による業務実績の評価結果のうち、標準評価（B評価）以上の評価を受けた項目の割合。
- ④丁寧な対話活動等を通じた社会の理解度の状況

## (2) 中目標達成のために重点的に推進すべき研究開発の取組

### ①放射性廃棄物の処理・処分に関する研究開発等

エネルギー基本計画に示されているとおり、原子力利用に伴い確実に発生する放射性廃棄物について、その対策を確実に進めるための技術が必要である。また、資源の有効利用、高レベル放射性廃棄物の減容化・有害度低減等の観点から、我が国の基本方針である核燃料サイクルの推進を支える技術が必要である。このため、高レベル放射性廃棄物の減容化・有害度低減の研究開発を実施する。また、高レベル放射性廃棄物処分技術等に関する研究開発を実施するほか、原子力施設の廃止措置及び放射性廃棄物の処理・処分を計画的に遂行する技術開発等に取り組む。

特に、核燃料物質や大量の廃棄物を抱えた高経年化施設の安全の確保のための維持管理には莫大<sup>ぼくだい</sup>な費用が必要となる。このため、研究開発に伴い発生する

廃棄物（RI 廃棄物を含む）の処理・処分や計画的な廃止措置は、研究開発に必須の事項であり、そのための長期の取組に係る計画が必要となる。

#### ②原子力施設に関する新規制基準への対応等、施設の安全確保対策

原子力規制委員会の定める新規制基準に対応するために必要な改修・整備等を行う。新規制基準については、原子力機構が持つ高温工学試験研究炉（HTTR）や JRR-3 等の試験研究炉、大学が持つ研究用原子炉のみならず、高レベル放射性廃棄物の減容化・有害度低減等の研究開発に必要な施設や使用済燃料や廃棄物を安全に貯蔵・管理するために必要な施設など業務の遂行に必要な施設・設備について多岐に亘り<sup>わた</sup>その特性に応じた対応を進める必要がある。また、原子力施設の安全を確保するため、高経年化対策等安全確保対策を行う。

#### ③核不拡散・核セキュリティに資する技術開発等

将来の核燃料サイクル施設等における計量管理技術や核拡散抵抗性向上に資する技術開発を実施する。また、核セキュリティ・サミットのコミットメントである国際的な核不拡散・核セキュリティへの貢献の観点から、国際及び国内の動向を踏まえつつ核物質の測定・検知、核鑑識等、核不拡散・核セキュリティ強化に必要な技術開発や核不拡散・核セキュリティ分野の人材育成等を行う。

## II. 研究開発の企画・推進・評価を行う上で留意すべき推進方策

### （1）人材育成

#### ①航空科学技術分野

第5期科学技術基本計画においても、科学技術を担う人材の育成が謳<sup>うた</sup>われているところであり、航空科学技術を担う人材を育成する必要がある。

このため、我が国の航空科学技術の研究開発の中核機関である JAXA と、産業界、大学・学協会が連携し、特に航空分野を目指す学生等に対し、魅力的で実践的な教育機会を提供することが重要である。具体的には、共同研究、公募型研究やクロスアポイントメント、連携大学院制度及び技術研修生制度等のツールを活用し、航空科学技術を担う人材の育成を推進する。

#### ②原子力科学技術分野

原子力分野における人材の育成・確保は、原子力分野の研究・開発・利用の基盤を支え、原子力施設の安全確保や古い原子力発電所の廃炉等の課題の解決のために

重要である。大学や原子力機構が持つ研究用原子炉を用い、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉や運転中の発電炉の安全確保を支えるとともに、中性子を用いた科学研究等の原子力に係る研究開発を通じた人材育成に加えて、産学官の関係機関が連携し、人材育成資源を有効に活用することによる効果的・効率的・戦略的な人材育成取組の支援により、原子力人材の育成・確保を行う。

## (2) オープンサイエンスの推進

### ①航空科学技術分野

航空科学技術分野については、オープン・アンド・クローズド戦略及び知的財産の実施等に留意し、JAXAの研究開発で得られた協調領域における研究/試験データ等について、データベース公開に向けた取組や学協会との連携活動を強化する。

### ②原子力科学技術分野

国内外の原子力科学技術に関する学術情報を幅広く収集・整理・提供し、産業界、大学等における研究開発活動を支援できるよう努めることが重要である。この際、発信を行う対象をそれぞれに意識し、公開や説明の仕方に十分な留意が必要である。特に、東京電力福島第一原子力発電所事故に係る研究情報は国内外からの関心も高く、国内外の研究成果、参考文献情報、政府関係機関等が発信するインターネット情報等について、関係機関と連携の上、効率的な収集・発信を行うことや、原子力情報の国際的共有化と海外への成果普及を図る観点から、国内の原子力に関する研究開発成果等の情報を国際機関を含め幅広く国内外に提供することには意義があるため、例えば、原子力機構「福島アーカイブ」の整備・拡充・発信等によって、成果を社会還元させるとともに国内外の原子力に関する研究環境を充実させる。

## (3) オープンイノベーション（産学連携）の推進

### ①航空科学技術分野

国際競争が激化している航空産業では、産業界、大学、公的研究機関との間の連携が行われているものの、持続的にイノベーションを生み出す環境を形成するため、産学官の人材、知、資金を結集させることは重要である。

このため、JAXAは、オープンイノベーションに適した知的財産及び人事制度の仕組みを活用することで、イノベーションを誘発する人材の流動化を推進する。特に、航空分野における協調領域に関しては、コンソーシアムの構築等を通じて、産学連携、異分野異業種も含むオープンイノベーションの体制を強化する。また、JAXAが技術的な強みを有する分野については、JAXAが中核となって、国内外の人

材・英知を結集し研究活動を実施するなど、社会実装への橋渡しを意識した活動を推進する。

## ②原子力科学技術分野

成果を広く国民・社会に還元するとともに、イノベーション創出につなげるため、産学官の連携強化を含む最適な研究開発体制の構築等に戦略的に取り組むことが重要である。例えば原子力機構では、東京電力福島第一原子力発電所事故の対処など国家的・社会的な課題解決のための研究開発において、研究開発の計画段階からニーズを把握し、成果の社会実装までを見通した国際共同研究棟での研究を実施するなど、産学官の効果的な連携とそのための適切な体制を構築する。また、基礎研究分野等においては、創出された優れた研究開発成果・シーズについて、産業界等とも積極的に連携し、その成果・シーズの「橋渡し」を行う。さらに、J-PARC や JRR-3 等の研究施設については、産業界や大学等との供用により、新たな先進的研究の萌芽<sup>ほうが</sup>となる幅広い研究分野の研究者間の相互交流を促進する。

## (4) 知的財産・標準化戦略

### ①航空科学技術分野

経済的波及効果が高い航空産業は、国際競争が激化しており、国際標準化の対応の遅れは国際競争力低下に直結するため、世界と協調し、産業界と連携した迅速かつ的確な国際標準化戦略が重要である。

このため、特にアビオニクス関連技術をはじめとする航空装備品の認証については、JAXA は、産業界と連携して関連する技術開発を進め、我が国で最新の国際標準を満たした機能・性能要求から検証までのプロセスが迅速に完了できるよう支援を強化する。また、超音速機技術など国際的な標準が確立していない分野についても、国際標準化に貢献するため、JAXA は、関係機関と連携の上、研究開発の成果を ICAO 及び国際標準化機構（ISO）等に対して積極的に提案する。

また、知的財産戦略は、知的財産を活用してイノベーションの創出に一層つなげていくことが重要である。このため、JAXA は、研究開発成果の価値を最大化するため、協調領域/競争領域を踏まえた権利化と秘匿化を適切に使い分けるオープン・アンド・クローズド戦略に留意し、知的財産の取得、管理、活用を推進する。

### ②原子力科学技術分野

産業界、大学等と緊密な連携を図る観点から、共同研究等による研究協力を推進し、研究開発成果を創出することが必要である。創出された研究開発成果については、その意義や費用対効果を勘案して、原子力に関する基本技術や産業界等が活用

する可能性の高い技術を中心に、例えば、原子力機構が精選して知的財産の権利化や有効活用を進めることが重要であり、また、技術交流会等の場において保有している特許等の知的財産やそれを活用した実用化事例の紹介を積極的に行うなど、連携先の拡充を図る。

## **(5) 社会との関係深化**

### **①航空科学技術分野**

航空科学技術を推進する上では、幅広いステークホルダーとの対話による関係深化は重要である。具体的には、JAXA は、シンポジウム、タウンミーティング、研究開発施設等の一般公開等のイベントを通じて、研究開発成果の発信・普及、対話を推進する。

### **②原子力科学技術分野**

我が国の原子力利用には、原子力関連施設の立地自治体や住民等関係者を含めた国民の理解と協力を頂くことが必要である。そのため、安全や放射性廃棄物、放射線の人体への影響など国民の関心の高い分野を含めた積極的な情報の公開や対話、学校教育の場などにおける放射線等に関する教育への取組支援及びアウトリーチ活動等の強化による社会からの信頼確保に取り組む。また、研究開発成果の社会還元や、社会とのリスクコミュニケーションの観点を考慮しつつ、丁寧な広聴・広報・対話活動等をフィードバックを受けつつ進め、立地地域からの信頼を得る。

## **(6) 国際連携**

### **①航空科学技術分野**

急速にグローバル化が進む航空産業及び航空科学技術の裾野の広がりを踏まえ、国際的な互惠関係を効果的に構築し研究開発に取り組むことも重要である。JAXA は、アメリカ航空宇宙局 (NASA) 等の世界の公的航空技術研究開発機関で組織される国際航空研究フォーラム (IFAR) 等への主体的な参画とともに、NASA 等との研究協力を通して、効率的な国際的互惠関係の構築及び我が国の航空科学技術のプレゼンス向上を図る。

### **②原子力科学技術分野**

効率的な研究開発の実施、原子力開発に係る我が国の優位性の確保、国際貢献等の観点から、原子力利用先進国やアジア諸国等との間で、二国間協力、経済協力開発機構/原子力機関 (OECD/NEA)、国際原子力機関 (IAEA)、第4世代原子力システム国際フォーラム (GIF)、アジア原子力協力フォーラム (FNCA) 等を活用した多国間協力を通じて、目的を明確にした国際共同研究、人材交流、意見交換等を実施する。特

に、東京電力福島第一原子力発電所の廃炉に向けた協力、高速炉や高温ガス炉等の次世代原子炉にかかる協力や人材育成活動等を積極的に推進する。

#### **(7) 大型試験設備の整備（航空科学技術分野）**

国際競争力を持った航空機開発を行うためには、基礎から技術実証までの一貫した研究開発を実施するために必要な試験設備を整備することが重要である。一方、大型で高性能な試験設備（風洞、実証エンジン試験設備、スーパーコンピュータ等）については、大学や民間企業が独自に整備するにはリスクが高く、我が国の航空科学技術の研究開発の中核機関である JAXA が整備・維持・運用するとともに、外部にも供用することが効率的である。

そのため、大型試験設備については、JAXA のみならず産学からの要望を考慮し、戦略的な整備・維持・運用（最先端の試験・計測技術等の獲得、機能向上、老朽化対策等）を行い、最大限の利活用に努める。

## 第6章 研究計画・評価分科会における研究開発評価の在り方

### I. 基本的な考え方

#### 1. 研究開発評価の在り方の策定の背景

第5期基本計画の策定を受けて、実効性のある研究開発プログラム評価のさらなる推進、アイデアの斬新さと経済・社会インパクトを重視した研究開発の促進、研究開発評価に係る負担の軽減の観点から、平成28年12月に「国の研究開発評価に関する大綱的指針」（以下「大綱的指針」という。）が改定された。これに伴い、文部科学省では、評価を行う基本的な考え方をまとめたガイドラインである「文部科学省における研究及び開発に関する評価指針」（以下「文部科学省研究開発評価指針」という。）について必要な改定を行うこととしている。

#### 2. 研究計画・評価分科会における研究開発評価

本研究開発計画の目標達成及び次の政策・施策に向けた取組等に活かすため、本分科会における研究開発評価については、大綱的指針及び文部科学省研究開発評価指針に基づき、次の評価を実施する。

- ① 中目標を単位とする研究開発プログラムの評価
- ② 重点課題<sup>※1</sup>の評価

※1：総額（5年計画であれば5年分の額）が10億円以上を要することが見込まれる新規・拡充課題及び研究計画・評価分科会において評価することが適当と判断された課題

#### 3. 研究開発評価の改善への新しい取組

##### (1) 「研究開発プログラム」<sup>※2</sup>単位での評価

研究開発計画の評価については、研究開発計画に掲げた中目標を「研究開発プログラム」として、俯瞰的な評価を新たに行うこととする。その際、分科会が所管する内局予算による個別の研究開発課題の評価結果に加え、当該中目標に係る国立研究開発法人の行う研究開発課題の評価結果（国立研究開発法人評価の結果等）や政策評価における事前分析表等を活用し、中目標達成のための研究開発の取組全体を総合的に評価する。

※2：「研究開発プログラム」とは、研究開発が関連する政策・施策等の目的に対し、それを実現するための活動のまとまりとして位置づけられる。

##### (2) 政策評価との関係

研究開発計画に掲げた中目標と政策評価における達成目標を可能な限り整合

させることで、本分科会における中目標（研究開発プログラム）の達成状況の評価を政策評価に反映するようにする。

## II. 対象別評価の実施

### 1. 中目標を単位とする研究開発プログラムの評価

#### (1) 評価の目的

研究開発プログラムの評価は、設定した中目標ごとに評価を実施することにより、実施の当否を判断するとともに、研究開発の質の向上や運営改善、計画の見直し等につなげることを目的とする。

#### (2) 評価の時期

研究開発プログラムの評価は、進捗・達成状況の確認等をするとともに、政策評価への反映や次の施策等に活用するため、課題等の進捗状況や政策評価の時期を考慮して、研究計画・評価分科会で研究開発プログラムごとに定める時期とする。

事前評価は、評価の重複等を避ける観点から、重点課題の事前評価時に、研究開発プログラムとの関係性を明らかにすること等により、その実施を省略することができることとする。また、必要に応じて追跡評価を行う。

#### (3) 評価方法等

評価方法等の詳細は、評価実施年度ごとに研究計画・評価分科会において決定する。

### 2. 重点課題の評価

#### (1) 評価の目的

研究開発課題の評価は、課題の採否を判断するとともに、実施されている研究開発の質の向上や運営改善、計画の見直し等につなげることを目的とする。

#### (2) 評価の時期

重点課題の評価は、当該課題の実施前及び実施後にそれぞれ事前評価及び事後評価を実施する。また、必要に応じて研究計画・評価分科会で定める時期に中間評価及び追跡調査を実施する。

#### (3) 評価方法等

評価方法等の詳細は、評価実施年度ごとに研究計画・評価分科会において決定する。

### 3. 特に留意すべき事項

研究開発プログラム及び重点課題の目的、規模、段階などに応じ、以下の項目に留意しつつ実効的な評価を行う。

#### (1) 中目標の達成状況を把握するために設定する指標（目標値）

中目標の達成状況を把握するため、各中目標達成状況の評価のための指標で設定されたアウトプット指標においては、定量的に判断するために、可能な限り目標値を設定する。ただし、定量的指標は対象の一側面を表しているにすぎないことから、各種の定性的指標等の情報も活用しつつ、総合的に評価を行う。この場合、定性的な評価がより本質的な意味を持つ場合もあるため、設定された目標値そのものが自己目的化され、本来の目指すべき状況とのかい離や望まざる結果を招かないよう、留意することが必要である。また、アウトカム指標についても継続的にモニタリングを行う。その他、指標や目標値は、科学技術の急速な進展や、社会や経済の大きな情勢変化等に応じて、適宜見直されるべきものである。

#### (2) 挑戦的（チャレンジング）な研究開発の評価

挑戦的（チャレンジング）な研究開発に関しては、社会情勢の変化や研究開発の進捗状況等に応じ、目標やアプローチの妥当性について検証し、見直しを実施する。また、直接的な研究開発成果における目標の達成度に加え、関連する制度、体制、運営といった研究開発過程（プロセス）が成果の最大化に向けて適切に対応し、組み合わせられたたかという視点での評価も必要である。さらに、技術的な限界・ノウハウ・うまくいかなかった要因等の知見、副次的成果や波及効果、研究開発プログラム全体として得られる成果の大きさなども積極的に評価するなど、ハイリスクであることを前提とした評価項目・評価基準を設定する。

#### (3) 「道筋」の設定

中目標を達成するために、成果の受け手に対して、何を、いつまでに、どの程度届けるかといった具体的で実現可能な目標（アウトプット目標）と成果の受け手が行う活動及びその効果・効用として現れる価値（アウトカム目標）を、時間軸に沿った「道筋」として示すことにより、誰の責任で、何をどのように実施するのかを明らかにすることが重要である。本研究開発計画では、この「道筋」は、関係者がそれぞれの役割を明らかにした上で内容の妥当性についてコミュニケーションを図った結果や科学の進歩、得られた経験などを踏まえて試行を重ね、段階的に充実、見直しを図っていくこととする。

#### (4) イノベーションを生むためのマネジメントに係る評価

イノベーションを生むためには、研究開発を実施する主体の長のマネジメント力、成果の最大化のための体制作り、有機的な連携や多様な専門知の結集による実用化までを考慮した取組等を適切に評価に反映する。

特に、研究開発マネジメントの評価では、研究開発を実施する主体の長及びそれをサポートする者について、それぞれの役割と権限が明確にされている

か、また、実施主体の長のパフォーマンスについて評価することが重要であり、例えば、成果創出のためにどのようにリーダーシップを発揮しているかといった観点での評価も行う。

また、組織のミッションや、実施主体の長やその長をサポートする役割の者等が置かれている立場によって、実施主体やその長等の役割、権限、責任が異なり、それに応じて評価項目・評価基準も変わっていくことに留意する。

さらに、実施主体の長がどのように選定・任命されたか、誰がその任命責任を持っているのかを明確にする等、実施主体の長を任命する側の役割と権限の妥当性についても評価する。